
IS ~ 戦いの果て ~

約束のお守り

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS～戦いの果て～

【Nコード】

N1957T

【作者名】

約束のお守り

【あらすじ】

女尊男卑の世界で生きているオリ主が、ISや様々な人との出会いを経て、IS学園における騒動、ある世界から来た人達と共闘をしていくお話です。小説にはまり、アニメで更にはまってしまった。何番煎じか分かりません。筆者の初投稿です。よろしければ感想や誤字脱字等、よろしく願います。

出会い（前書き）

とうとう、やってしまった。

出会い

（あれ……ここはどこ？）

今にも沈みそうな太陽、それに照らされ夕焼けに染まる空。

周りは海に囲まれた小さな島のような島だ。はつきりと見えないが、その島に5人の女と2人の男がいる。

（一体何がおこっているんだ？）

そこでなにやら言い争っている。険悪な雰囲気が漂っていた。

話し合いに決着が着いたのか、島にいる7人は何かを念じていた。

（何だあれ？）

2人いる男のうち、背の低いほうがはつきりと見えた。その男の首には赤い石と金色のバラのような石がついた銀色の指輪の2つのネックレスと、左腕に白いブレスレットがあった。

それを見たのを最後に、世界が白い光に包まれた。

蝉の鳴き声で目が覚めると、白い天井が見えた。辺りを見ると、

（自分の部屋か……さっきのは何だったんだろう？）

ここは15年近く過ごした自分の部屋だった。ベッドの近くに置いてある時計は朝の9時を指していた。
ベッドから体を起こして、身支度をする

「暑い…高校受験の勉強なんてこんな暑い日にやるもんか」

俺はそう言っ、て、自転車で外に出た。市内に行くために森林に囲まれたコンクリートの道をはしっていた。周りを見渡しながら自転車をはしらせしていると、突然森林の中に黒い球体が現れた。

その中から灰色のボディで背中に大きなバックパックをつけている”何か”が落ちてきた。

「何だろう？……ISだね？」

（IS…正式名称「インフィニット・ストラトス」。宇宙空間での活動を目指し、開発されたマルチフォーム・スーツだ。しかしあまりのハイスペックにより、宇宙進出よりも飛行パワード・スーツとして軍事利用され、各国の軍の抑止力の中心になっている、はずだ。どうしてこんなところに？それにさっきの黒い球体は何なんだ？）

そんなことを考えていると、謎のISが光の粒子となって消えていた。ISの強制解除だ。

「危ない！」

無意識のうちに自転車から降りて、予想した落下場所までダッシュしていた。地面に落ちる前に受け止め、驚くべきことがわかった。

さつきの黒い球体よりも、ISが何でこんなところに落ちてきたことよりも驚くべきことが。

端正な顔立、黒のジャケットとズボン、ジャケットから見える緑のインナーが印象的で、しっかりとした体格の”男”だった。首には赤い石のネックレス、その男の近くに赤紫のソフトボールより少し大きい球体が転がっていた。

「男？」

原則としてISは女性しか使えない。ISが開発され数年がたったけど、今まで男性の操縦者がいたとは聞いたことがない。

（とりあえず、家まで運ぼう。何か事情がありそうだ。少し不安だけど、何だか顔色が悪いし。）

その人の顔色は悪く、何かつぶやいている。

「カ…ガ…リ……」

それから数日後、突然彼は俺の前から姿を消した。そして、謎のウサギの耳のようなカチューシャを頭部につけたグラマーな女性がいる、という噂を聞いた。

出会い（後書き）

入学はだいぶ遅れます。

LOST〜黄金と真紅の別れ〜（前書き）

やっと2話目ができた！
忙しい日々だった。

LOST―黄金と真紅の別れ―

「カガリ、目標ポイントまでもうすぐだ」

「ああ、分かった」

「モウスグ！モウスグ！」

アスランとカガリ、機械的な声の会話があった。

アスランとカガリはエターナルに向かっていた。

アスランはインフィニットジャステイス、カガリはストライクルージュに乗っていた。インフィニットジャステイスのコクピットには赤紫のハロがいる。

このハロはパイロットのサポート、戦闘及び機体のデータが有り、ある程度の整備なら可能だ。登録した単語を話せる機能もある。時折、未登録の言葉をしゃべることもあるが…

C・E・74年に起きたメサイア攻防戦から1年、今でもブルーコスモスとデステイニープランを支持していた残党による小規模な反抗運動が起きていた。その対策をオーブとプラントで対処することになった。

その会談を極秘で行うために、会談場所に指定された、エターナルに向かっていた。

小型艦では襲撃された際に反撃が厳しく、大型艦は今回の会談が

どこかに洩れる恐れがあった。そのため、2人はガンダムで向かっている。

しばらく続いていた沈黙を破ったのはカガリだった。

「なあ、やっぱりナチュラルとコーディネイターは相容れない存在なのか？」

めずらしくカガリが弱気だ。

（無理もないか…）

小規模な反抗運動にはカガリの暗殺未遂が頻繁にあった。地球の国家であるオーブがナチュラルとコーディネイターの共存してるからとプランに対して反抗したからの様だ。

今のカガリはユウナ・ロマと結婚してしまいそうになった頃の彼女とはまるで別人だが、まだ20歳にも満たない彼女には今回の事件で心身ともに疲れが見えていた。

「そんなことは絶対無い！」

弱気になっているカガリに叫んでいた。モニター越しに見るカガリが驚くのを見て、すぐに声の調子を戻して続けた。

「だが、彼らがコーディネイターとの共存を否定し、平和な暮らしを望む人々の脅威となるなら、撃つしかないのかもしれない」

俺とカガリは分かり合えた。いや、それ以上の関係だといっても

いい。俺たちの立場さえ同等なら……

「ありがとう……アスラン」

「ハロ！ゲンキ！カガリもゲンキダセ！」

「ハロもありがとな」

カガリが微笑みながら言ったその時、

「テッキセツキン！テッキセツキン！」

機体のアラートよりも先に、ハロが反応していた。

「クソっ！こんなところまで。カガリは下がっててくれ」

俺はここ最近の事件のことを考えるだけど、近づいてくる機体とその意図を理解できた。

「えっ！？」

ワンテンポ遅れて驚いたカガリだったが、

「ああ…分かった。気をつけてな」といって少し下がらせた。

（操縦が素人なわけじゃないのに、アスランだけを戦わせなきゃいけないのか）

カガリは自分の立場と不甲斐なさに悲しんでいた。

相手はストライクダガーの上半身と6本の足が特徴的なゲルズゲー1機のみだ。両腕のライフルを連射している。だが、アスランには最小限の動きで全てをかわしていた。

「クソッ！どうしてこんなこと！」

ビームをかわしながら近づいて、相手がかわすよりも先に、2本のビームサーベルが両肩を切り落とし、左足のグリフォン ビームブレイド で上半身と下半身を真っ二つに切り裂いた。

「っ！」

一瞬ためらいながら、ゲルズゲーの上半身を右足で後ろに蹴り飛ばした。

「アスラン！ウエ！ウエ！」

「何っ！？」

気づいたときには上方より、甲虫や甲殻類のような外観の機体が4本の脚部から強力なビームを発射する瞬間だった。

それをジャステイスは背中のリフターを分離させてかわした。分離したリフターが2本のビームを放ち、ジャステイスもビームライフルを撃った。

しかし、3本のビームは相手の機体に届くことは無く、リクレクターによって防がれてしまった。

その状態を待っていたかのように、リフターがビームの刃を展開させ突撃していった。展開していたリフレクターごと貫き、2本の脚を破壊した、ジャステイス本体もシールドに内臓していたビーム

ブーメランを投げ、残り2本の脚を破壊した。

「カガリ、無事か？」

「大丈夫だ、ありがとう」

決着が着き、2人が落ち着きを取り戻したその時、ハロの声が聞こえた。

「ナンカキタゼ！ナンカキタゼ！」

「今度は何だ！？……カガリ！後ろだ！」

突如、カガリの後ろに巨大な黒の球体が現れた。

「えっ！？」

ストライクが黒い球体に吸い込まれていく。

「コウホウチユーイ！コウホウチユーイ！」

気づいたときにはアスランの後ろにも同様の球体が現れ、ジャステイスも吸い込まれはじめていた。

「カガリ！」

「アスラン！」

お互いの名を呼び合い、2機が腕を伸ばすが、つながることは無

かった。

（俺は”力”を使って守る事しか出来ないのに、それすら出来ないのか…。カガリ…約束を守れなくてすまない）

俺はカガリと初めて戦場に出るときに交わした約束を思い出しながら、聞こえるはずの無い相手に向けて、謝罪の言葉を述べていた。

（これがアスランとの最後になるのかなあ、イヤだな…。結ばれる事は無くても、アスランには最後まで私の傍にいてほしかったなあ）

意識を失いながら、カガリはアスランのことを考えていた。最後まで最愛の男性の事を考えながら、カガリの意識は暗闇に落ちていった。

2機が消失した後の宇宙は、破片1つ動かなかった。

まるで、時間が止まったかのように…

LOST〜黄金と真紅の別れ〜（後書き）

MSの戦闘をだしてすみません
あと文が長くなってしまう

出会いから半年（前書き）

サブタイトルが適當すぎる…

登場人物の口調とか大丈夫だろうか…主に八口とか

出会いから半年

「ハロ！アスラン・ヅラ！」

日本では雪が降っている2月某日、ここは南太平洋にある、とある研究所。そこに白衣を着たアスラン・ザラがいた。となりにはペットロボット兼助手の赤紫のハロが、彼の横を跳ね回っている。元気そうなハロの声もここ数日徹夜の彼の頭には、鬱陶しく聞こえていた。

「ヅラじゃないし、ザラだと何度言えば…」

アスランはこっちにきてから、未登録のはずの言葉を頻繁に話すハロに頭を抱えていた。

（誰がやったかは何となく予想は出来るが、誰がヅラだ！俺はカツラではないのに…）

こちらの世界に来て出会った人達と別れた人の事を考えていた。

（カガリは今どうしているのだろうか……無事だといいが）

協力者もいて、個人的にも調査をしているが、一向に結果が得られずにいた。あんな時に守るべき最愛の人と別れた事を思い出すと胸が苦しくなる。

彼はここでISの開発、非公式でテストパイロットもやっていた。

ここはオーブ…南太平洋のある島に近年設立された、ISの民間

企業である。そのため、様々な国の研究者がいる。南太平洋に位置しているオーブではあるが、社長が日本人という噂もあり、日系人がそこそこいた。

そして、先日この民間企業に付属する形で一昨年設立された、工業専門学校の試験が行われた。この受験者の大半が最初からISの整備、開発を目的に受験してくる事が“IS学園”との違いだろう。IS整備、開発がメインのため、男もいるが、圧倒的に女が多い。

（彼も試験を受けていたのだろうか…）

アスランは半年ほど前に出会った、IS好きの少年のことを思い出していた。純粋な思いを持った黒い瞳の少年の事を。

（たしか、ここの専門学校を受けるといつていたな。突然の事だったとはいえ、連絡の1つでもしてやればよかったな）

アスランがそんな事を考えながら、研究所の廊下を歩いていた。

「おい、アスラン！」

アスランを呼ぶ声が聞こえた。アスランが振り向いたその先には作業服を着た老人がいた。

「ウモンしゃー…主任、おはようございます」

「ハロ！ウモン！ハロ！」

「おはよう、ハロもおはよう。連日徹夜のわりに元気そうじゃな。」

……任せてしまつて聞くのも何じやが、“アレ”はもう完成したのか？」

2人で共同で開発しているISの事だ。

「ええ、中身と武装は完成はしたんですが……顔の部分と名前がまだ思い出せませんか？」

「まだのようじゃ、スマンなあ。……しかし、ここまで実現できるとは思つていなかった」

「今までにない特徴を持ったISですが、私のと似た点もあったので、それにちよつと手を加えただけですよ」

そんな会話を交えながら、2人と1体？が食堂に入った。

「マリア君、おはよう」

「社長、おはようございます」

「2人ともおはよう」

食堂にいた栗色の長い髪、スーツ姿の20代後半の女性が微笑みながら返事をした。この社長を務める鈴木マリアだ。先ほどの老人はサモン・ウモン、普段は技術主任の仕事をしているが、実はこの社長である。マリアは彼の社長秘書で、2人はちよつとした知り合いらしい。

「待てせてしまつて申し訳ありません、マリア社長。例のモノはいただけますか？」

「ええ、社長権限で渡せるけど、どうしてなのかしら？今年の合格者のデータがほしいなんて。ひょっとして……気になる女の子でもいたの？」

マリアがいたずらっぽい目で見ながら聞く。

「それはまあ、その…何といいますか…」

「私も気になるな。いつものアスランらしくない」

齒切れが悪そうなアスランを見た、ウモンが続けて聞いてきた。

「主任まで…社長もやめてください」

（このまま、話をそらすわけにはいかないな）

「はあ…こちらに来る前に知り合った少年がここを受けると聞いていたので、もしかしたらと思っただけです」

アスランは観念して、返事をした。

「なあ…んだ、女の子じゃないんだ、残念」

「はあ…期待はずれじゃな」

アスランの反応に2人とも本気で残念がっていた。

「アスラン君、君もいい年なんだから、研究室に籠っていないで恋愛の1つでもしたらどうなの？若いうちにしか出来ないこともある

のよ
「よ」

「今はISの研究のほうが大切ですから」

マリアの問いにアスランは興味なさげに答えた

「あら、これまた残念」

「それよりデータをお願いします」

「せかつちねえ……はいどうぞ、データの他にもう一つプレゼントがあるから」

（もう1つの…プレゼント？）

頼んでいたデータと3フィッチテレビほどのサイズの紙袋を渡された。

「ありがとうございます、これかなり重いのですが、中身は何ですか？」

「自室に戻ってから見てみなさい」

首をかしげたアスランとハロが食堂を出ていった。

「あのアスランの知り合いってどんな子かしら？」

「わしも気になるね。ところで…何を渡したんじゃ？」

「ちょっとしたサプライズですよ。しばらくしたら分かります」

アスラン同様、首をかしげるウモンにマリアは微笑みながら答えていた。

（ISを使える男が増えたし、轡木さんからの頼みでもあるからね……“織斑一夏”か）

「やっぱり受かっていたか。アイツも相当頑張ったんだな」

アスランは自室のパソコンを前に嬉しさ半分、戸惑い半分といった表情をしていた。

（やっぱりやめさせるべきなのか？）

「ハロ？」

自分の変化に気づいた様子のハロに声をかけられた気がしたが、それどころではなかった。

（努力した結果が、兵器の開発に協力することなのか。その理由を分かるけど……それが本当にやりたいことなのか？）

アスランは自室に備えられた電話を取っていた

「こちら、アスラン・ザラです。入学試験の担当者をおねがいします……はい……よろしく願いします……では、失礼します」

受験番号 XXXXXX 泉谷 ヒロ

アスランが開いていたリストには夏に別れた少年の名があった。

（ヒロ、君には知らない事が多すぎる…）

受話器を置いたアスランはパソコンの画面を切り替え、現在開発中のISのデータを見ていた。見れば見るほど、彼がいた世界『C・^{「スミット・ニイラ」}E』の武装と似ていた。

俺やカガリがこの世界に来た理由、この世界で生きてきたウモン主任がこのISを作れた理由、これらのことは全てつながっている……そんな気がする

「ふう……」

一息ついたアスランに先ほど、マリアから渡された紙袋が目に入った。

「中身の確認はまた明日にしよう」

アスランは自室を後にし、ハロと研究室に向かった。

出会いから半年（後書き）

いつ頃入学できるかなあ

六月十日ちよつと修正

接触（前書き）

最近忙しい…

接触

アスラン・ザラが電話をした翌朝

とあるホテルの一室の洗面所の鏡で黒い瞳に、鳥の巣のようなものの凄い寝癖をつけた少年がこの世の終わりの様な顔をしていた。

「……………どうしよう……………」

そう嘆く少年は『受験番号 XXXXXX 泉谷 ヒロ』だ。

ここは、受験者の多くが宿泊してるオーブのある島の隣島のホテルで、こちらの島はリゾート施設として有名な場所となっている。

「落ち着かないと……すう、はあ……すう、はあ……」

ヒロは深呼吸をし、髪を整え、顔を洗って少し落ち着いてきたようだ

「もう一度状況を整理しよう」

それは昨日の夜に起こった。

俺は試験での疲れ、慣れない気候と場所による不快感が試験が終わった数日目でもなかなか回復出来ずにいた。

「疲れが抜けない…風呂に入りたい」

ちょうどシャワーを浴びて、ジャージ姿でフラフラな足取りでベッソに向かっていた。

「合格発表まで、あと3日かあ…長い、長いよあ…」

ベッドにうつ伏せになり、携帯電話を開いた。

「留守電と不在着信がある」

その番号には見覚えがあった。

「オーブの入学試験の担当部からだ…」

血の気が引いていくのが分かる。俺は震える手で留守電を再生した。

用件はこんな感じだ。

『明日、午前11時に研究所に来い』

ということらしい。誰が、何のためにかすら留守電には残っていなかった。

試験に関して何の不正もしていないはずだ。むしろ、そんなの不

可能だ。去年のカンニング事件のおかげで。

理由が分からない…おまけに研究所？

そんな場所に行かなくてはならないなんて、

疑問が深まるばかりだ。

そんな中でも疲れと眠気には勝てるはずが無く、気づいたら、朝の8時を過ぎていた。

そして今に至る

「悪い夢であって欲しかった、スタートラインの目の前なのに」

ヒロの嘆きは空しく洗面所に響いた。

時間は待つてくれないので、準備をして出かけようとした。

「あつ、テレビ消すの忘れた…」

『今話題の織斑いち……』

「お……り……む……ら？」

久しぶりにテレビでその名字を聞いたような気がした。

10時50分

ヒロは重い足取りで研究所に入った。受付の女性に事情を説明すると、少々驚いた顔をしながら、電話で誰かを呼び出してくれたようだ。電話をしている間、女性は耳まで紅く染まっていた。

「ところで…君は何者？」

受話器を置くのと同時に、電話中とは違って、背後に黒いオーラを纏って受付嬢は質問してきた。

「はい？」

突然の事に素っ頓狂な声を出してしまった。

「だ・か・ら！君は何者？」

ヒロの返答に受付嬢は怒っていた。

「えっと…今年の専門学校の受験者です！」

「そうじゃなくってえ」

正直に答えたのに、彼女は納得していないようだ。なおも食い下がろうとしたが、ヒロの背後から向かってくる人影に気がつく、先ほど同様に耳まで紅く染めていた。ヒロはそれに気づいて、後ろを振り返った。

「その寝癖はどうかできないのか、君は？」

ヒロの前には鮮やかな碧色の瞳に青みを帯びて見えるほど黒いの髪
の青年がいた。

10時55分

アスランは結局、この日も徹夜でISの調整を行っていた。一区
切り着いたときに、連絡が入った。

昨日の電話を思い出し、ハロは連れて行かずに研究室を出た。

（半年振りに会うのかぁ……まず最初にどう言うべきか？）

アスランはここにきて、どう切り出すか悩み始めていた。何せ突
然、彼の前から姿を消した身としては何とも言えない。考えがまと
まる前に受付が見え、アスランは受付嬢と口論になっている1人の
少年を見つけた。

半年前に見た時と同じように寝癖が少し残り、制服の学ランを着
ていた。悩んでいたアスランだったが、無意識の内に声をかけてい
た。

「その寝癖はどうかできないのか、君は？」

「えっ？」

「まだ半年しか経ってないのに、君はもう俺の顔を忘れたのか？」

「…あ……う……」

「ヒロ？」

目の前の少年は状況を掴めていないようで、口を金魚みたいにパクパクとしている。

「研究室で話をしよう」

アスランはそう言って、「あっ…」と呟くヒロの腕を引っ張っていった。取り残された受付嬢は啞然として、2人が去るのを見ていた。

「はっ！」

ヒロが気がつくと、どこかの研究室のようだった。部屋の片隅には白いISが置かれていた。そして、目の前には先ほどの青年がいた。

「やっと、正気に戻ったか。ここは俺の研究室だ」

彼は呆れながらヒロを見ている。

「おい、大丈夫か？」

「アスランだね?」

「それ以外にどう見える?……っておい、何するんだ!？」

「足がある…“幽霊”ではない…」

ヒロはアスランの脚に触れていた。人間の体温が伝わってくるのを感じる。

「ほんとに、ほんとにアスランなのか!？」

「君はまだ疑っているのか?相変わらず用心深いな」

ヒロは目の前にいる人物が半年前に会った人なのかまだ信じられずにいた。

そんな時、2人の間に赤紫の球体が転がってきて、それがヒロの腹部に突っ込んできた。

「ぐはっ!？」

「ミトメタクナイ!ミトメタクナイ!」

聞きなれた声と感触がヒロの疑問を解決させた。

「この声は…ハロだ!ってことはやっぱりアスランだ!」

「ずっと疑っていたのか…」

ヒロは目に少し涙を浮かべながらもどこも痛くない様子で、ハ口を両手に抱えて笑っていた。ハ口の存在のおかげで、疑いが晴れたとはいえ、煮え切らない様子のアスランが見えた。

「それはそうだよ。突然いなくなったから、実は幽霊か夢か幻だったと思っただくらいだし…」

「さっきの行動を見る限り、本気でそう思われていたのか」

アスランが小声で何か言った様な気がしたが最も気になっていた事を聞いてみた。

「ところで…アスランはここで何してるの？あの時何があったの？あのISは誰が作ったの？」

「とりあえず落ち着け…まあ、色々あったんだよ。本当に…」

アスランの周りにはこれ以上聞かないでほしいという感じがした。

「そっかあ…」

「何か飲むか？」

「うん、ありがとう」

「買いに行ってくるから、少し待っていてくれ」

「アスラン！あのIS触ってみてもいい？」

目を輝かせながら聞いてくるヒロに、アスランは少し考え込んだ

様子で答えた。

「別に構わないが、どこか壊したりするなよ」

「ありがとう！大丈夫だよ」

そう言って親指をたてながらアスランとハロを見送り、1人になった部屋の片隅に置かれたISに目を向けた。

『見たこと無いIS』それが第一印象だ。所々に通気口の様な部分があり、首から下が全て装甲になっている。それに今まで見たことのある（動画とかで）ISに比べ少し小さい気がする。

そのISに引き寄せられるように近づき、その肩部に触れた。

「えっ!？」

その瞬間、頭に膨大な情報が流れ込み、白い光に包まれた。

接触（後書き）

アスランの行動はちょっと軽率すぎた気が…

決意

『今後、一切ISに関わらないかそれとも……』

ヒロは宿泊先のベッドで仰向けになり今日のことを振り返っていた。

それは数時間前のことだった。

「何だったんだ？……っ！？」

白い光に包まれ、視界がはつきりすると、目線がいつもより高かった。自分の体を見てみると、先ほど見ていた装甲に首から下が包まれていた。

「これは夢だな…うん、アスランに会った事も夢だったんだろう」

自分がISをその身に纏っていた。男でもISを扱う人を身近にいるのを知っていたが、それはなんらかの理由があるからだとも思っている。

（この世界の人じゃないし…）

世界に『絶対』はありえない。だから、例外の1つや2つあるも

のだと思っているんだけど、自分がこんな事になるとは微塵も思っていない。だから…

「夢なら…動くはずだ!」

そう意気込んで1歩を踏み出した。

そして、

ガシャン!

という大きな音が響いた。研究室の外まで響いただろう。

「夢なのに、少し痛みを感じる…」

ヒロは床に顔をぶつけていた。

アスランは自動販売機で購入した2本の飲み物を両手に持って、研究室に戻ろうとしていた。

（ヒロのあんな顔を見ると、半端な説得をしても無駄な気がしてきた。）

ガシャーン!

そんな時、研究室の方向から、大きな音が聞こえてきた。

「一体何が…？」

「ケンキュウシツダ！イソゲ・イソゲ！」

アスランはハロと一緒に駆け足で研究室へ向かった。

研究室に着くと、マリア社長とウモン主任がいた。

「何があつたんです？」

「あの子って昨日君が言つてた子でしょ？」

マリアが指を指しながら答える

「あの子とは？」

窓越しに研究室を見回してみたが、床に倒れているISしか見えない

（どうしてあんなところに？…それにアイツは？）

「だから、あれじゃよ。君とわしで作っていたISをしっかりと見てみてくれ」

「えっ！？」

彼には目の前の現実には驚いていた。2本のホットの飲み物が脚にかかったことにも気づかないほどに。

『操縦者はヒロだった』

「っは！？…どうやら夢だったようだ」

突然目が覚め、自分の体が床に突っ伏していた。嬉しいような悲しいような出来事があったことを覚えている

「あの感覚は…リアルだった…」

体をおこしながら周りを見回してみた、いつもと同じ目線に戻っていた。だが、さきほど触れたISがなくなっていた。それに気づいたときドアが開いた。

「おいっ！何をした！？」

怒鳴り声と共にズボンを水分で汚したアスランが入ってきた。

「アスラン…何のこと？」

「ここにあったISに何をした！？」

両肩を掴み、すごい形相で迫ってきた。

（すごい力だ…あと、かなり怖い…）

「アスラン君落ち着いて…ねえ、ここで一体何があったの？」

アスランが「社長…」と呼ぶ女性が間に割って入ってきた。

「ええっと…」

何があつたかまるで分かっていないヒロだったが、

「君の左手の白い腕輪が全ての証拠のようじゃ」

2人の後ろから作業服を着た老人がヒロの左手を凝視しながら現れた。

「「「左手？」「」」

彼の一言に3人そろってヒロの左手を見た。

「白い腕輪？」

「まさか…」

「そのまさかのようじゃ」

「これで3人目ってことかしら」

困惑した表情の2人の男性、密かに微笑む女性、ヒロはまだ状況を把握出来ていなかった。

「えっと…説明して頂きたいのですが？」

その問いにアスランが意外な返事をしてきた。

「君は“男”だよな？」

（質問に質問で返されるとは…）

ヒロの頭はますます混乱していった。

「えっと…勿論だよ」

「そうだよなあ…はあ…………」

アスランが困っている。けど、何故かは分からない。

そんな俺に先ほど微笑んでいた女性が教えてくれた

「君はISが使えるのよ」

「ええつつつつ！？」

「ミトメタクナイ！ミトメタクナイ！」

アスランの心をハロが代弁している…そんな感じがした。

それから、先ほどの人達と自己紹介をして、色々な話を聞いた。

俺がISを起動させ、白い腕輪はその待機状態だということ。

話が終わる頃にはもう遅くなっていたので、ホテルに戻る事にした。

「それでは、また明日来ます」

ここの社長であるマリアさんと技術主任のウモンさんに挨拶を済ませたところで、アスランと目が合った。

「ヒロ、ちょっといいか？」

「俺もアスランに聞きたい事があったんだ」

2人で研究所の外で話を始めた。

「聞きたい事は分かってる。ここに呼んだ理由だろう？」

「うん」

「事情が変わったが、呼んだ理由は変わらない」

今まで困惑していたアスランが突然真剣な顔になった。

「ヒロはISに乗るつもりなのか？いや、答えは分かっている。だが、半年前に聞いたときとは状況が違う」

ドクン、ドクン…

アスランの出す雰囲気のおかげで、心拍数がかなり早くなってい

る。

（こんなアスランく々に見る）

「『この重みを背負う覚悟がある』なら、明日ここに来てくれ」

「…分かった」

アスランから『あるもの』を受け取った。

その一言を返す一瞬でさえ、何時間もの時間が掛った気がした。

「最後に…」

『戦わない道もある』か

アスランに言われたことを思い返すと、分からない事も多いが彼の言う事には不思議と説得力がある。

（やっぱり、夏に見た事は真実かもしれないな…）

アスランに渡されたものを手にした。

（拳銃…）

それを手にしたとき確かな重みが伝わってきた。だが、それ以上の何かを感じた。

（人を傷つける為の道具…）

そう思っただけで、手が震え始めた。

「でも…俺の気持ちは5年前から変わらない…そのためなら…」
変わらぬ決意を誓い、その時には手の振るえも消えていた。

「はあ…あ…」

大きな欠伸と共に襲ってきた眠気に身を委ねた。

「遅かれ早かれこうなっていたのかもしれない…」

アスランはベッドで仰向けになりながら、ハ口を抱えていた

「ハ口？」

ハ口を抱えてはいたが、彼の眼はまったく別のものを見ている。
ハ口にはあるISに関する特別な能力がある。

そのISは……

『インフィニット・ジャステイス』

元の世界ではモビルスーツだったものがこちらの世界にきた際に
ISに変化した物だ。

「無限の正義か…」

親友との殺し合いの末に手に入れた強大な力、一度は父の愚行をとめるべく自爆までさせた。

二度目は誤った世界にさせないために再び手にした。更なる強化をして、それが今の姿だ。

この一触即発の世界で陣営を間違えることなく行動できるらだろ
うか？

この強大な力とともに…

いや、もう絶対に戦う相手を間違えてはいけない。

「ISを使える男の出現、異世界に飛んできた俺とカガリ…何かが
起ころうとしている…」

アスランの意識は徐々に闇に落ちていった。

キィィ…

アスランがすっかり寝入ってから数時間後、アスランの寝室にド
アの開く音が響く。

「ハロ？」

「ちょっと静かにしててね」

パチン

侵入者は袋詰めにしてハ口を廊下に放り出し、アスランのベッドに迫った

「可愛い寝顔♪ ふふふ……」

決意（後書き）

もうすぐ、入学させられる...

ロシア代表現る！（前書き）

ちよつとサブタイトル変更しました
今回は長い…

ロシア代表現る！

真っ暗な空間

塵とホコリ、ガラスや建築物の破片が辺りを支配している。

そんな中に1人の少年がいた。その少年の目に光は無く、いつ訪れるか分からない自身の死を待っているそんな目つきだ。

その少年が身動き1つしないまま、何時間も何時間も経過した。

その状態が数日ほど経った。

真っ暗な空間に一筋の光が少年を照らし、1人の人影が見えた。人1人にしてはかなり大きな影だ。

「――」

少年に向けて何かを語りかけていた。

「今日はいつにも増していい天気だな」

ヒロは滞在中の部屋のカーテンを開きながら、一言。

目覚めもいい、それに寝癖もいつもより少ない。新たなスタートにしては縁起がよさそうだ。

「そろそろ、行くか！」

昨日の決意をアスランに伝えるために、研究所へ向かった

研究所の受付に行くと、昨日会ったウモン技術主任がいた。

「ウモンさん、おはようございます」

「おお、来たか」

「えっと、アスランは？」

昨日約束した場所と時間に受付に行ったが、アスランの姿は無かった。

「久々にまともな睡眠をとったはずじゃからな、まだ寝てるかもしれない。だが、アイツにしては珍しいな…起こしてきてくれないか？」

時計の針は11時を過ぎていた。

「あそこがアスランの部屋か」

ウモンさんに教えてもらった部屋が見えたとき、そのドアの前に小さな袋が転がっていた。その袋を開くと

「キケン！アスラン！キケン！」

ハロが飛び出してきた。

「同じ手には！」

ハロが頭の右側を跳んでいった。縦横無尽に跳ね回るハロを捕まえようと手を伸ばすが、なかなか捕まらない。

「コイツっ！」

「キケン！アスラン！キケン！」

ハロが視界から消えた時、

「ぐはっ！？」

腹部に衝撃がはしった。が、そのままハロを取り押さえることに成功した。

「やっと捕まえた…そういえば…」

捕まえたハロと向き合いながら、本来の目的を思い出し、アスランの部屋のドアに眼を向けた。

「アスランが危険ってどういうことだろ？」

ドアの前にハロを抱えたまま、昨晚決めた事を胸に秘めて深呼吸をし、自室で寝ているであろうアスランに声をかけようと、ドアノブに手を伸ばし…

「ヴああああええっ！！？」

一体何が？ヒロは少しの間、思考回路がストップしていた。

アスランは窓からさんさんと降り注ぐ日差しに目を向けた。カーテンを閉めずに眠ってしまったらしい、少し廊下が騒がしい…

久々にゆっくり寝たとはいえ、そろそろ起きなければ。まぶしい光に目を細めながらアスランはベッドに手をつけて起き上がろうとした時、――そのとき、手に何か柔らかいものが触れた。毛布やリネンではない、もっと弾力のあるなにかだ。

「はっ！？何だこの既視感は…」

アスランは跳ね起き、あわてて隣に目をやる。ベッドカバーの下に、くつきりとした膨らみがあった。

ハロでは絶対ない…

アスランはおそろおそろ上掛けを持ち上げる。まず目に入ったのは寝乱れた水色の髪だった

「ん…ん…」

こちらに向いていた背中が動き、もぞもぞと寝返りを打つ。朝日

にさらされたのは、いかにも無邪気そうな寝顔の見知った女の子だ。

「ヴぁぁぁえええっ！！？」

アスランは仰天して飛びのき、はずみでベッドから転げ落ちる。
この騒ぎで目が覚めたのか、水色の髪の女の子が伸びをし、けだるげに身を起こす。

「ふえ…？どうしたの…？」

アスランはあまりのことに、座り込んだまま茫然とその様子を見守っていたが、すぐに昨日脱いだ服を探し始めた。

（なにっ！？）

——自分はまだ眠っているのか？というか、夢だ！夢であつてほしい…服が無いなんて…はやく見つけなければ。もし夢でなければ…

彼の頭には最悪のケースが浮かんでいた。

そして彼の予想通り、ノックにしては大きい音が部屋に響く。

「アスラン！大丈夫か！？」

外で呼んでいるのはヒロだ。

アスランはあわてて立ち上がった、ドアの方に向かいかけるが、動きを止める。自分は未だにアンダーウェアしか身に着けていない。そして、ベッドの上には寝乱れた姿の女の子—この状況でドアを開

けるわけにはいかない。

こんなところを見せては…。

ドン！ドン！

「アスラーン！アスラーン！」

「大丈夫か！？返事をしてくれ！」

ハロが鳴き、ヒロが叫びながらドアを叩く。分かっている、けど…

「あっ…ああ…え、えっと」

頭の中はパニックだ。アスランは何度も周囲を見回したが、服が
無い…

ガチャガチャ…

「クソっ！やっぱ開かない…ドアを壊してもいいか！？」

ヒロも必死のようだ。はやく落ち着かせないと取り返しがつかく
なるかもしれない…

「すうーはあー…大丈夫だ」

ドアの向こうのヒロに深呼吸をしてから返事をした。しかし、

「本当のことを言ってくれ！アスランが『大丈夫』って言うときは
大抵大丈夫じゃないから！」

（そんな馬鹿なことがあってたまるか！）

今までそんな…ことは… あったかもしれない… 確かキラやラク
スに言われた気がする。

はっ！？はっ、はやく服を…

服を探しているこの間はミラージュコロイドを展開させたニコル
のブリッツを探す時よりよほど手ごわかった。なんだってこんな時
に限って、服が見当たらないんだ！？

そのとき、ベッドで不機嫌そうな顔をしていた女の子が立ちあが
った。

彼女はまっすぐドアに向かう。少し遅れてそれに気付いたアスラ
ンが、あせって止めようとしたが遅かった。

「あ！こら…っ」

アスランのほうに微笑みかけ、水色の髪の子はためらいもな
くドアを開ける。

ドアの向こうには、タックルをしようと構えていたヒロの姿があ
った。目の前に現れた女の子に、ぽかんと口を開き、両手に抱えて
いたハ口が落ちた。

（もうダメだ。また、こんな事が…）

「ふふっ」

「……」

「アスラン・アスラン！」

彼女はヒロにイタズラっぽく笑みかけ、何かしらのやり取りがあったようだ。彼女をはさんだ前と後ろで、ヒロとアスランが硬直する。ヒロの目が女の子の乱れた髪とその服装に留まり、次にその後でアンダーウェアのみを身に付けたアスランに留まる。

アスランはのろのろと考えた。

（これが夢だとしたら、最悪の悪夢だ………）

「アスラン！キケン！」

「ハロ、大丈夫だよ……うん！ぼっぱぼ、僕達が気にするような事はないか……」

「おいっヒロ、待ってく……」

何かを理解したようだったが、驚きながらも平静を装い続けハロと共にドアを閉めて去るヒロ、満足げな面持ちで戻ってくる女の子。

無邪気そうなその顔に見えたが、たったいま自分がどんな厄災を呼び込んだかという自覚がありこの状況を楽しんでいる。アスランは思わず彼女の肩を掴み詰問した。

「どういっつもりだ！」

「やん。強引ね…」

彼女はわざとらしく頬を赤くそめ、眼をそらした。

「そんな事はどうでもいい！いつ！？何でこの部屋に！？鍵はどうした！？」

アスランが詰め寄ったが、この厄介者は彼の怒りなどまるでこたえていないようだ。にこにこ笑いながら答える。

「ピッキングという名の合鍵を使わせていただきました」

「はあ！？だから！何でこんなことするんだ、きみはっ！？いつもいつも！犯罪まがいな事ばかり！」

本気でわけがわからず、アスランは怒鳴りつける。今回は第三者にも見られてしまったからだ。

だが、彼女は心外そうに小首をかしげた。

「えゝ？だつてえゝ女の温もりがほしいでしょ？」

「あーもう！俺には必要ない！」

すると、きよとんと眼を見張った

「…え？なんで？まさか、さっきの男の子とはただならぬ関係なの！？」

アスランは頭を抱えた。

「更識…」

「楯無ってよんでよ」

「楯無…」

「ふふ」なあにい？」

アスランは上機嫌になったこの厄介者にずっと気になったいた事を聞いた。

「俺の服をどうした？」

「全部洗濯しておいたわよ」

「そうか…」

『大成功』

アスランの部屋から現れた女性は紫の下着を着用し、男物のYシャツを纏いどこからか手にした扇子にその文字が書かれていた。

何が『大成功』だったのだろうか？俺に対してなのかアスランに對してなのか分からない。

俺は無論驚いたが、アスランは浮気現場を見られたような顔ではなく、彼もかなり驚いた顔をしていたからだ。

ただ1つ言える事がある…かなりの美人だった。豊満な胸にYシヤツ、の上からでもわかるくらいくびれた腰、形のいいお尻。

美男美女のカップルはこういうことをいうのだろうか？でも、アスランには探している女性がいたはず…その人とアスランがどういった関係なのかははっきりとは分からないけど

色々なことが一気に起こったおかげで困惑しながらも、「煩惱退散、煩惱退散、ぼんの…」と呟きながらフラフラな足取りで受付に戻った、

つもりだった。が、ヒロはアスランの研究室の前にいた。相当動揺しているようだ…あらかじめウモンさんから渡されたいた合鍵で研究室に入ってしまったら待つことにした。

『ISを動かした』そのことがまだ夢のようだ

ヒロが昨日の事を思い出していると、ウモンさんが研究室にはいつてきた。

「おお、ここにいたか」

「アスラン、まだ寝てました…」

さっきの事は説明しない方がいいと思って、うそをついた。

「そのことじゃが、事情が変わった。ついて来い」

そして2人は研究所の外にある大きな闘技場のピットに着いた。

「2人とも待たせてすまなかった。そろそろ始めていいぞ」

『了解』

『よろしく頼みまーす』

「これは一体？」

「アスランと楯無の模擬戦じゃ」

闘技場の真ん中には緑色のISを装着したアスラン、水色のISを装着した楯無と呼ばれたさっきの女性がいた

「たてなし…？」

（どっかで聞いた事あるような…）

『はじめましてだね。私はロシア代表IS操縦者の更識楯無。楯無、もしくはたっちゃんって呼んでよ』

「たっちゃん…？えっと泉谷ヒロです。よっ、よろしく願いします」

画面に向かってお辞儀をしていた。

『よろしくね』ヒロ君』

国家代表…こんなフランクな態度と彼女の立場を考えると、驚きを隠せなかった。

『ヒロ君、キミに1つ言っておきたかったことがあるの』

「何ですか？」

『あんまりおねーさんをエロイ目で見ちゃダメだよ』

「すみません」

頭を抱えるアスラン、何事もなかったように作業をしていたウモンさん、さっきのこととも考えると、この人にはみんな振り回されているようだ…

ロシア代表現る！（後書き）

次はアスラン対会長です
かーいちょ！かーいちょ！

アスラン対楯無／そして…（前書き）

ISを見るとサン。ライズの某燃（萌）アニメを考えてしまっ…

マテ。アライズ！

アスラン対楯無／そして…

『アスラン・ザラ、出る』

『簡単には負けないわ』

ISの実戦を生で見るのは初めてだった。そして、これはかなりハイレベルな戦いだ。

2人とも専用機らしい。ウモンさんから2人のISの説明を聞いた。

アスランのISはフランスのラファール・リヴアイブの様な感じだがかなり違っていた。手足などの基本的な部分はリヴアイブをジエイブアップしたものだだったが、4枚の多方向加速推進翼は無く、左肩には3本の角が付いている物理シールドが装備されている。左右の腰には2本の実体剣が、背中には大きなバックパックが装着されている。

専用機らしいんだが、夏に見たのとは違う。形状と色、大半の武装を見る限り、少しの違いはあるけど、ウォーリア・リヴアイブあの時”見た単眼モノアイタイプの量産機に似ている。名前は『戦士の再誕』というらしい。

楯無さんのISは『モスクワの深い霧』の機体データを元に改造中で、稼動データを取るためにアスランと模擬戦をしているらしい。他のISに比べ装甲が少なく、左右一対でクリスタルが浮いている。水をナノマシンを使うISらしいが、まだ一部の武装にしか使えて

いない様だ。

模擬戦のほうはアスランが少し優勢で進んでいた。

アスランは遠中距離から、背中の両側スラストブロックの先端部に内蔵された小型ミサイル、展開した51口径アサルトライフル《レッドバレット》の2種類の武器で弾幕を張りながら相手をけん制している。

楯無さんの展開している武器は大型のランスと蛇腹剣の2つのみだ。迫りくる弾幕を殆ど回避しながら、接近しようとしている。

試合時間がかなり経過すると、膠着状態だった試合に変化が訪れた。

アスランは楯無さんとの距離が近づきつつあったので後退しながらライフルをメインに射撃をしていたが、弾幕が止んだ。

『弾切れ』

が起きたようだ。

その一瞬の隙について、楯無さんがランスで一気に突撃していった。

『もらった！』

アスランはそれを上空に逃げて避ける。

シールド裏面にはライフルの弾倉があるらしいが、それは使用されなかった。

楯無さんのランスによる怒涛の攻撃が弾倉の交換を妨げながらアスランを追い詰めていったからだ。

アスランは後退しながら、ライフルを収納し、肩のシールドからハンドアックスを抜き取って、それを投擲した。一撃が重そうな斧が唸りをあげて飛んでいく、楯無さんは手にしていたランスではじき飛ばした。

そこで生じた隙にアスランは両腰の実体剣を二刀流に構え、楯無さんとの距離を一瞬で詰める。

ランスによる迎撃を左手の剣で捌きながら懷に飛び込んだアスランは、もう一方の剣で蛇腹剣を弾き飛ばした。

2つの刃が回転しながら地面に刺さる。ほんの一瞬の出来事だった。

「また、腕をあげたな」

「ありがと…けど！」

少し距離をとった楯無の武器に変化が起こった。両手で構えたランスから水が現れ、螺旋状に纏っていく。

「その余裕がいつまで続くかしら」

名を蒼流旋そうりゅうせんというらしい。ISにその名称が送られてくる。

アスランは2本の実体剣の柄を連結させ、それに立ち向かう。緑と青の光が闘技場で何度もぶつかり合う。

「もらったわ！」

その最中、楯無の蒼流旋による一突きがアスランの左腕を捕らえた。

ガキーン！

咄嗟にシールドで防ぐが、大きく吹き飛ばされる。

「くうつつつ！」

正面から受け止めたシールドにはかなりのダメージがあった。

「ナノマシンによって超高周波振動の水を纏ったランスか」

「あらら、すぐバレちゃった」

アスランがランスの一突きを受けたあと、2人は武器を構えたまま空中で静止している。

2人の目つきが先ほどよりも鋭くなっていく。

『いくわよ……！』

『これで終わらせる！』

そして同時に2人は動き始めた。

また一瞬のことだった。本当に、何も見えなかった……気づいたのは2人がすれ違ったあとだ。

分かった事は……『ガギン！……パシュツ』という音が響き、楯無さんのランスが弧を描きながら宙を舞い地面に刺さった。

2人に共通して言えることはISの操縦技術はかなり高い。よく分かんないくらい凄かった。

楯無さんはもちろんだが、アスランがあそこまで強いとは思わなかった。ISの存在を知ってまだ半年しか経っていないはずだし、それにまだまだ余裕さえ感じられた。

あと……アスランの使ったことのあると思われる巨大な人型機動兵器の動きと似た点が見られた。

アスランは『相手の戦闘力だけ奪った』そのことがどれだけ凄いのかは自分でも分かる。10年前の『白騎士事件』があったから。

今回は未完成のISを壊したくも壊されたくも無かったかららしい。つまり、2人とも100%ではない。楯無さんのISが完成したときに2人の本気の試合を見てみたいな。

「はあ…また、負けちゃった…」

楯無さんは清々しい表情で、アスランは普段通りの落ち着いた面持ちでピットに戻ってきた。

「さっきも言ったが、また腕を上げた。今回は俺が勝ったけど、ISの完成と楯無自身の実力の向上があれば次からどうなるかわからない」

「それもそうね…次こそ私が勝つわ！」

「次はISが完成してからか？」

「あーでもそうになると、しばらく時間がかかりそうだね。これから忙しくなるから」

「そうか…俺はいつでも構わないよ」

「ありがとね。うーん…“夏”までには完成できるかな」

「なんか、よく分からない人だった…」

楯無さんは去り際に『アスラン、寂しくなったら呼んでね！浮気しちゃダメだぞ』と言って帰った。

ISを展開して太平洋を北上していった…ISを交通手段として使っているのだろうか…

「ヒロ、1つ言っておくが、彼女とは君の想像しているような関係ではない」

「……………エーソウナンド」

「まんざらでもないないだろ？いつもみせつけてくれるわい！」

「主任も茶化さないでください！ヒロは普通に話せ」

「ミトメタクナイ・ミトメタクナイ！」

楯無さんが帰ったあと3人で研究室に戻り、アスランと楯無さんの話で盛り上がっていた。何故かアスランはISスーツのままだ。手足は赤紫、胸部から肩は白、それ以外は黒いタイプのオーダーメイドらしい。

『ぐっ』

と誰かの腹の音が場を凍らせた。寒いオヤジギャグの様に…

「……………」

「スマン、わしの腹じゃ。もう2時もすぎじゃからな、ちょっと遅いが昼を食べてくるが、2人はどうする?」

「俺はまだ平気です。朝遅かったんで。ヒロはどうだ?」

「俺もまだ大丈夫です」

「そうか…1人寂しく食事をしてくるとするかろう」

ウモンさんが出て行ったのでアスランと2人つきりになった。一応ハロもいる。

「昨日の話だけど、俺…」

ヒロは深呼吸をして続ける。

「覚悟はある」

「そ…『って言いたいけど…』…どうした?」

「ゴメン、やっぱり最後に言われたことがどうしても引つかかってはつきりとは決められなかった。でも、今言ったことは嘘じゃない。それは本当だよ」

アスランは真剣な眼差しで話を聞いてくれる。

「だから…だから、探していきたいんだ。その道も。俺には分からないことが多いから…」

「君の考えは分かった」

ヒロはアスランの返事とその先を固唾を吞んで待っている

「もし…もし君が迷ったとき、答えが見つからないようなときは俺に相談してくれ。俺以外でもいいが、絶対に1人で抱え込もうとするな。それだけは忘れないでほしい」

予想を斜めに行く返事にかなり驚いた。てっきり『駄目だ』って言われるとばかり思ってた。

「分かった。あと、その…ありがとう…」

『研究室にいたのね、結構探したわよ』

ヒロが返事をしたとたん、研究室に探していた仇敵を見つけたときのような声が響いた。

マリアさんが息を少し乱しながら入ってきた。

「社長、どうしたんです？落ち着いてください」

「ゴメン！急いであるから手短に話します。これを受け取ってヒロ君」

社長は『はあゝ重かったわ』と嘆きながら、37インチテレビほどのサイズの紙袋を渡してきた。

（おっ、重い…）

「えっと、ありがとうございます。これは一体？」

アスランとヒロは？マークを浮かべながら顔を見合わせる

「アスラン君、彼に説明しておいて」

そう言っ て研究室を出て行こうとするマリア社長。だが…

「説明とは、一体何をすれば？」

マリア社長はこけた。バナナの皮で滑ったかのように壮大にこけた。勿論、何かが落ちていたわけではない。

「アスラン君にも前に渡したでしょ！？まだ確認してないの？」

お尻をさすりながら、体勢を立て直すマリアさん。昨日の凜とした感じは見られない。まさしく今朝のアスランの様だ。

「申し訳ありません」

「なら、いいわ」

マリアさんは一呼吸してとんでもない事を言い出した。

「2人には『IS学園』に入学していただきます」

「……えっ……！？」

「入学！？どうして私が！？」

「そんなに驚くことは無いでしょう？ISを使えるし、ちょうどいい年頃じゃない」

「ですが、自分はヨーロッパの『イグニッション・プラン』の動向を直接視察しにいく話だったはず」

『イグニッション・プラン』…ヨーロッパで第3世代型ISのトリアルが行われているらしい。その統合防衛計画の名称だ。

そして、そこにフランスは入っていないことには驚いたなあ。ヨーロッパなのに。フランスにはデュノア社があるし。デュノア社…ラファール・リヴァイブを製作した会社がフランスにはある。リヴァイブはその操縦性、汎用性の高さから量産ISで世界3位のシェアを持っている。

アスランはそんなこともやっているのか。

「それは“夏”にでもしてくれればいいわ」

「分かりました…」

アスランの『はあ…』というため息が聞こえる。彼には女性に振り回される性質をお持ちのようだ。

「袋の中に手続き用の書類とか入ってるから。それじ…『社長待ってください！』…どうしたの？」

「無条件で入学ということですか？」

それはヒロ自身も疑問に思っていた。IS学園の入学試験は少し

前に終わっていたはず。勿論、信じられないような倍率で…

「そのことだけど、ISが使える男ってことで問題無いわ。あとはISの戦闘データを送ってくればいいから」

「…分かりました」

「ヒロ君もいいわね？」

「はい」

そんな理由でいいのか、と思ったことはあえて口には出さない。渋々納得するアスランを見てヒロも返事をした。

「それじゃ、頑張つてね！」

突然の事態に状況が上手く纏まらないまま、研究室にヒロとアスランは取り残された。

「アスラン…昼ごはん食べない？腹が減っては何とやらって言うし」

「確かに、そうだな…」

2人は重苦しい雰囲気を出しながら、食堂へ向かった。そして、ハロ以外誰もいなくなった。

「ミトメタクナイ・オモエモナ！」

「ところで、服はどうしたの？」

「察してくれ……」

悩むヒロに対してアスランの眼が『今日誰が現れたかを思い出してくれ』と訴えてくる

「……………」

ヒロは無言で眼には眼で『分かった』と返した。

アスラン対楯無／そして…（後書き）

やっと入学…

の前に設定を

アスランのISとか

設定1～登場人物～（前書き）

随時更新

設定1／登場人物

泉谷 ヒロ

誕生日：8月20日

血液型：O型

年齢：15歳

身長：156cm（成長中！）

体重：48kg（上に同じ）

髪色：黒

瞳：黒

視力：矯正^{コンタクト}1.0（裸眼、0.3）、眼鏡もある

適正：C（本来はCよりも下？）

髪型：ショートでいつも寝癖が付いてる（しっかりと毎朝整えているが、少し残ってしまう）

趣味：サイクリング、ボードゲーム、IS（情報収集、整備） 料理

出身：日本

所属：オーブのテストIS操縦者

人物：女尊男卑の世界のおかげで、女性に苦手（興味がないわけではない）だが、ISは好き。という矛盾？がある。

基本的には真面目な生徒だが、内心はかなりの負けず嫌いで表と裏が激しい。面倒事が嫌いな面もある。寝起きは悪く、その醜態は誰にも見せられない。

能力：ISに関する勉強ばかりしていたので、入学時は一般的な高校生程度の身体能力よりも低い（ISを使う人としてはかなり危ない）知識面はそこそこ

アスラン・ザラ

誕生日：10月29日

星座：さそり座

血液型：O型

年齢：17歳（もうすぐ18歳）

身長：173cm

体重：61kg

髪色：藍

瞳：エメラルド・グリーン

趣味：電子工作

国籍：自由国籍権を持っている

所属：オーブのテストIS操縦者

適正：S

備考：本来なら、もつと年上だが、こちらの世界に来たときに、フイジカルデータがSEED DESTINYよりちょっと前のものになったので、この年齢にした。

ハロ（赤紫）

アスランが自身のサポートメカとして作り、他のハロに比べハイスペック。

MS（この世界ではIS）のメンテナンスや機体や戦闘データの保存、電子ロックを解除する高度な開錠能力があり、言語学習機能のおかげで、色々な言葉を話せる。

MS時のインフィニット・ジャスティスのコックピットにハロ専用の台座が追加されていた。

この世界にきてから、ある特殊な能力が備わっている

『丸い。魔』

民間企業『オーブ』

まず最初に、アスラン達が知っている『オーブ連合首長国』とは何の関係也没有せん。

南太平洋に近年設立された民間企業、付属の工業専門学校もある

サモン・ウモン

普段は技術主任、実は社長。轡木とは旧知の仲
宇宙世紀系列の技術（一部）を持っている。

誤報のデオート

鈴木マリア

普段は社長、実は社長秘書。

容姿はSEEDのマリユーさん、彼女は普通の人

設定1～登場人物～（後書き）

次はISの話

設定2～IS～（前書き）

随時更新

設定2〜ISS〜

ウォーリア・リヴァイブ
戦士の再誕

使用者

アスラン・ザラ

世代

第3世代

装備

- ・トマホーク

シールド内に収納されているハンドアックス。ビーム兵器としても使用可能

- ・ハンドグレネード

- ・シールド

左肩に装着され、対ビームコーティングがされている

- ・ファイヤビー誘導ミサイル

両側スラスタ・ブロックの先端部に内蔵された小型ミサイル。第3世代技術のマルチロックオン・システムに対応している。

- ・フォールディングレイザー対装甲ソード

両腰に装備されている2本の実体剣。実体剣と振動波を併用し、エネルギーをほとんど消費しない。2本を連結してアンビデクストラス・フォームにできる。

(ダブ。オーのG。ソード?やヴィン。ントのM。Sのような感じ)
e t c
…

備考

アスランがインフィニット・ジャステイスではこの世界においては異常な機体なので、基本的にはこちらを通常使用している。マルチロックオンが可能なので第3世代型となっている。

元にしたISがフランスの『ラファール・リヴァイブ』のため、リヴァイブの名を使っているが、ブレイズザクウォーリアである。

機動力においては第3世代型ISとしてはトップクラスになった。

総合的にみても、かなりの高性能機。

インフィニット・ジャステイス

使用者

アスラン・ザラ

世代

? 世代

装備

・ 2連装近接防御機関砲×2

・ CIWS×4

・ 高エネルギービームライフル

・ シュペールラケルタ ビームサーベル×2

・ グリフォン ビームブレイド×2

・ ビームキャリーシールド

・ シャイニングエッジ ビームブーメラン

・ グラップルスティングー

・ MS支援空中機動飛翔体「ファトウム-01」

・ ハイパーフォルティス ビーム砲×2

- ・ブレフィスラケルタ ビームサーベル×2
- ・シュペールラケルタ ビームサーベル
- ・グリフォン2 ビームブレイド×2

ミーティア

戦艦クラスの火力と推力を付加するパッケージ

この世界では単機で戦況を一変させる戦略兵器の出番はかなり少ないだろう…、

単一仕様能力

???

詳細：本来はMSだったインフィニット・ジャスティスがISに変化した。

MSの時と装備、動力に変化が見られないので、この世界においては異常な兵器である。

フル・スキン

全身装甲にも出来るが、通常のIS同様手足にアーマーを着せた感じ。展開の仕方によって、一部の武装が変化する。

現在は別の場所ある。

設定2「IS」（後書き）

単一仕様能力

決まってるので、名前だけでも出すべきか…若干微妙な気がしなくもない。

手足アーマーとかは種きやら劇場のカガリのルージユっぱい感じかな

クラスメイトは女子ばっか

「皆さん、入学おめでとう。私は副担任の山田真耶です。」

黒板の前には副担任の山田真耶先生（先日、挨拶をしたときにはかなり驚かれた。『ISを使える男』というのはやっぱり凄いことなのだろう）

残念だけど今日も山田先生からは教師らしさを感じられない、服がだばつとしていて、かけている眼鏡も若干ずれていて、子供っぽさが残っている。

気がする。一部の部位をのぞいてだが。女性の象徴である胸は大人の女性としての色香を漂わせている。あれはもはや兵器なのではないか？と思うくらいの破壊力さえ感じさせる。

「……」
「えっ……」

たじろぐ先生はやっぱり、子供っぽいかもしれない。

「あっ……今日から皆さんはIS学園の生徒です」

でもさすがは教師。すぐにもとの調子に戻っていった。

「この学園は全寮制。学校でも放課後も一緒です。仲良く助け合って、楽しい3年間にしましょうね」

「「「「「.....「「「「」

「じゃ、じゃあ自己紹介をお願いします。えっと、出席番号順で」

ヒロの前には何かしらの視線を求めてか窓側のポニーテールの女の子に顔を向けるもう1人の“男”がいた。

ニユースで話題になった『織斑一夏』だ。

だが、その視線はあっさりと否定され、あきらかに落ち込んだ様子が見て取れた。

彼が横を向いたときに一瞬視線が合った。ヒロが笑顔で返すと彼は苦笑いしながら前を向いた。

（おりむらか。もしかして…）

すぐにヒロの自己紹介が回ってきた。

「泉谷ヒロです。“男”です」

ヒロが男だと宣言したあと、教室内の空気が変わった。『あなた誰？もつと話してよ』的な視線を感じる。

（こういう空気はやっぱり苦手だ。あんまり細かく話すこは無いし、こついうことは簡潔にすべきだな）

「3月にISが使えることが分かったのでここに入学しました」

（俺のことはニユースにもなっていないので、ちゃんと言っておかないと。あと…意外にちゃんと話せているな、俺。ビクリだ）

「よろしくお願いひまふっ」

教室に吹雪が吹いた。みんな固まっている。山田先生も対応に困っていた。

(い、痛い…いろんな意味で。ユダンタイテキだな。ははは…はあ)

正気に戻ったのは休み時間になってからだ。断片的にしかあの後のことは覚えていない。

織斑一夏はあの織斑千冬の弟ということ。織斑千冬…世界的に有名な人だ。元日本代表IS操縦者で世界大会の第1回モンドグロッソ総合優勝&格闘部門優勝者で『ブリュンヒルデ』とも呼ばれる。公式戦は無敗で第2回も優勝かと思っていたけど、まさかの不戦敗。

その後はネットの掲示板でドイツでの目撃情報があったくらいだ。それがここで教師になっていたことには驚いた。

山田先生と違って、教師として厳格な人物のようだ。先日会ったときのように鋭い吊り目に、スーツの似合う長身とボディラインが特徴的な美しい女性だった。

2度目に見たときは凄まじいインパクトだった。いきなり弟を殴ったからな。あの時間だけで3回は殴っていた。どれも凄まじい威力だった。

そんなことがあったせいか、ISの基礎理論の授業のおかげか、ヒ口の目の前の席に着席している織斑一夏から妙な空気が漂っていた。

「おい織斑君！」

「……………」

「おーりーむーらーくん？」

「え？君はたしか…さつき…」

「さっきのことは忘れてくれ…改めまして泉谷ヒロだ。俺は男だ。よろしく、織斑君」

「織斑一夏だ、よろしくな。」

一夏って呼んでくれ、男同士仲良くやろうぜ。織斑は2人いるからな…」

「あ、ああ…分かったよ、一夏。俺もヒロでいいよ」

「よろしくなヒロ」

改めて自己紹介をして握手をする、ISを使える2人の男。

「男同士っていうのもいいわ…」

「ねえねえ、織斑君が『攻め』で、泉谷君が『受け』かしら…？」

教室にも廊下にも妙な空気が満ちていた。

「なあ一夏…動物園のパンダってこんな感じなのかな…」

「かもしれないな…もう1人男がいてよかったよ」

2人が異様な空気に参っていると…

「……ちよつといいか」

「え？」

「はい？」

突然1人の女生徒に話しかけられた。さつき一夏が視線を向けていた相手だ。

「…箒？」

彼女は篠ノ之箒、顔と名前しか覚えていない。篠ノ之…まさかね。

「廊下でいいか？」

「お、おう」

ヒロがそんなことを考えている間にそういつて2人は出て行った。後で聞いた話だが、2人は小1の時に、剣道場で出会い3年間学校で同じクラスだったが、その後篠ノ之さんが引越し、ここで再会したそうだ。髪型が6年前と同じだとか。

転校で別れた幼馴染と6年ぶりに再会って運命じゃないか？それにIS学園っていうとんでもない学校で会うなんて。

余談だけど、この学園の女子は容姿のレベルが高いことが分かった。IS操縦者って有名人だから、そういったことも関係あるのかもしれない。

「ではここまでで質問ある人？」

（懐かしいな～ISの勉強を始めた頃を思い出すよ。あの頃は難しい単語の羅列にしか思えなかったし）

机の上に置かれた教科書をめくりながらヒロは昔のことを思い出していた。そんな時、目の前にいる一夏がヒロのほうを向いてきた。

「どうしたの？」

「ヒロはこの教科書の意味分かるのか？」

「勿論だよ…入学前に渡された参考書にも同じようなこと書いてあったし」

「あ、あれは…」

「2人とも何か分からないところがありますか？」

ヒロと一夏のやり取りに気付いた山田先生が、わざわざ訊いてきた。
た。

分からない生徒のために話を訊こうとしてきた山田先生は教師の鏡だな

その後のやりとりでよく分かった。一夏は古い電話帳と間違えて捨てたらしい。気持ちは分かる、あれの重さと見た目は電話帳だもんな。

あの子の織斑先生は怖かった。公私の区別はしっかりしていると
思っていたが、あそこまでは。間違えて捨ててしまった一夏に対して、強烈な出席簿による攻撃が行われた。あの出席簿には何か仕込まれているのかもしれない。

おまけに『あの参考書を1週間で覚えろ』と言って、悪魔のような鬼のような視線を一夏に向けていた。

「なあ、ヒロ」

休み時間に入った途端一夏はヒロに話しかけてきた。

「ど、どうしたの突然？」

「さっきの授業で分かったんだが。山田先生にも放課後教えてもら

うけど、それだけじゃ無理だと思う。だから…」
「てつだ『ちよつと、よろしくて?』…はい?」
「へ?」

ヒロと一夏はいきなり声をかけられて素っ頓狂な声を出してしまつた。そこにはしつかりと手入れのされた長い金髪と透き通つた碧眼の女子だつた。雰囲気と話し方が高貴な身分の感じがする。

(コイツは…イギリス代表候補生のセシリア・オルコット)

入学前から、名前と顔は知っていた。イギリスのティアーズ型にはかなり興味があつた。操縦者の意思で全方位オールレンジ攻撃が可能なのは純粹に凄いと思っていた。

そのの最も高い適性者が現れたという記事を読んだ時に彼女のことを知つた。そのときはモデルのような感じがしたことは氣にならなかつた。

「まあ!何ですの、そのお返事。私に話しかけられるだけでも光栄なのですから、それ相応の態度というものがあるのではないかしら?」

実際は今の女子を典型的なパターンな氣がする。男の事なんて奴隷とかだと思つていないような感じだ。

楯無さんとはかなり違う。でもあの人場合、『男女問わず、人を弄んでいる』とアスランから聞いた。

たしかにISが使えない以上今までは仕方ないと思つていたが、立場だけなら互角…とまではいれないが、世の中の男に比べれば一

夏や俺はまだマシだろう。それにしても初対面の相手にこんな見下した態度をとるのか…

「悪いな。俺、君が誰か知らないし」

「わたくしを知らない？セシリア・オルコットを？イギリス代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを？」

「あ、質問いいか？」

「ふん。下々の要求にこたえるのも貴族の務めですね。よろしくですよ」

「代表候補生って、何？」

（一夏って面白いな。啞然としているみんなの顔も面白い…だけど、特に俺の目の前にいるこの人の顔…だめだ、ヤバイ…）

真面目に聞いた一夏、崩れ落ちる周りの生徒、固まっているセシリア・オルコット。周りの反応にヒロは表情を崩さないようにするので精一杯だ。

「信じられませんわ。日本の男性というのはみんなこれほど知識に乏しいものなのかしら。そちらの方は勿論ご存知でしょう？」

女尊男卑の世界になってから、人によってはISの存在自体を嫌悪している人もいる。興味の無い人もいるだろう。

（うーん、さっきの周りの反応は面白かった。こういった相手の出鼻をくじくのは面白そうだ！）

「スマン、俺も知らない」

ヒロの正直そうな返事に再び同じような反応があった。さすがの一夏も驚いている。セシリアはフラフラな足取りをこらえている。

（いや）面白かった。俺の評価が下がった気がしなくもない。ISの知識のことなら代表候補生にも負ける気がしないから問題ない）
「信じられない。信じられませんわ。極東の島国というのは、こうまで未開の地なのかしら。常識ですわよ、常識。」

代表候補生は簡単に言えば、楯無さんのような国家IS操縦者の卵だ。要するに、エリート。

調子のよさそうな声、胸の前で組んだ腕、夜空の星でも指差すようなしぐさ、さっきまでの表情がウソみたいに生き活きしている。

「ISのことわからないことがあれば、まあ、泣いて頼まれたら教えて差し上げてもよくつてよ。何せわたくし、入試で『唯一』教官を倒したエリート中の『エリート』ですから」

「あれ？俺も倒したぞ、教官」

「はあ！？」

「倒したつていうか、突っ込んできたのをかわしたら、壁にぶつかって動かなくなっただけど…」

「わ、わたくしだけと聞きましたが？」

「女子ではってオチじゃないのか？ヒロは？」

（一夏つて凄いな。ISを入試のとき動かしたつていうのに、ちゃんと動かせたなんて。織斑先生の弟だからかなあ…）

「俺は試験受けなかったんだ」

「何ですつて！？」

「いや、正確には受けられなかっただな。試験の実施が困難なくらい忙しかったみたいで、戦闘データを送っただけなんだ」

「そ、そんな事がみとめられるわけありませんわ！」

「そう言われても…」

（半分は一夏のせいみたいなもんだし）

「えーと、落ち着けよ。な？」

「こ、これが落ち着いていられー」

キンコンカンコン。

チャイムの音がこの状態を助けてくれた。

「っ…！話の続きはまた改めて、よろしいですわね！

「はあ…」

ヒロと一夏は同時にため息をついていた。

「あ、一夏、さっきの話だけど、手伝うよ」

「それは助かる！いや、正直困ってたんだ」

「とりあえず、これ貸してあげるよ」

ヒロは一夏に数冊のノートをあげた。

「俺が勉強するときに使っていたノート。まあ辞書代わりにでも使ってくれ、さすがに授業中とかわざわざ後ろ振り返るのも大変だろ？」

「おお、それはありがたい。ISの辞書って無いから助かる」

3時間目が始まった時、織斑先生が教壇に立っていた。ヒロは織斑先生がどんな授業をしてくれるのか期待していた。ヒロは織斑先生が、それはあっさりと覆された。

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者をきめないといけないな」

今、思い出したように織斑先生が言った。

（クラス代表か…さっきのオルコットさんあたりが自分から名乗り出るだろう。学年主席らしいし、あの性格ならプライドもあるだろう）

すぐに手を挙げた女子がいた。

「はいっ。織斑君を推薦します！」

「私もそれがよいと思います！」

（織斑先生の弟っていうのもあるだろうが、さっきの自己紹介のときが効いたのかもしれない。不幸中の幸いってやつだな）

「お、俺！？それなら、ヒロを推薦します！」

「えっ！？」

「他にはいないのか？いないならこの2人から選ぶことになるぞ」

（一夏に選ばれることを天に祈ろう…）

さっきも聞いた声が教室に響いた。

「納得がいきませんわ！」

机を叩いて立ち上がったのは、さっきヒロが予想した人物だった。

「そのような選出は認められません！大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！このセシリア・オルコットにそのような屈辱を1年間味わえとおっしゃるのですか！？」

（わざわざ、そんなこと言わないで、普通に立候補すればいいのに）
「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとっては耐え難い苦痛でー」

「イギリスだって大したお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何

年覇者だよ」

（何か危ない空気になってきた。クラス代表の話からどうしてこんなこと話してんだよ…）

「おいしい料理はたくさんありますわ！あなた！わたくしの祖国を侮辱しますの！？」

「一夏、落ち着けて。料理だけで国の価値が決まるわけじゃないんだし。オルコットさんも日本に来て日が浅いはずだし、すぐ日本のことは分かってももらえないって、な？」

「ああ、すまない…つい熱くなった。だけどどうする？」

「それは…『決闘ですわ！』…なあ！？」

噴火寸前の火山のような感じだったセシリアがとんでもないことを言い出した。

「おう。いいぜ。四の五の言うより分かりやすい」

「はあ！？」

「わざと負けたりしたら私の小間使い…いえ、奴隷にしますわよ」

「えっ！？ちよつと、俺はまだ…」

「ハンデはどのくらいつける？」

ヒロの発言はことごとく無視され、2人の議論はヒートアップしていった。

「はあ？あら、早速お願いかしら？」

「いや、俺たちがどのくらいハンデつけたらいいのかなーと」

（たち！？今、一夏『俺たち』って言ったよ！？）

「ちよつと！俺までやるの！？」

「「当然（ですわ）！」」

（こいつら、無駄にシンクロしてやがる…）

「織斑君、男が女より強かったのって、ISが出来る前の話だよ」

「…じゃあ、ハンデはいい」

「むしろ、わたくしがハンデをつけなくていいのか迷うくらいですわ。んふっ、日本の男子はジョークセンスがあるのね」

「織斑君。今からでも遅くないよ？ハンデつけてもらったら？」

「えっと…なら…オルコットさんには…シールドエネルギーをは…
『なくていい』…えっ!？」

「男が一度言ったことを覆せるか。俺たちのハンデはなくていい」

考えながら話すヒロの話に突然一夏が割り込んで話を進めてしまった。

「話はまとまったな。それでは勝負は次の月曜、第3アリーナで行う。泉谷、織斑、オルコットはそれぞれ準備をしておくように」

(先生まで…まとまってないよ…はあ、あの2人、やる気満々だよ)

一夏が割り込む前、セシリアはまるで奴隷を見るような蔑んだ眼でヒロを見ていた。

クラスメイトは女子ばっか（後書き）

アスラン…

学生寮にて（前書き）

時間がもっとほしい…

学生寮にて

放課後、ヒロは一夏の勉強に付き合っていると、山田先生が一夏の寮の部屋が決まったことを教えてくれた。一夏の荷物は織斑先生が手配しておいたそうで、すぐ寮に向かうことになった。

さつき代表候補生の話でウソを言ったことは理由も含めて話したら納得してくれた。一夏もあのの女子は苦手だそうだ。

寮の話で一夏はまたやってくれた。

「じゃあ、時間を見て部屋に行ってくださいね。夕食は6時から7時、寮の1年生用食堂で取ってください。ちなみに各部屋にはシャワーがありますけど、大浴場もあります。学年ごとに使える時間が違いますけど…えっと、その、2人は今のところ使えません」

（まあ、もともと女子高だしな。ISが使える男なんて前代未聞だからな）

「え、なんでですか？」

「一夏。ここ、元々は女子高だよ…」

「あー…」

「おつ、織斑君っ、女子とお風呂はいりたいんですか！？だっ、ダメですよ！」

（ダメだ…もう…腹が…あれじゃ、一夏って面白いや）

ヒロはまたも笑いを抑えるのに必死だった。

パーン！

「いつてえ」

ヒロが振り返ったその先には悪魔や魔女を凌駕する視線があった。

一夏は1025号室、ヒロは1027号室だ。一夏は不思議がついていたが、それには理由があった。

一夏に後で今後の対策会議をしに行くことも告げ、ヒロは一度部屋に戻った。

自室のドアに入り、今朝と変化のない部屋の雰囲気、机の上にある手紙、ヒロは後者に眼をやった。

それにはこう書かれていた

『ヒロヘー！急用が入った。入学は少し遅れる。しばらくは頑張ってくれ。――アスラン』

ルームメイト兼友人のアスランからの突然の手紙。最後にはこんなことが書かれていた。

『P・S 何があっても驚くな』

（一体何があつたんだよ…今回は書置きだけでもあつただけマシだ。模擬戦のこともあるから、後でメールしておこう。でも、ハロは置いていってほしかった…）

今日、何も先生方から何も聞かされなかったことを考えると、もう先生方は知っていたようだ。

気を取り直して一夏に会いに行くことにした。

（さすがに、相部屋とはいえ男女が同室になったってことはないよな）

1025号室に到着したヒロはさっそくドアに手をかけた。何故かドアの鍵が開いていた。一夏って無用心？とか思いながら思いつきりドアを開けた。

「おい、一夏！調子はど……う………？」

そこには…

制服姿の一夏、これはまだ納得だ。だが、そこにはもう1人いた。

この寮にはヒロと一夏しか“男”はいない。ってことはもう1人は自然と“女”ってことになる。

確かに驚いたんだが、それをも超越した事実があつた。その女からは白と黒と“肌色”しか見えない。

すなわち、白いバスタオルに包まれた健康的な肌、長い黒髪がシ

ヤワーを浴びたばかりだと思わせる瑞々しさ、髪を解いていたから気付かなかったが、それは篠ノ之さんだった。

「ヒロ………」

「泉谷………」

何なんだこの感覚、デジャヴってやつか！？…何で2人とも何も言わないんだ。

（それなら俺は…）

「お邪魔しました！」

Bannon！

「「あつ………」」

ヒロはドアを閉めてすぐさま退散した。

（退散するしかないじゃないか…）

自分の部屋の前に戻ってくるときには落ち着きを取り戻していた

（6年振りだもんな、2人ともああいう関係なのか？共学の寮とかだったら、ああいったこともあるのだろうか？…さすがに無いな。だがこれから注意しないと。まさしく驚が…）

カギを開け、ドアノブを回した。

（あれ、開かない…まだ入寮したの昨日なのにに壊れた？）

そうおもって同じことをするとその先には…

白と黒の世界が広がっていた。

バン！

ヒロはすぐさまドアを閉め、ドアに背を預けた。

そこには『驚学』の2文字（驚愕と共学ってことだろう）が達筆に書かれた扇子に視界を塞がれたからだ。

（あの扇子に、あの筆跡そんな、まさかそんなことが…ハッ！アスランの手紙の最後の意味って）

ガチャ

「うわぁ！？」

突然開いたドア、後ろに崩れ落ちるヒロ。支えを失った人間の体は止まらない。

むにゅっ

「い、痛くない？」

体に痛みは無く、むしろ後頭部には妙な感覚に包まれたいた。

「どう？おねーさんのおっぱいは？」

ヒロが声の主に顔を向けると、予想通りの人物がいた。

「あれ、おーいヒロ君、大丈夫？」

（どうしてこの人が？？どうして？？何でここ、IS学園に？？どうして？？）

ヒロの脳内はパニックのバーゲンセール中だ。

「えいつ」

侵入者に『むにつ』と両頬を指で押される。

「これでどうだ」

「ひゃめて、くらはい…」

「いいほつぺだよ」それに面白い顔」そんな顔されるとおねーさん、もっとイタズラしたくなっちゃうじゃない……」

グリグリ、グリグリ…

「もう！やめてください！」

「やん。おこらないで。こんなのスキンシップだよ」

わざとらしく、肩を小さくして縮こまっている侵入者。やっと脱出できたヒロは目の前の侵入者が誰であるかを改めて認識していた。

「いきなりドアを閉めるなんて失礼だよ」

「勝手に人の部屋に入るなんてもっと失礼ですよ！てかどうやって入ったんですか！？」

「おねーさんには必殺技あるの。ねえ、聞きたい？」

「遠慮しておきます…」

「おもしろくない」

「俺も面白くないです。てか、どうしてここに更識さんがいるんですか？ひょっとしてアスランに頼まれたんですか？」

「ご名答♪あとダメだよ。た・て・な・しって呼びなさい」

（さっきの最後の一文はそういうことか。てか、先輩…それ本名じゃないですね…）

女性にしては妙な名前だと思ってアスランから聞いた。彼女は「更識家」の現当主であり、楯無の名は更識家当主に代々受け継がれてきた名前。その更識家がどんな家なのかは知らないが、結構な名家だそうだ。

「楯無さん…」

「よろしい。それより聞いたよ、イギリスの代表候補生と噂の織斑一夏君と試合するんだって？」

「いつ知ったんです？」

「おねーさんには頼りになる味方がたくさんいるのです」

えっへんと胸を張って言う楯無さん。その姿勢はやめていただきたい。

「そうですか…あ、1ついいですか？」

（制服を見る限り、2年生…でも国家代表IS操縦者が高校生だなんて本当なのか？）

「何でも答えてあげるよ。でも、失礼なことを考えるような子にはお仕置きが必要かもね」

手をわきわきと動かしながら接近してくる。

「やっぱり…なんでもないです」

2人でベッドに腰掛けて続きを始めた。楯無さんはアスランのベッドに座っている。

その前に、これを仕組んだ張本人に電話をした。

『どうしたんだ？』

「アスラン、それを聞きたいのはこっちなんだけど。それに色々と驚いたよ…」

『ちゃんと書いたぞ“何があっても驚くな”って』

「確かに…そうだけど…」

クラス代表決定戦のことをアスランに話した。

『分かった、土曜日の午後までには調整を済ませてそっちに送っておく』

「色々ありがとう。それじゃあ、頑張ってな…」

『ヒロも頑張れよ、楯無にもよろしく言っておいてくれ』

今どこにいるかは聞かなかった。アスランにはアスランの事情があるみたいだから。

本題に戻そう

「楯無さんは俺の訓練の相手になってくれるんですか？」

当の本人はベッドでうつ伏せになって寝ていた。角度によっては彼女の下着が見える。

「もう、食べられません」

「……………」

（これは罠だな）

.....

.....

.....

「はやく起きてください。楯無さん!」

それから、2分間の戦いで彼女は眼を覚ました、フリをした。

「おねーさんにイタズラしても良かったんだよ?」

「そんなことはどうでもいいです」

「えゝヒロ君のいけずゝ」

「それで訓練の相手になってももらえないですか?」

「やってあげてもいいんだけど、私の専用機、今は整備中だし、訓練機じゃ色々手間がかかるから無理なんだなあゝそれに」

「それに?」

「おねーさんは日々、悪の秘密結社、迫りくる刺客達と日々戦っているヒーローだから時間が取れないの。ごめんね。でも、それ以外で出来る範囲のことなら手伝ってあげる」

「それなら……」

「ところで、おねーさんのおっぱい、どうだった？」

「ヨ、ヨクオボエテナイデス…」

「正直に話さない！」

手が、手の動きが危ない。逃げなきゃ、ヤバイ。くすぐられるのはほんとに嫌なんだ

ドン！

背中に壁が。

「えいつ！」

「あはははは！脇は…ダ…メですって…ば」

「良いではないか、良いではないか」

「あははは。や、柔らかかったですから！柔らかかったです！あはは、だから、や、やめてください」

ヤケクソ気味に叫ぶと、さっきまでの地獄が止まった。だが楯無さんの顔が接近してきて

「ヒロ君のえっちい」

と一言残して去っていった。

「もう寝よう。」

行き先不明の男／アスラン・ザラ／（前書き）

短めです

行き先不明の男くアスラン・ザラく

入学前日

正午にIS学園に到着したアスランとヒロは、織斑千冬、山田真耶の2人の教師によって学生寮に案内された。

（彼女が織斑千冬、引退してここで教師をしているとまでは掴んでいた。直接見るのは初めてだが、彼女はこの世界で会った中ではかなりの実力者だ。世界最強まで呼ばれただけの事はある）

「ここが貴様達の部屋だ。荷物はすでに届いている」

織斑千冬は学生寮の『1027』と書かれた部屋に来るまでの間ずっと、アスランやヒロに対して異常な警戒心を示していた。

（ヒロはかなり浮かれているな…まあ無理も無いか）

このIS学園にはかなりの資金が使われているように感じた。一般人から見たら想像を絶するほど設備が充実している。寮の設備だけで見れば、ここはホテルだな。ZAFTの士官学校と比べると、士官学校が可愛く見えてくる。

先に届けておいた荷物を片付けたアスランは、制服とともに渡された参考書に眼を通していたヒロに『学内を回ってくる』と告げ、

自室を出た。

（まあ、ヒロのレベルなら、あれでは物足りないだろう）

彼の真意は別にあつた。この学園の“実質的な”運営者に会うことだ。

アスランは寮を出てから校舎までの道を歩いていると、いつもの穏やかな顔から一変して軍人としての鋭い目つきになった。

（つけられている、それも並みの相手じゃない）

こんなことを出来る人は、この学園にいてもあまりいないだろう、そしてこの感覚には覚えがある。

「そんなところに隠れてないで出てきたらどうだ、楯無？」

「あーあ、あっさり見つかった。そんな怖い顔でいたいけな女の子を見ないでよ」

木々の後ろから現れたのは更識楯無だ。口調こそ普段通りだが、纏っている空気は今までとは違う。『対暗部用暗部』更識家当主としての物だ。

「ちょうど良かった、楯無…生徒会長である君に聞きたいことがある」

「話は“あの人”から聞いているわ。早速行きましょ」

「失礼します」

アスランは楯無と共に学園長室に入った。

「ああ、更識くん。ちょうどよかった」

アスランと楯無を迎えたのは穏やかな顔をした初老の男性だった。

「はじめまして、アスラン・ザラです」

「直接会うのは初めてだね。はじめまして、轡木十蔵だ。ところでウモンは元気にやってるかね？」

「ええ、主任は元気すぎて困っているくらいです……」

「まあ、アイツらしいね」

「理事長、そろそろ……」

「すまない……では、本題に入ろう。ファントム・タスク亡国機業についてはご存知なのだろう？」

「はい、例の『織斑一夏』の誘拐に關与していると」

「そうだ、私たちも彼らのことについて調査、対抗策の模索をしているが、状況は芳しくない……そこで」

楯無の悔しそうな表情が見える。

「私にもそれを手伝えと？」

「その通りです。更識くんには苦勞ばかりかけていますからね」

「事情は分かりました。ですが、私はどこかに所属しての調査は行
うつもりはありません」

「よく分かりました。やはり君は2人から聞いたとおりの人物だね。
私は無論、君を何かで縛り付けたりするつもりはありません。可能
な限りでのサポートもします。ですが、共通の目的を持つものとし
て、情報の共有を希望しています」

考え込んでいたアスランに目の前の老人は「君の望む範囲で構い
ませんよ」と最後に付け加えた。

（個人レベルでの調査はやはり限度がある。組織レベルのバックア
ップが必要かもしれない）

「分かりました。私の出来る範囲で協力させて頂きます」

「ではこれからよろしくお願いしますね。辛気臭い話はやめて、お
茶にしましょう。更識くん、例のものを」

「はい、アスランの分」

渡されたのは紅茶とお菓子だ。紅茶からはいい香りが漂ってくる。

「お茶は更識くんから、お菓子は私からだ」

「十蔵さんのお菓子のチョイスに外れがないから安心して」

「そんなにたいしたものではありませんよ。彼女の持ってくるお茶の方がすばらしいですよ」

「ありがとうございます」

とても、生徒会長と理事長、IS学園それぞれの長とは思えない感じだ。

そんなお茶会が終わり、理事長室を退出した矢先、アスランの所持していた携帯電話が鳴った。

『やつほーあつくん、今すぐ私のとこに来なさい。あとあと、おもしろい情報を手に入れたんだよ♪じゃねー』

トウー、トウー……………

「…はあ…」

ガチャ、

「あれ、アスランまだいたの？ひょっとして私を待っていたとか？…きやつ！」

アスランは体を寄せてきた楯無をかわした。

「楯無、すまないが急用でしばらくここを離れる。あと、ヒロのこ

とを可能な範囲で助けてやってほしい」

「そんな真剣な顔されたら、詳しく聞けないし、断れないじゃない。あゝあ、ヒロ君がうらやましいなあゝ」

自室に戻った頃には日が沈んでからかなり経過していた。明日の準備を済ませていたヒロはすでに寝ていた。

アスランは最低限の荷物を持って月明かりが照らす空へ飛び出した。

自室に1通の手紙を置いて…

翌日のとある研究所にて、

「あつくん、あつくん！ここをこうしてこうして、こんな感じでどうかな？」

ヒロからの電話を終えたアスランに1人の女性がやってきた。

「……さすがですね、エネルギー効率が約13%向上しました」

「スゴイゼ・タバネー！スゴイゼ・タバネー！」

連れてきたヒロがまたも妙な言葉を話す。

（誰がそんな言葉、どこで覚えさせたんだ？まあ、予想は出来るが……）

「ふふん！天才の私にはこのくらいお茶の子さいさいなのだよ、あけちくん？」

「『あ』しか合っていないせんよ……そろそろ、『面白い情報』というのを教えてもらえませんか？」

「うーん、ま、いつか。いつくんが世界的な有名人になったことは知ってるよね？」

「ええ、それは勿論ですが……」

「それでね、まだ正式発表されていないことなんだけど……色んな国にハッキングしてたら面白いことが分かったんだよ。てへっ」

「……………」

「だんまりとはひどいな……東さんは悲しいよ」

「それでどうなんです？」

「良くぞ聞いてくれました！なんと！なんとなんと！……」

アスランは目の前の天才（天災？）がどんなことを言い出すのか見守っていた。

「他の国からも男のIS操縦者が現れたんだって」

「……はあっ!？」

(男のIS操縦者の量産化でも何か行われているのか?)

「その顔いいよ〜あつくんの貴重な顔、ゲットだぜい!東さんの頭脳にしっかりと保存しておいたよ。にやはは!ちなみに分かっているのはねえ〜フランスと……なんだよ」

そんな話をする2人の後ろには白と紅の2つの鎧、複数の黒い巨人がいた。

行き先不明の男ゝアスラン・ザラゝ（後書き）

後々、色々分かります

改めて読み返していたらかなり間違いが見つかってしまった。

準備期間にて（前書き）

段々書く文字数が多くなっていく…

準備期間にて

ヒロは朝食をかなり早めに取っていた。“男子”がよほど珍しいのか女子からは常に見られている気がしたからだ。一夏も誘おうと思っただが、幼馴染と積もる話もあるだろうから止めておいた。昨日の事もあったので…

食事を済ませ、食堂から出ようとしたとき

「よ、よう、ヒロ…」

「お、おはよ、一夏…」

「昨日の事なんだけど…そのな、箒とはたまたま一緒になっただけで、ヒロが来たのは箒がルームメイトって知った直後だったんだ。その後も箒に殺されかけるし、廊下に追い出されて女子には囲まれるしで大変だったんだ」

「本当のことが聞けて良かったよ。あの時はかなり焦ったから…」

「誤解が解けたようで何よりだ」

「どうした、一夏？さっさと食堂に入…れ…っ!？」

一夏が通路を塞いでいたらしく、後ろにいた背の高い女子が一夏に声をかけてきた。

「それじゃ、一夏、お先に」

「おう、また後でな」

「おはよう、篠ノ之s…いや『織斑』 箒さん」

ヒロは一夏には聞こえないように言った。

「…っ!!」

「箒、行くぞ?…おい、大丈夫か!? 顔が真っ赤だぞ」

「だ、ただ、大丈夫だ! 行くぞ、一夏」

一夏は先に行ってしまった箒を不自然に感じていた。

「箒らしくないな…」

箒は右足と右手、左手と左足が同時に動いていた。

今日もISの授業がびっしりと行われていたが、

「織斑、お前のISだが準備まで時間がかかるぞ」

「へ?」

「予備の機体がない。だから、学園で専用機を用意するそうだ」

「せ、専用機！？1年のこの時期に！？」

「すごいなあ…。私も早く専用機ほしいなあ…」

「それを聞いて安心しましたわ。クラス代表決定戦！わたくしとあなたでは勝負は見えていますけどさすがにわたくしが専用機あなたが訓練機ではフェアではありませんものね！」

「お前も専用機を持っているのか？」

「ご存じない？よろしいですわ、庶民のあなたに教えて差し上げましょう。このわたくし、セシリア・オルコットはイギリス代表候補生…つまり、現時点で専用機を持っていますの」

専用機…ヒロのノートの重要項目に書いてあった。ISは467機しかない、ISのコアがブラックボックスなおかげで、作った人が467個しかコアを作らなかったので467機しかない。

「一夏が専用機を貰える理由は何となく分かるな」

「俺にも専用機が？でも、国家や企業に所属してないけど…」

千冬姉が一瞬だが驚いた顔をした。ほんとに一瞬だったが。

「そうだが、お前の場合は状況が状況なので、データ収集を目的として専用機が用意されることになった」

そんな時、クラスのある女の子がおずおずと千冬姉に質問した。

「あの、篠ノ之さんってもしかして篠ノ之博士の関係者なんでしょうか…？」

「そうだ、篠ノ之はあいつの妹だ」

（篠ノ之博士のことを“あいつ”呼ばわりとは…でも一夏と篠ノ之さんが幼馴染なら、姉同士も友人なのか？もしそうなら、織斑先生の強さにも少しは納得がいく）

「あの人は関係ない！」

クラス中が篠ノ之姉妹について盛り上がる中、篠ノ之さんの声がそれを一気に沈めた。

「私はあの人じゃない。教えられるようなことは何も無い」

（“実”の姉の事を“あの人”呼ばわりか。篠ノ之博士って一体どんな人物なのか今度一夏に聞いてみるか）

「山田先生、授業を」

「は、はい。それでは授業を始めます。みなさん、テキストを出してください。今日は昨日の続きから…」

（思い出した！篠ノ之箒、たしか去年の剣道の全国大会の優勝者だ）

剣道部に所属している友達が去年こんなことを言っていた。

『今年の全中の優勝した女の子がさあ、メツチャ美人だったんだよ』
かなり興奮しながらその友達が話してきた。

『どんな感じなの？』

『結構背が高めで出るとこはしっかり出てなあゝありゃ、中学生じゃないね！グラビアアイドルだって言われても納得するね！あつても……』

いつも陽気で面白い友人がこんな何かに怯えたような顔をするのに疑問に思った。

『でも……？』

『いや、その子、メチャクチャ強いんだよ』

『そりゃ優勝者だもん……当然じゃないの？』

『それはそうなんだけど……何ていうかさあ、凄い怖かったんだ。負けた相手は泣いちゃってたし』

『怖い？よほど、剣道に真剣に取り組んでいるってことでしょ』

『違うんだ。何か、こう、ストレスを発散したって感じなんだ』

『結構大変なんだな……それでも勝っちゃうんだから凄いな』

『実力は申し分ないんだ。あつ…』

『まだ何かあるのか？』

『その子の名字が“篠ノ之”っていうんだよ！』

「一夏、先に食堂に行って席取ってるよ」

「おう、頼む。……第……篠ノ之さん…」

一夏は篠ノ之さんを昼ご飯に誘いにいった。久しぶりに会った幼馴染に難儀しているらしい。

（一夏も大変そうだな）

「ちょっとそこの庶民！」

「何でしょう？私のような“庶民”に何か？」

（今までの癖でつい反応しちまった。はあ…めんどくさいから、ささと済ませよう）

廊下の真ん中にセシリア・オルコットさんが腰に手を当てて待ち構えていた。口調は気に食わないが、無駄にポーズが決まっている。

「やはり、男はそういった態度の方が似合っていますわ」

「急ぎの用がありますので手短にさせていただきたいのですが」

「ふん、庶民の分際でこのわたくしに命令とは生意気ですね。まあ、そのことに関しては許して差し上げますわ」

（下手に出たのにこの態度がよ……）

社会がこういった情勢なのであまり気にしてられない

「織斑先生の弟さんは専用機が用意されるとの事ですが、あなたはどうかしますの？まさか、訓練機でこのわたしと戦うつもりなの？」

「いえいえ、私は民間企業に所属していますので専用機を持っています。そのお心遣い感謝します」

「むっ。まあでも、専用機でも訓練機でもわたくしが勝つのは当然のことですわ。何せこのわたくしが相手なのですから。逃げずに戦うというつもりなら、イギリスを侮辱した罪、その身で味わっていただきますわよ」

そう言い切った、セシリア・オルコットはイギリスの淑女らしい歩き方で去っていった。歩き方も貴族らしい感じがした。

（俺は侮辱してないですよ……）しかし、イギリス、オルコット、イギリスのオルコット、どこかで聞いたことがある気がするんだが……）

「一夏、大分時間かったね」

「それが、箒を誘えたのは良かったんだけど、ここに来る途中で3年生につかまっちゃって…」

1組がクラス代表を模擬戦で決めることはもう、学校中に広まってるらしく、一夏のコーチを名乗りでた3年生がいたらしい。一夏がお願いしようとしたら、篠ノ之さんが「私は篠ノ之束の妹ですから」と言っ、その3年生は退散してしまったということだ。

（さっきはあんなことを言っていたのに、都合のいいときだけ姉の名前を使うのか…それはどうかと思うのだけど…）

「俺のことはさっき言われたけど、ヒロは専用機を持っているのか？」

「俺は民間企業に所属しているから、一応持つてるよ」

「一応？」

「今、調整中なんだ。今度の土曜日には届くと思う」

「それなら、それまで俺にISのこともつと教えてくれないか？このままじゃ、何も出来ずにセシリアに負けそうだ」

「俺だつて使い始めてから日が浅いから、大したことは教えられないよ。むしろ訓練の相手を頼もうと思つてたくらいなんだが」

「そこを何とか、頼む！」

「「下らない挑発に乗るからだ」」

（おかげで、俺まで巻き込まれちゃったよ）

「大体どうして泉谷に頼むのだ？ ISの事を聞くならルームメイトで“幼馴染”の私に聞くべきじゃないか？」

「確かに一理あるな。一夏のことをよく知っている篠ノ之さんの方が適任か…」

「そうだろう、そうだろう、よし、一夏のことには私に任せろ」

「ところで一夏って入試のとき、使ったのって打鉄だっけ？」

「ああ、そうだ。装備されてた近接ブレードも何かこう…いい刀だったな」

「そつえば、一夏は剣道やってたよね？」

「鍛え直す！ IS以前の問題だ！これから毎日、放課後3時間、私が稽古をつけてやる！」

「ちょっとまで、おれはISのことを…」

「だからそれ以前の問題だと言っている！」

剣道場にて一夏は篠ノ之さんにやられていた。篠ノ之さんのあの激昂ぶりを見ると、昔はもっと強かったそうだ。

「まあ、帰宅部ならなあ…」

「『まあ、帰宅部ならなあ』じゃねー！あの一言が無ければ、ISの訓練が少しは出来たんだぞ！もし俺の専用機が射撃メインだったらどうするんだよ！？」

「そのときは打鉄のブレードを拝借する」

（一夏の入試時の教官はいきなり突っ込んでそれをかわされたら、壁にぶつかって動かなくなっただけで聞いた。けど、ISを20、30分程しか使っていない人が、突然の行動に反応しきるなんてそれ自体が凄いと思うんだが…俺なんて、ははは…）
「どうしたんだヒロ？」

「な、何でもないよ！そ、それじゃ一夏、頑張ってくれ」

一夏が何か呼んでいる気がしたが、スルーして帰ることにした。

そんなこんなで土曜日になり、アスランから調整されたISが送られてきたので、自分の最新のデータを送って微調整、殆ど変化の無い自分に絶望しつつも、アーリーナで簡単な動きの確認をしたら終

了時間になってしまった。

（寮に戻ってきたのはいいんだが、楯無さんがいる気がするのは何でだろう）

ここ最近ドアを開けるたびに彼女がいた。それだけならちよつと驚いたで済んだんだけど、服装がおかしい…学校指定の水着だったり、ブルマーだったり、Ｙシャツだけだったりとおかしい…

中学の友達が

『今は絶滅に近い、スクール水着とブルマーは日本の宝だ！』

って言っていた。その理由が何となくだが分かった気がする（↑
おいおい）

あの人の場合スタイルがヤバイから破壊力がかなりあるんだが、『他人を弄ぶ』という行動理念？のようなものがあるので、過激なスキンシップも極力スルーしているので、ギリギリで何とかなっている。

もったいない気がしなくも無いが。

勿論、スルーしたその後には地獄が待っている。

ガチャッ

「お帰りなさい。ご飯にする？ お風呂にする？ それとも私？」

「……………ご飯、食べてきます……」

バンッ！

「食堂行つて、ご飯食べてこよう」

楯無さんがどこぞの令嬢のように礼儀正しく正座し三つ指を立ててあんな事を言つたなんて物は見ていない。

（あ、あれは中学の友達が言っていた、新婚がやるといふやつなのか？）

2時間ほど時間を潰してヒロは自分の部屋に戻ってきた。

（もしあれが事実だとしてもさすがに帰つただろう。幻だとしても余計にたちが悪い……）

ヒロはゆっくりとドアを開けながら中の様子を窺った。

カチャッ

「ふう…良かった………っ！」

部屋には誰もいないはずなのに、

全身を舐めるような視線がヒロを不安にさせた。

部屋を見回しても、誰もいない。全身から嫌な汗が出てくる。

（何なんだよ…一体）

突如、頭上に違和感が。

「おいヒロ君、大丈夫？」

「……………」

「返事が無い…ただの屍のようだ」

「い、生きてます。はあ…はあ…はあ…けど…もう…むり…」

「まだまだ元気でしょ？若いんだから」

「それ…関係ないです…『もう1回する？』…遠慮して…おき…ます……………センパ…イ…はげしいから…」

「そんなこと言っちゃダメだよ。さっきは、あんな気持ちよさそうな顔してたのになあ」

「あんな顔をそう解釈する先輩はあくm……………何でもないです」

ベッドの上で瀕死状態のヒロは『君、感度いいから、凄く楽しいのよ』と言って、接近してくる楯無に対して何も言えなかった。

それは30分ほど遡る

ヒロが違和感に気付いたときにはすでに遅かった

「おねーさんの厚意を無視する奴にはこーしてやる！」

「えっ！？先輩、まだいたんですか！？…ぐはっ！」

ヒロは楯無さんに後ろから押し倒される形でベッドに沈んだ。

それが分かったときには全身をめぐる地獄の感覚が再来していた。

「あはははははははは！ダメッ…あははははははは！や…め…」

息ができないくらいに笑っているヒロ、イタズラっぽい笑みを浮かべながら、脇をくすぐり続ける楯無。

「ちゃんとやってくれないと、おねーさんやめてあげない。それそれ」

「ぎゃあああああああああ！や……………めてく……………らはい！」

楯無がその体を惜しげもなく密着させながらくすぐっているが、ヒロはそれには全く気付かず、叫び続けている。

「何？やめてほしいの？どうしようかしら」

「お、お願いします」

「そんな捨てられた子犬みたいな顔しないの。そうねえ」

「……………ぎゃははははっ」

「油断しすぎだよ。おねーさんの言うことを聞いてくれるなら許してあげてもいいかなあ」

（この人に弱みを握られては絶対にいけない）

「そんなときけるわけ……………あははははははは……………聞きます！聞きますから、やめ……………やめて！」

ヒロの思いは無残にも打ち砕かれ、今後の学園生活に支障がでる可能性が出てしまった。

「これからおねーさんのご厚意をしっかりと受けること！いいよね？」

（あれをまともに受けるのか？でもあの理性と全面戦争をしなきゃいけないか……………もし負けたりしたら、社会的に死ぬ……………）

「分かりました！あははは、分かりましたから、ぎゃははは！手を止めてください」

「止めたんだけど、ヒロ君を見ていたらやめられないな」

「ぎゃ~~~~~」

それから約20分の地獄が続き、今に至る。

「もう、そんな顔で怒らないでよ！元と言えば君が悪いんだよ」

「だからってあそこまでしなくても……もう、お嬢にいけない……」

「そんな妙なこと言っちゃって。あ、でも、そのときはおねーさんがもらってあげる」

「……………」

「あゝ疑ってるー。私だって、納まるところに収まりますよ」

「ところで、例の件ですけどどうですか？」

先輩が何やら文句を言っていたがスルーした。付き合っていたら体が危ない。さすがに、今日はもうやってこないと思いたい。

「問題ないよ。その前に私の質問に答えてくれないかしら？」

「それぐらいなら、全然構いませんよ……………内容にもよりまずけど……」

「アスランのことどう思ってる？」

最初は不安だったが、いつもの良く分からない楯無さんではなく、真剣そうな顔を見ていたら話してもいいと思った。年上のお姉さんらしい表情の彼女になら。

はつきり言って、ヒロ君には興味があった。『ISが使える男』
それだけでも惹かれるのだが、あのアスランが一目を置いているのだからかなり気になる。

アスランから彼のデータを見させてもらったが、全く分からない。

アスランはISの操縦は勿論、生身ですら私じゃ勝てない。織斑先生よりも強いのではないかと思う。はつきりと言えないのは彼の本気を見たことが無いからだ。

ヒロ君はまだまだどうなるか分からない。しかし、1ヶ月程の訓練をアスランで行った筈なのだが今まで見たどの女子よりも酷い。

そんな彼がアスランの事をどう思っているのかも気になった。

訓練での話、日常の話などを聞く限り

「2人って兄弟みたいだね」

思わず口になっていた。ヒロ君の楽しそうな顔を見ていたら、そう

言わずにはいられなかった。

「そ、そうですか？」

「私はそうおもうな………2人が羨ましい」

「……………？」

何か言った？、とヒロ君が首をかしげてた。

「な、なんでもないよ」

「兄弟かあ……本当だったらよかったんですけど……」

「ヒロ君は1人っ子？」

「姉がいたらしいんですけど、物心つく前に亡くなったみたいです」

「……そうだったの、ごめんなさい」

楯無は申し訳なさそうに頭を下げた。

「そんなに気にしないでください。あ、でもアスランと兄弟だったら、周りからの評価とかがたいへんそうですね……」

「確かにそう思うわ……」

「彼の弟ならできるとか……でも俺は俺、アスランはアスラン、結局自分に来ることしか出来ませんよ」

口で言うのは簡単だけど。ヒロ君は本当にそう思っているのを感じた。

「……………」

「楯無さん？」

「う、うん？え？」

「何か考え事ですか？」

「え！？あ、そう！考え事！ねえヒロ君！2人だけの時は私がお姉さんになってあげようか？」

「……………またまた、そんな冗談を」

「じょ…うだ…ん…ね。ごめんなさい、妙なことを言っちゃって。それじゃ、おやすみなさい」

楯無はヒロの部屋から誰にも気付かれることなく、自室に戻った。これも更識家の力か。

（私、何考えてるのかしら…いくらあの2人が羨ましかったからって、ヒロ君にあんなこと言っなんて…）

ベッドにダイブしたまま、ずっと悶々としていた。

（もし、ヒロ君が弟になったとしても…私には、私には本当の妹がいる）

その子は自慢の妹だ。

だけど、いつの頃からかまともに会話さえしていない。

（簪ちゃん…あの子とちゃんと話す機会がほしいなあ）

『明日までには何とかするわ』と一言残して楯無さんは走り去っていった。

（頭の中では本当に思っている。けど俺には経験がないから、もしそういった状況にある人に対してはつきりとは言えないな…）

ヒロはさっきの最後の会話を思い出していた。

（アスランと兄弟か………っていつても、俺はアスランのことあんまり知らないんだよな）

アスラン・ザラ…去年の夏に出会って突然の失踪、先々月に再会して今に至る。

容姿端麗、頭脳明晰で17歳とは思えないほど大人びていて、ISも生身も強い。けど、彼にピアノ以外の音楽を聴かせると寝てしまふ、という弱点？のようなものがある。ピアノを聴いていると表情の変化があまりないが、どこか遠くを見ているような感じになる。

それでも彼に関しては知っていることは少ない。

何せ

『この世界の人ではない』

最初は疑っていたけど、それもここ最近の出来事でその事実も信じざるを得なくなってきた。

1番影響を与えたのはIS学園に来る直前に行った模擬戦でのとだ。

その日の俺は今までに無いくらい調子が良かった。

模擬戦ではアスランが手加減をしてくれているのは分かっていたが、何が何でも1発は当てたかった。

太陽が東から昇り西に沈むように、試合内容はアスランの一方的な展開だった。

あと1発でも食らえば負けになるときに俺はアスランにだめもとで急接近した。中近距離で戦えば、1発くらいはかすってくれるかもしれないと思った。

それもばれていたようで、俺の懷にアスランは2本の実体剣を連結させて飛び込んできた。

急回避しようとした、

『間に合わない』

本当にそう思ったが、試合終了のブザーが鳴ることは無く、アスランが俺に背を向け、袈裟切りが空を切る姿が見えた。

ISのディスプレイに何かが表示され、他にも何かいた気がしたがそれらは気にせず、構えていたライフルを超近距離で発射した。アスランは反応すらしていなかった。

今度は

『捉えた！』

って思ったが、次の瞬間、ライフルが爆発した。

何が起こったか分からなかったが、ただ2つは言えることがあった。

爆風の中、宙を舞うライフルの銃口。そして、ハイライトのないアスランのエメラルドの冷たい瞳。

それも一瞬ですぐに普段の穏やかな表情に戻った。しかし、その瞳に見られた一瞬はとても長く感じ、俺は動けなかった。

それを思い出すだけで身震いがして、呼吸が苦しくなる。

（蛇に睨まれた蛙ってこんな感じなのかな）

そして“あの時”見た事も本当なら、アスランの常人離れた強さなどにも納得がいく。

（まあ、俺から聞いただすつもりはない。アスランが話してくれる
時を俺は待つ………そんな時はこないかもしれないけど）

ヒロの意識は徐々にやってきた睡魔に身をゆだねた。

準備期間にて（後書き）

あれ、いままでで1番の量かも

クラス代表決定戦〜VS学年主席〜（前書き）

戦闘シーンって難しい

クラス代表決定戦 VS 学年主席

今日はクラス代表決定戦だ。

俺、セシリア、ヒロの総当たり戦になった。

最初にセシリアとヒロ、次に俺とセシリア、最後は俺とヒロの順番だ。

「あれが2人のISか」

セシリアのISは鮮やかな青を基調としたISで特徴的なフィン・アーマーが4枚背に従え、王国騎士のような気高さをかんじさせる。

ヒロのISは白を基調としたISで首から下が全て装甲になっている。左肩には深紅の色で91の文字。右肩には同じくFの文字。
マルチススラスト
他方向加速推進翼が無く、各所にスラスト口のようなものが見える。
アンロック・ユニット
非固定浮遊部位が無いせいか、セシリアのISよりも小さく見える。

ピットでリアルタイムモニターを見ていた一夏はアリーナ中央に浮かんでいる2人のISを見ていた。

山田先生が2人のISを説明してくれた。

「セシリアさんの機体は『ブルー・ティアーズ』遠距離射撃型のI

Sですね。泉谷君は『F91』……………」

「『ISの小型化』を趣旨に開発されたISのようだな」

口ごもった山田先生を千冬姉がフォローしてくれた。

「ISの小型化……………」

「F……91……………」

（何で箒も山田先生も千冬姉まで頬を赤らめているんだ？）
箒なんか腕組みをするフリまでしている。

試合開始

シールドエネルギー残量、600。

（まただ。何か妙な感じがする…）

操縦に何の問題も無いんだがIS学園に来る直前に比べて、一体感が無いというか、どこか靄がかかった感じがする。

「そのようなISでこのわたくしと戦おうだなんて、逃げずに出てきたその度胸だけは認めて差しあげますわ」

「ありがとうございます。けど、見た目で判断するとどうなっても知りませんよ」

（こっちはやれることはやったのに、アイツは下調べの1つもしないのか…舐めやがって）

「残念ですわ。それなら……」

（しかしなあ、眼のやり場に困る…）

楯無さんほどではないが、オルコットさんもかなりスタイルがいい。さすが、外人とでも言えがいいのだろうか。

ー警告ー

敵IS射撃体勢に移行

ISのセンサーが警告音を発している。

「その身に格の違いというものを刻み付けて差し上げますわ!」

「えっ!？」

下らないことを考えていたヒロはギリギリで“シールドバリアー”を使って、セシリアが放った、—67口径特殊レーザーライフル《スターライトmk?》を防御した。その衝撃がヒロを大きく吹き飛ばす。

「さあ、踊りなさい。わたくし、セシリア・オルコットとブルー・ティアーズの奏でる円舞曲^{ワルツ}で!」

体勢を立て直したヒロに向かって青い閃光が続けざまに襲い掛かった。

試合開始から5分経過

シールドエネルギー残量、490。

（どうしてだろ？）

データで見たときの方が、強そうに感じた。そのデータは楯無さんが持ってきてくれた。楯無さんでも当然無理だと思ったけど、意外や意外、持ってきてくれた。

レーザー兵器が…レーザーって確か真空中、つまり宇宙では光を発しないって聞いたことがある。IS同士ならともかく、第3者からは何も見えない。

（宇宙で一体どんな使い方ができるのやら）

「所詮、あなたのような“運”だけで選ばれたような人間がエリートであるこのわたくしと同じ専用機持ちだなんて、いい加減にしないでいただきたいですわ」

突然射撃を止めたセシリア・オルコットが話しかけてきた。

「話なら試合が終わってからにしてほしいのですけど…」

「そうですね、庶民と話す時間なんて無駄ですわ。一気に決着をつけて差し上げましょう！」

セシリアのISから4つのフィン状のパーツが分離、さっきのラィフルほど太くは無い青い閃光を発しながら、こちらに向かってきた。上下左右など縦横無尽に動き回るビットが様々な方向から襲い掛かる。

『真下』から

ダメージ20。シールドエネルギー残量、470。

『真後ろ』から

ダメージ18。シールドエネルギー残量、452。

『真上』から

ダメージ21。シールドエネルギー残量、431。

それぞれの攻撃に対して体を反転させてシールドバリアーで防ぐ。

全方位から攻撃が可能といっても、“IS”なら見えないとこな
んて無い。それでも当るのは操縦者の想定外の事が起こると、体は
反応できないからだ。ハイパーセンサーがあるといっても、動かす
のは人間だ。人間は脳が認知してないことは対応できない。

それなら意識を広範囲に向け、射線軸上に入りさえしなければな
んとかなる。今のあのISの“稼働率”では“直線”にしか攻撃で
きない。

おまけにさっきのライフルより火力は無い。

光学兵器のほうが実弾より速い筈なんだけど、アスランほどの恐
怖は微塵も感じられない。いや、根本的なところから違う気がする。

試合開始から10分経過

（調子でも悪いのかしら？）

楯無はアリーナの観客席の片隅から試合を見ていた。試合はセシリアちゃんの一方的なものだった。

ヒロ君に頼まれていたのは、『セシリアちゃんのISのデータ』
本当ならもつと色々渡せたのだが、彼がそれだけでどう戦うのか
を見てみたかったからやめておいた。

（動きは妙だし、1発も攻撃してないしそれに……）

楯無はアリーナでいいように踊らされているヒロに疑問を持った。

（どうしてわざわざ“シールドバリアーで”防御してるのかしら？）

試合開始から15分経過

シールドエネルギー残量、243。

いくつか表示されているウィンドウの中にヒロのIS『F91』

のステータスを表示しているウィンドウがあった。

「一方的な試合になりましたね…」

ピットモニター上では泉谷がよいように踊らされている。

「セシリアってあんな強いのか…」

「そろそろ、泉谷のシールドエネルギーも危ないのではないでしようか？」

「確かに。だが、試合終了のブザーが鳴るまで、しっかり見ていろ。“最後まで”な」

「でも、ここから逆転はキツイだろ」

ISの装甲自体に損傷は見えないが、かなりのダメージは受けているはず。

それに対してオルコットは無傷。というより、泉谷は一度も攻撃をしていない。

（入学時に受け取ったデータの時よりも、動きが酷すぎる。いったいどうしたのだ？）

試合開始から20分経過

シールドエネルギー残量、168。

セシリアの怒涛の攻撃がヒロに反撃の隙を与えない。

（あんな小さいもの、俺の技術じゃ当てられない。装甲を破壊されないようにするので精一杯だ。けど…）

『本体に攻撃を当てればいい』

相手のデータを見た時から考えていた事だ。ビットは無視して戦う。それにさつきから“4つ”のビットしか使用していない。

それにあのでかいライフル、間合いを詰められれば向うが不利になるはずである。

大方、初心者なら遠距離射撃型が相手なら近距離を仕掛けるとでも思っているのだろう。その時に“残り2つ”を使うつもりに思える。

（さつきから、アイツは殆ど動いていない…）

ヒロが攻撃をしていない、出来ないのもあるが、セシリアは王様が玉座に座り続けるように殆ど動いていない。

（舐めやがって！）

そんな時に、青い雨が止み、ビットは四方で待機している。オルコットさんも戸惑ったような表情で動きを止めている。

（エネルギー切れか？…もらった！）

ヒロは右手の“ビームライフル”をセシリアに向けるが、

「——かかりましたわね」

「え!？」

にやり、とセシリアが笑っているのが見えた。青い4本の閃光がライフルに突き刺さり、直後に襲われた爆風でその先が見えなくなった。

試合開始時から右手に構えていたライフルがなんの役割を果たさずして爆散したのである。

右腕のアーマーで爆発を防いだ。そのおかげで一部が爆発で破壊され、皮膚がむき出しになりながら吹き飛ぶ。

「右腕、いただきますわ」

「やらせるか!」

（相手は完全に油断しているはずだ!今なら、いや!今しかない!）

すぐに体勢を立て直し、左腕の“ビームシールド”を展開、

（これしか残ってない!けど、あんなことまで言われて、簡単にやられてたまるか!）

右脇に“ヴェスバー”を構えて、発射した。

「え!?!きゃっ!」

セシリアのレーザーをビームシールドで完璧に防ぎ、ヴェスバーの光が左足をかすめ、その直後アーマーの一部を破壊した。

（やっぱりコイツは…強力すぎる…）

ヒロは左足の装甲を吹き飛ばした衝撃でバランスを崩しているセシリアにフォールディングレイザー対装甲ナイフを呼び出しながら突撃した。

シールドエネルギー残量、94

「あのまま、狙撃していればよかったものを！」

体勢を立て直したセシリアはさっき何が起こったか分からないままだったが、強気に叫ぶ。

「うるせえ！」

（今までと全く口調が違いますわ…織斑一夏と違って、冷静な方かと思っていましたか…）

完全にさっきの1発で決まったと思っていたがこちらの攻撃が完全に防がれ、強力なビームがセシリアを襲った。その事実がセシリアを惑わす。

（ビーム兵器ですか、おまけにスターライトmk？よりも出力は上
のようですわ。けど…）

続けて撃たれていたら危なかったが、ナイフ1本で突撃してくる
のなら、丁度いい。

「残念ですわね」

なおも接近してくるヒロに対してセシリアは“残り”のブルー・
ティアーズを使うことにした。

「これでチェックメイトですわ！」

セシリアは両腰部から“ミサイル弾頭型”ビットを射出した。

ドカアアン！

ヒロは回避出来ず、ミサイルが直撃した。

「少し時間がかかってしまいましたわ」

ミサイルが白い爆発を起こし、その場所を煙が広範囲にわたって
包み込む。

………

………

………

（試合終了のブザーが鳴りませんわ。まさか！？）

完全に勝ちを確信していたセシリアだったが、その油断が一瞬の隙を生み出す。

「はああああ！」

『はああああ！』

『っ！……イ、インターセプター！』

気合の入った叫びと半ばヤケクソ気味の叫び声が聞こえた。オーブンチャンネルからも聞こえた。

ヒロは煙の中から上空に躍り出て、右手のナイフで一気に切りかかった。

セシリアも近接ブレードを左腕に呼び出してヒロの斬撃を受け止める。

（油断するからだ。馬鹿者が…）

ピットのモニターにはセシリアの屈辱と困惑が入り混じったような顔が映し出されていた。

「ふう…良かったです」

「あれをまともに受けて無傷とは一体？それにシールドエネルギーも被弾前より減っていない」

シールドエネルギー残量、94。あのミサイルの直撃もヒロのISには何のダメージも無かった。

「完全に直撃していたよな？」

「確かに直撃はしていたさ。泉谷が被弾する直前に手放した、ビームシールドにな」

「「ビームシールド？」」

「さっきのセシリアさんのレーザーを防いだのもビームシールドですね」

「ああ、おまけにあのシールドは発生装置が着脱可能なようだ。左腕に窪みができている」

「さっき、左足のアーマーを破壊したのはビーム兵器ですか？」

「ああ、そうだ。出力だけなら、オルコットのISよりも格段に上だ」

（攻撃も、防御もビーム兵器とはな）

おまけにあれらの武装の完成度はかなり高い。

（気になるのは、泉谷の所属する民間企業とその研究員のアスラ・ザラか…）

アイツに会ったとき、何か大きな事を隠している感じがした。

唯の民間企業の研究員が纏っている空気とはとても思えなかったからだ。

おまけに入学直前になって、どこかへ行ってしまった。

理事長とも繋がりがあるらしい。アイツに関しては謎が多すぎる。

『うおおおおお！』

（いい性格してるわ……………）

さっきまでが嘘のような気合と動きだ。実際、今のヒロ君本来の動きだろう。セシリアちゃんも戸惑っているのが分かる。

ヒロは空いている左手を使って、セシリアに殴りかかっていった。

それを右腕のアーマーで防ぐが、ISのパワーアシストが加わったそれはセシリアを地表に打ち付けた。

（ちゃんと動けてる。基本動作にかなり時間をかけたただけのことはあるわね…………その分、他がメチャクチャ弱いけど）

最初の射撃と今の近接攻撃、意表をつけたから上手くいったけど、近接格闘がやっぱり酷い。あれじゃ、そこら辺のチンピラの方がま

だマシに思える。

セシリアが体勢を直す前に追いついたヒロは両腰に構えた2本のライフルをその眼前に突きつけている。

さっき発射した“ヴェスパー”である。

（この距離なら外さない！）

クラス代表決定戦〜VS学年主席〜（後書き）

セシリアのフラグは一夏に持っ
ていただきます

クラス代表決定戦、一夏の力

『試合終了。勝者——泉谷ヒロ』

「まさかこんな結果になるとは…」

篤も驚いている。ヒロがあんな状況から逆転するなんて

「ああ、そうだな」

試合はヒロの勝利となった。

セシリアの“降参宣言”で……

ヒロは1人アリーナの更衣室にいた。ピットに戻ったとき一夏と何か話したが、よく覚えていない。
(ふう…疲れた……)

結果だけ見れば勝ったわけだけど、最後は酷かった。

試合中、いや、入学初日からセシリア・オルコットの態度は気に食わなかった。

それからは、模擬戦のことは不本意だったけど『見返したい』そう思った。あれだけバカにされればそうもなるだろう。そのために、1週間で出来ることはやった。

試合が始まってからは、かなり必死にやっていた。セシリアが俺より強いのは分かっていたからだ。

代表候補生相手に、ISに関してただか1ヶ月やった人では勝負にはならない。

おまけに、俺にはセンスがないのも分かっていた。それでもISを使うのは“見つけたい事”があるから。

だから、あんなふうに戦うしか勝機を見出せなかった。真つ向勝負では勝てるわけが無い。今になって思うが、自分の性格がイヤになる。

（この距離なら外さない！）

落ちていたときには“ヴェスバー”の2つの砲口をセシリアの眼前に向けていた。

そのときに

『ISの絶対防御も完璧ではない。シールドエネルギーを突破する攻撃力があれば、操縦者にダメージを貫通させられる』

『ISは正真正銘の“兵器”だ』

『でも、兵器だって使い方しだいだと思うけど…』

『そうだな。だが、その兵器を扱うのは人間だ。勝手な考えでその“力”を振るえば唯の兵器でしかない』

通常の武装ではISの防御力の前にはよほどの火力でなければ、それほど問題ではない。

だが、IS操縦者に直接ダメージを与えられる装備もあるらしい。勿論、そんなものを使うのも見るのもゴメンだ。

（誰かを傷つける）

それが頭の中をよぎったときに、俺の手は振るえた。

（俺はこんなことのためにISに乗ることを決めたわけじゃないんだ）

そして、行き場の無くなった思いを吐き出していた。

「おい、泉谷入るぞ」

ドア越しに織斑先生の声が聞こえる。

「っ！……は、はい。どうぞ……」

織斑先生が入ってきた。頭から血の気が引いていく。

「泉谷、貴様は本気で相手に銃を向けたのは初めてだろ？」

ロッカーにもたれた織斑先生にいきなりそんな事を言われた。

「っ！」

「その様子だと本当らしいな」

「でも……いつから？」

「貴様が最初の一撃を与えたときだ。あの時わざとはずしただろ」

さすがに止まっている的をはずすほど下手ではない。けど、そんなことは無い……とは言い切れない。左足に当たったのは予想外だったから。

「それだけで……」

「勿論、それだけではない。動作1つ1つに違和感が見られた。無意識の内にもどこかで制限をかけているようにも見える。そして最後の“アレ”だ」

「でも、あそこで撃っていたら……」

「それはあの武器だからだろ。他の武器ならどうだ？」

（“ヴェスバー”をあそこで撃っていたらISでも唯じゃすまない。他の武器でも同じことをしていた……かな）

どういった反応が来るか分かっているかのように織斑先生は一瞬の間を置いて続けた。

「銃を使わないが私は剣を使う。どちらも人の命を絶つ武器だ」

（暮桜って剣1本だったっけ……）
「……………」

「その重みを理解できなければ、後悔するのは貴様自身だぞ」

そう言い残して織斑先生は更衣室を去っていった。

（アスランがいても同じようなことを言われただろうな…鉄拳のおまけつきで…）

つい1ヶ月ほど前のことを思い出していた。

（分かったつもりでいただけなのかな……………）

織斑先生に言われたことはたしかに重要なことだけど、そのすぐ次に重要なこともある。

「はぁ…………ライフルを失った、始末書ものだよ……………あっ、ピームシールドもだ……………」

初の模擬戦による被害は様々な面において甚大なものだった。

（予備はシールドしかないよ……………）

（貴様は優しすぎる…………銃を向けるのをためらうほどにな、だがそれでは大切なものを守れはしない。自分さえな…）

更衣室から戻った千冬は一夏が山田先生の顔を赤くさせているのを見つけた。

「目上の人間には敬意を払え、馬鹿者」

「あ、千冬姉、俺のISは？」

ペアアアン！

当然のごとく、ピット内には千冬の出席簿アタックの轟音が響き渡った。

「織斑先生と呼べ。いいかげん学習しろ。ばか者が」

（もう一夏の試合が始まっているかな）

織斑先生が去ってから20分ほど経過したら、ピットに戻った。

『この兵器はお前が毎回命令をしないと動かない』

戻ってきたヒロの目には一夏がセシリアのビットを2つ破壊しているのがモニター越しに映った。

『その時、お前はそれ以外の攻撃を出来ない。制御に意識を集中させているからだ。そうだろ？』

（へえ〜そうだったんだ。どうりで動かなかったわけだ）

まあ、もしもその欠点が無ければかなりの脅威になる。あと、“あの時”見た青い8枚の羽のや某掲示板で有名な「さ。たま」のAの後ろの太陽に似ているバックパックを持った、巨大人型機動兵器を操っていた人ならそれも出来そうだ。

『ビットを全部潰せば、あなたの勝ちではありませんわよ』

一夏が全てのビットを潰し、ミサイルタイプのビットの2つも破壊して突撃する。

「あの馬鹿、浮かれているな。大方近距離なら勝てるとも思っているのだろっ」

「どうして分かるんですか？」

「さっきから左手を閉じたり開いたりしている、あの癖があるときは大抵単純なミスをする。」

オルコットは代表候補生だからな。3年振りに剣を握った奴では一太刀でも浴びせるのさえ厳しいだろう」

『インターセプター！』

一夏がミサイルを処理している間に、セシリアは左手に近接ブレードを呼び出す。その姿はヒーローみたいに爆風を背景に何かを呼び出すみたいでカッコイイ。けど、さっきの試合でもセシリアは近接ブレードを呼び出すのに叫んでいた。

あれはつまり『初心者用』教科書の頭の方、一夏に渡したノートにも初心者必須と書いてある。

『距離を詰めればこっちが有利！』

距離を詰めるしかないのは分かるけど、織斑先生の言うとおりだ。油断してはいけない。

コールには欠点があるみたいだけれど、セシリアの雰囲気さつきとはまるで違う。

セシリアは一夏の渾身の袈裟切りをブレードで受け流しながら、隙ができた一夏に零距离でスターライトmk?のトリガーを引く。

一夏の絶対防御が発動しながら、大きく吹き飛ばされる。瞬時に体勢を立て直す一夏に、片手でも正確な射撃が襲い掛かる。

手を抜く気はさらさら無いようだ。

『待ってくれヒロ！どうしてあんな戦い方を…』

『オルコットさんは俺より“本当”に強いそれだけだよ…』

ヒロの言うとおりセシリアは本当に強い。さっきの試合を見てピットの欠点は大体分かった。あの攻撃をどうにかしなければ近づくのが困難だとも分かっていた。

“近距離”ならこっちに分があると思っていたけど、セシリアはこちらの斬撃を捌きながら隙を作って零距离から攻撃してくる。

だけど、今の俺には箒との剣道、千冬姉に教わった真剣の技しかない。何より、気持ちで負けるわけにはいかない。

どの道あとエネルギーも残りわずかだ。しかけないとやられるだけだ。

「何度やっても同じことですわ!」

迫り来る射撃を捨て身でかわしながら突っ込んできた一夏の一閃を同じように捌きながら銃身を向けてくる

「一か八かああ!」

無理矢理の体勢からの加速で、俺の体をセシリアのライフル銃身にぶつけ、留めの1発になるかと思われた攻撃は地表に穴をあけた。

「なっ……!?!」

懐にもぐりこめた一夏は上段から渾身の一撃を加えるべく振りかぶる。

「うおおおお！」

「くっ!!」

セシリアは一夏の斬撃が決まる瞬間に、充填しなおした腰のミサイル型のビットを発射した。

巨大な爆風が2人を包む。

『試合終了——勝者、セシリア・オルコット』

結果、一夏の斬撃はセシリア本体には1撃も決まらず、セシリアのダメージは最後の爆風のみであった。

（あれで、ISの起動が2回目なのかよ……さすが織斑先生の弟と
いったところなのか？）

「もう少し後でも良かったんじゃないか？」

「俺にそんな決定権はないんだ……」

一夏のIS『白式』はさっきの試合の損傷がまだ少し残っている。
そして今、ヒロと一夏はアリーナ中央に浮いている。

『アリーナの使用時間は限られている、さっさと始めろ』

この状況を作った元凶の鋭い声がアリーナに響き渡る。織斑先生である。

一夏とセシリアの試合の後、

『30分後に残りの試合を始める。各自準備しておくように』

と、織斑先生から一言言われた。さすがに厳しいと思ったけど、有無を言わさない冷酷な視線があつたのは言うまでもあるまい。

そんなわけで一夏のISは若干の傷が残り、装甲の修理に30分を使つたのか未だに“初期設定”のままである。

「千冬姉もああ言っているから、そろそろ始めるか」

「ああ、よろしく頼む………」

（そんなマジな瞳で構えないでくれ！）

一夏が近接ブレードを、ヒロが両腰に“ヴェスバー”を構える。

「ああ、もう！やってやるさ」

（いつまでもウジウジしてられない。一夏と戦えば何かを見出せるそうだ…）

織斑先生の弟で、ヒロと違ってしっかりと剣を振るう一夏を見ての結論である。

ヒロは“ヴェスバー”を両腰から発射し、それを合図のように2人は空に飛んだ。

試合が始まって5分。

（一夏はもう気付いているな……）

一夏はヒロの後方に回ろうとしている。今のヒロが装備しているのは“ヴェスバー”だけだ。性能は申し分ない武装だが、固定武装のために“射角”が狭い。後ろはおろか、真横に回られただけで銃身を向けられない。

「こつちには撃てないだろ！」

（しまった！）

一夏が左上空から突撃してくる。ヴェスバーは間に合わないくらいの距離と速さで詰めてきている。

「だけど！」

「うおおおおおー！」

ビームシールドを展開させて防ごうとした。

「なっ！？」

が、一夏の斬撃はシールドの展開幅ギリギリを通り、ヒロの胴をなぎ払った。一夏はそのままの速さで一気に離脱していく。勿論迎撃されないように、後方に回ろうとしていることも忘れない。

（やっぱり剣道をしていただけあって、斬撃が鋭い…

ヒロにはかなりのダメージがあった。

動きだけで翻弄されていたヒロだけど今度は後方に下がりながら正面に捉えていた。が、下がりながらヒロの両手の“ヴェスバー”から出た光線は外れ、近距離に入られる前に胸部の“メガマシンキヤノン”で迎撃する。それでも一夏の接近を許してしまう。

一夏が上段から振り下ろそうと剣を構えたのに対してヒロはビームシールドを展開する。

今度はその構えがフェイクなのか、一夏は流れるような動作で再びヒロの胴体をなぎ払い、横を通り抜けていく。

「くつつ！」

再び一夏の斬撃を浴びてしまう。けど、それより深刻になりつつある疑念があった

最初の頃に比べ、数発のビームがシールドバリアーを削ってからかわされ始めた。ヒロの射撃のレベルもあるが、さっき言われたことも本当かもしれない。けど、ほんの少しだがちよつとずつだが動きが良くなってきている。さっきの試合よりも…

（一夏の動きが…というより、反応がよくなっている）

その感覚は記憶に新しい。

（そろそろ一次移行かな。そうなら厄介だ）
ファーストシフト

一夏の動きは単調でヒロでも追えていたが、段々変化されては対応しきれない。

（やれる。距離を詰めればこっちが有利だ）

あの腰のビームは強力だけど、今ならあたりはしない。

『ビーム兵器はたしかに強力だが、泉谷自身がそれほど強いわけではない』

千冬姉に言われたとおりセシリアに比べれば、射撃の精度は高くない。セシリアと戦っていたときから感じていたけど、ISが損傷しているのに機動性はそれほど落ちていないように感じる。

射撃だけでは厳しいのかヒロは右手にナイフを展開する。

『泉谷相手なら、一夏が剣で負けることは無いぞ！何せ私が特訓してやったのだから！』

さっきのセシリアみたいに捌かれるかと思っていたけど、ヒロはセシリアほどの技術はない。俺も思っていたけど、箒も言っていたから確信がいく。ヒロに再び一撃加え、一夏は離れる。

（左手のライフルだけなら、かわせる！）

再び接近する一夏に対して、ヒロは展開したナイフで受け止めようとする。

「剣なら負けはしない！」

一夏は逆袈裟切りがヒロのナイフを弾く。

「もらったああ！」

そのまま体勢を崩したヒロに牙突の構えで突撃する。が、ヒロはそれをギリギリでかわした。そしてヒロの左手に足をつかまれる。

「離せよ！」

剣で弾こうとする。が、胸部から実弾の雨が邪魔をして集中できない。そのまま、空いている手で腰のビームライフルを構えてきた。

「今度は逃がさないよ！」

間髪いれずに、ヒロは右側のアンロックユニットを破壊する。そして一夏はその爆風に包まれた。

（あんなタイミングと構えで突撃されたら、さすがに俺でもよけるよ…）

速くても、来るタイミングと予想が出来れば“それなり”には予想できる。アスランほどのスピードは無いから。さすがに瞬間加速もあつたら厳しいが…

ヒロは地面に落ちたナイフを取りにいった。

（このままだと俺の方がキツイかな…）

一夏が剣道をしていた成果が、こんないい形で生かされるとは。

初期設定でもなかなかの機動力だ。武器も近接ブレードだし。フ
アーストシフトしたら、かなりの機動力になるはず。あのただの近
接ブレードがどう化けるかも気になる。

一夏を覆っていた煙が晴れてきた。

「っ!？」

クラス代表決定戦、一夏の力（後書き）

次でやっと決定戦が終わる

クラス代表決定戦、決着、

「ファーストシフト一次移行か…何てタイミングのいい……」

キイイイイン……

一夏の手の剣から高周波な金属音が聞こえる。

そして、ヒロに一夏の武器のデータが送られてくる。

——近接特化ブレード《雪片式型》

「俺は世界で最高の姉さんを持ったよ」

「全くだよ……」

「俺も、オレの家族を守る」

（誰かを守るか……）

「とりあえずは、千冬姉の名前を守るさ！」

（それって……シスコン！？）

姉限定でなくて家族でいいのでは。わざわざ姉限定にしくなくても…

——雪片。それはかつて千冬姉が扱っていたIS《暮桜》唯一

の武器だ。

そして、ある特殊能力によって全IS中でもトップクラスの威力を誇る。その最大の能力が“バリアー無効化攻撃”。

ヒロのノートにはその能力のことについて細かく記され、それが千冬姉が『優勝の原動力になった能力だろう』と書かれていた。

ヒロのノートを借りたときに千冬姉の事を真っ先に調べたことは誰にも言わないでおこう。

「こつちには余裕が無いんだ一氣に決めるぜ！」

一夏は言葉通りに地上で浮いているヒロに突撃する。自分の専用機に本当の意味でなった“白式”は機体の瞬間加速度、センサー解像度がさっきまでの比じゃない。

（なんつうータイミングで…まったくなあ）

『勝負は時の運』って言う言葉をよく聞く。それが一夏のほうにある。けど、そんな言葉一つで片付けるほど、

「オレは諦めが良くない！」

ヒロは右手にナイフを構え、左腰の“ヴェスバー”、胸部の“メガマシンキャノン”を発射する。

（速いつ！？…けど！）

一夏が横に避け。その先に再び攻撃するが、予想を超えるスピードアップにヒロは翻弄されていた。

（下手に動いたらあの速さに捕まりかねない…どの道一夏は突撃してくるんだ。そこを狙うしかないか…）

トップスピードで接近されるわけにはいけないので、こっちも迎撃をする。

「当たらなくてもけん制になればいい！」

一夏に対してけん制代わりとして、発射するがあっさり避けられる。

そのまま一夏が射撃を回避しながら、接近してくる。

当初30メートルあった距離がもう10メートルになっている。

（くそっ！動きがまるで違う。さっきまでの反応が頭の中に焼きついていて、反応しきれない…）

“最高速”ならアスラン並か？このままの速度で近づかれたらマズイのだけど、それを止めるほどの技術は今のヒロには無く、一夏に懷に入り込まれてしまう。

ヒロはギリギリでナイフを構える。

一夏の横一閃がガギンツ！という金属音が、一瞬の花火が、真つ二つになったナイフの破片宙をさまよう様がヒロの感覚を支配する。

「おおおおっ！」

その鮮やかな光景と一夏の剣に見とれてしまったヒロは一夏の渾身の袈裟切りに反応できなかった。

『試合終了。勝者——織斑一夏』

試合が終わり、代表については明日また話し合うということになったので、寮に戻ることにした。

「ほんとに一夏ってすごいな！」

「何がだよ？」

「勿論今日の試合だよ。ISの実力は稼働時間に比例するって言われてるし」

「そ、そうか？でも、ヒロもセシリアに勝ったじゃないか！」

（もし対等な条件だったら、オレは誰にも勝てなかったよ…）
「あれは完全に油断してくれてたからね…最初から本気なら勝てないよ…ははは」

「そうなのか？結構いけると思ったけど」

「褒め言葉として受け取っておくよ…一夏、これからも宜しく」

ヒロは一夏に手を出す。

「ああ！オレの方もよろしく頼む」

一夏はそれにちゃんと応え、2人は夕日を背に握手した。

「それじゃちょっと用事があるから。また明日な」

ヒロは“彼ら”と別れた。

「おうまたな」

「これからの訓練一緒にやろうな！」

ちよつと用事があつたのは事実だけど、寮の帰り道になったときからすぐに別れたくなった。隣にいる篠ノ之さんの視線が半端なく怖かった。織斑先生に匹敵するのでは？とも思っくらいだ。それも一夏に気付かれず…

「ヒロ君大丈夫かしら？」

先回りして戻っていた楯無はいつもどおり、ヒロのベッドにうつ伏せになって考えていた。

今日のクラス代表決定戦、2人の男の子にとっては初陣となる試合はなかなかの内容だった。2人ともセシリアちゃん相手に良くやった。油断してたとはいえ、ヒロ君は勝ち、織斑一夏君はビットの欠点を見破り善戦した。

そのあとの試合は結構接戦だった。けど、一夏君のISがファーストシフトしたことで、一気にそれも崩れた。

（簪ちゃんが見てたら、驚いただろうな）

あのタイミングで実体ダメージも完全に回復、性能の大幅アップ。『ヒーローがピンチになったときに逆転する』正しくそんな感じだった。

そして、織斑先生と同じような武器が装備されているなんて。

アレだけ出来てISの稼働時間がギリギリ1時間程らしい。

アスランから聞いた話だと、ヒロ君は簪ちゃんと似た面もある気がする。だから、

「変に気にしてないといいんだけど」

カチャッ

控えめにドアを開く音が聞こえた。案の定、ヒロ君は沈んでいた。眼は見えないが、彼の頬にうつすらと水分が見えた。

「あつ、楯無さん」

おそろおそろ顔を上げるヒロくんは見るに耐えない。

「おかえり…」

ヒロ君は自分のベッドに腰掛け、楯無はヒロの隣に座る。

「ああ、今日のことは本当にありがとうございました。結構大変だったんじゃない？」

「ううん、それ程でもないからね。それより…」

「何ですか？」

「いや、私がいる事に驚かないのかなあ…って」

「すみ…ませ…ん…結構疲れちゃって…ははははあ…」

（これは、重症かしら？）

「あ、うん！もう大丈夫ですよ！次は汚名挽回しますよ！」

（挽回することなんて何も無いんだけど…本格的に危ないわ…）
「それを言うなら汚名返上じゃない？」

「あつ…はあ…もうダメダメですね…」

お互いしまったという顔をして、ヒロはさっきみたいに俯いてし

まった。

「落ち込まないで…そうだ！おねーさんが慰めてあげようか？」

「……………」

体を更に寄せながら楯無はヒロの顔を覗いた。

「ん？……………きゃっ！？」

ヒロは楯無をベッドに押し倒す。

「えっと、どういうつもりかしら？」

楯無は右手を押さえられたが、左手は空いているのでいつでも彼を倒せる。顔を寄せてきたヒロは楯無の耳元で囁く。

「慰めてくれるんでしょう？……………『ねーさん』」

その最後の一言が彼女を動揺させる。

（あ、姉として扱われるなんて何年ぶりかしら？……………って、違う！違う！）

「し、姉弟なら、こ、ここ、こんな事しないでしょ！」

「血が繋がってないから無いから大丈夫です。むしろ、興奮しますね」

（ヤバイ、ヤバイよ！いつもはこんなことしない様に見えてたから、こんな強引に迫られたら…）

「え！？ちよつと！待って！……ま……だ、ここ……ろの準備が……」
ヒロの空いていた右手が楯無の首から下へと向かう。

（ヤバイ！ヤバイ！ヤバイ！先輩っていつもこんな反応しないから、普段とギャップがありすぎる……）

女の子の体ってこんなに柔らかいのかとか、しつかりとした体つきだけど意外と細いんだとか、初めての人は思うだろう。

けど、ヒロの目の前では楯無の顔が沸騰しそうなくらい真っ赤になっている事実だけが頭を支配していた。すぐ反撃されると思ったけど、右手首から伝わる楯無さんの心拍数が凄いことになってる。

（やっぱり、素の反応だよな……）

その表情に一瞬見とれてしまいそうになるが、右手を少しずつ下げていく。

眼をギュッと閉じて、肩も小さくする楯無さん。左肩にちょっと触れたときにはビクッってなったりもする。

（ヤバイよ！このまま……ダメだ、ダメだ！）

当初の目的から外れそうになる自分の迷いを振り切り、ドアを開ける前の事を思い出す。

『ふう…』

ヒロは山田先生に“今日の試合のビデオ”を貰って部屋に戻ってきた。

（しかし、どうしたものか…）

どんな結果になつてでも、ここにいるであろう人に一矢報いたいと思つていた。人の反応をいつも楽しんでいるであろう人に…

『閃いた！…これなら、行ける！』

（もし、何かしたら、俺は…死ぬな…うん。色んな意味で）

ヒロは下げていった右手を目的の場所に構える。今の彼女なら、どこに触れても敏感に反応するだろう。

（この状況いつまで続くの！？こんなに焦らしてくるなんて…ヒロ君って意外とS！？）

眼を閉じている楯無はヒロが今何をしているか分からない。唯一分かるのは右手を押さえる左手の感触だけ。

今、ヒロ君を見たら、マズイ事になるかもしれない。

ツン！

「…ひゃう！？」

突如、体に電流が走ったような感覚にとらわれる。それは“脇腹”から発せられた。

（…脇？）

左手の感触が消え、ゆっくりと眼を開ける。案の定、目の前に口の顔は無く、見えたのは天井だけだ。

体を起こした楯無は床で腹を抱えているヒロを見つけた。

「ククク………ダメだ。腹が…腹筋が…壊れる…『ひゃう！？』って…あの…セン…パイが…」

「えーっとヒロ君？」

恐る恐るたずねる楯無に意外ないや、予想していた反応が返ってきた。

「先輩って意外と敏感なんですね…いい表情が見れましたよ！」

こっちを向いたヒロ君はさっきまでの表情の面影は残っていないく、子供のように無邪気な顔で笑っていた。

「ひょっとして、さっきのは演技ってこと？」

楯無は彼の豹変振りに疑問を持った。

「勿論です！オレにはそんな度胸ありませんよ！」

「一夏君に負けて、落ち込んでたんじゃ……ないの？」

続けて『さっきの涙は？』と聞きそうになった楯無の目にはヒロのポケットから落ちる目薬がおちるのが見えた。それが楯無にさっきの水分は目薬の刺激による物だと確信させた。

「そりゃ、落ち込みましたよ。けど、いつまでも落ち込んでいられません！オレは欠点が多いから、やらなきゃいけないことがたくさんあるんですよ」

意外と前向きなヒロに表情が少し緩みながら続けて質問をする。

「それを聞いて安心したわ。けど、どうして……どうしてあんなことを……？」

「先輩だって日頃、オレやアスランにもやってる事じゃないですか！」

「……………」

「ひょっとして、弄られてる人の事とか考えないんですか？あんなことされたら“男”は色々大変なんですよ！」

「……………」

「あのう、先輩？」

「……………」

「楯無さん？」

（そんなこと自慢して言うことなのかしらね…心配し過ぎて損をしたわ…）

（ひょっとして、やりすぎた…よね…）

ヒロは黙秘を続ける楯無さんに苦勞していた。

「更識楯無さん…？」

「……………す……………」

「今、何て？」

「……………消す……………」

楯無さんが顔を俯かせたままベッドから降りて近づいてくる。

（オレは後悔していない！どんな結果になっても！さっきのは“脳内”に別名で保存しておいたさ！）

「さっき、君が見たことを記憶から消します」

顔を上げた楯無さんはいつもの“良く分からない”表情だ。

（なん……………だと？）

「そんなことどうやって？いくら国家代表でも…さすがに…そんなことは……」

「我が家に代々伝わる記憶消去術でキレイサッパリにしてあげますよ！んふふ」

楯無さんはどこからか出した扇子で口元を隠す。久しぶりに見た扇子には『抹消』の2文字が見える。今のヒロには、『抹消』ではなく、『抹殺』の2文字に見えた。

(さっきの一瞬のためだけにオレは…ははは)
「…その術とは？」

固唾を飲んで見守る、というより、裁判判決を待つ罪人のようだ。

「殴る”わ」

「はあっ!？」

「記憶が無くなるまで殴り続けるわ」

「でも、それでも無くならなかったら……?」

ヒロはおそろおそろ聞いた。

「“死ぬ”でしょうね」

「……………」

「記憶が無くなれば良し、死んでもらっても良し、要は目撃証言を

消せばいいの！」

1歩、また1歩と近づいてくる楯無さん。ヒロはその場から動けなくなつた。

(それでもオレは！……後悔してない……)

バギッ！

「ザクウウウッ！」

ドカッ！

「グフウウウッ！」

ガンッ！

「ドムウウウッ！」

それは1時間ほど続いた。

「わが…生涯…にいつ…ペン…の悔いなし…」

サアアアア…。

IS学園学生寮のとある1室からシャワーの音が聞こえる。

そこには白人の女生徒がシャワーを浴びている。イギリス代表候補生、セイシリア・オルコットである。

（今日の試合——）

“初戦”の屈辱的な敗北から、次の、織斑一夏との試合は本気で戦った。

（わたくしが勝ったのに……）

我ながら、大人気なかったとも思う。けれど、なんだかすつきり
としない。

（——織斑一夏——）

大きな力の差があるにもかかわらず、強い意志の宿った瞳を向け
何度も立ち向かってきた。

彼女が今まで見てきた男とは違い、他者に媚びることなの無い眼
差しを持って。

「織斑、一夏……」

その名を口にしただけで、今まで感じたことの無い気持ちになる。

——知りたい。一夏の、ことを。

そして、

（泉谷ヒロ……）

一夏とは対照的に、その名を考えただけで憤怒と憎悪の気持ちに

支配される。

当初は今までの男のように媚びる態度に不快感を覚えた。試合が始まって、大した腕も無いのに“専用機持ち”その事実がさらに不快にさせた。

だがそれまでの態度、行動全てが幻だった。本性は羊の皮をかぶった狼、いや悪魔だ。最後に言われた事がそれを確信させる。

地面に叩きつけられ、2つのビーム兵器の銃口が目の前に来るとき、負けを確信したわたくしに、悪魔の囁きが聞こえた。

『最後のチャンスをあげるよ。降参するか、このまま“無様”に撃たれるか』

『そ、そんなもの！』

『しっかり考えた方がいいと思いますよ。仮に反撃して俺を倒したとしても、一夏としばらく戦えなくなるくらいのダメージを与えることくらいはできます。これの威力が分からないわけじゃないですよ？』

そういった悪魔は銃口を更に近づけてくる。

『何より、あんだだけでかい事を言っておきながら不戦敗したただなんて。いい晒し者ですよ〜代表候補生ともなれば、ちゃんとした判断ができるんじゃないですかねえ？』

『……………ま、参りましたわ……………』

そのことが代表候補生としてのプライドをズタズタにした。が、今ではその判断も良かったとさえ思える。けど、あの男…

「泉谷ヒロ！絶対負けませんわ……………」

「あ、戻ってきたわ」

楯無はもう1人の男のIS操縦者“織斑一夏”が寮に戻ってきたのを廊下の物陰から確認した。

「まったく、箒の奴、本気で殴らなくなつて…」

一夏は箒が竹刀で叩いた肩をさすりながら、寮に戻ってきた。

「うん？」

（気付いてくれた！）

一夏の視線が寮の2階へ上がる階段に向けられる。

「ヒロ！」

一夏が先刻、別れた友人が階段で倒れていたと思われる姿と認識するのに時間はかからなかった。

「階段からおちたのか…？」

全身打撲と思われる傷、後頭部から流れ出る鮮血が一夏の顔を変えていく。

「ヤバイ！急がないと！」

一夏が楯無に気付かずに学園に向けて気を失っているヒロを担いでいった。

「ゴメンね、ヒロ君、織斑一夏君」

（ちよつとやりすぎたかしら？でも、あれぐらいなら命に別状は無いはず…）

楯無が男の子の部屋に行った事がばれると色々マズイので、別の原因であるの傷を負ったことを示す必要があった。

（ヒロ君があんなことするのが悪い！あんなこと…）

初めて見せた真剣な表情、いつでも突き放せたのに出来なかった自分、楯無はさっきのことを思い出し、顔が熱くなっているのを感じる。

（あんなに取り乱しちゃうなんて…でも、何なのかしら…この気持ち…）

理想はヒロが先ほどの事を忘れていることだが、都合よく行くとも思えない。覚えていたとしても、言いふらしたりするようなことは無いだろう。あんな状態にしておいておこがましいかもしれないけど。目が覚めたらすぐにでも謝りたい。だけど、でも、

（ヒロ君を見たら、また取り乱しちゃうそう……落ち着くまで時間がかかるかもしれないわ……）

クラス代表決定戦、決着（後書き）

いきなりあんなことを言われたら、誰もが一夏のシスコン疑惑を疑うでしょ。

自業自得って言葉はいいですね、
誰に向けてかは言わずもがな……

。「乙女の純情をもてあそぶ男は馬にけられて死ぬといいよ」
ちなみに、筆者はセシリア好きです

人の業と新たな嵐

「ではこれよりESの基本的な飛行訓練を実戦してもらう。泉谷、織斑、オルコット。ためしに飛んでみる」

入学してからあつという間に4月の下旬、アリーナには織斑先生の有難くも鋭い声が今日も響く。

「よし、飛べ」

セシリア、ヒロ、一夏の順で空に上がっていく。

『遅い。スペック上の出力では白式の方が上だぞ』

織斑先生の言うとおり、一直線に飛ぶヒロと飛ぶのに慣れていないのかフラフラになりながらも飛ぶ一夏と同じスピードである。

「一夏、大丈夫だよ。わざわざ同じペースにしなくても…」

そういうヒロは今朝目が覚めた。それはクラス代表決定戦後、ヒロは気を失っていたからだ。

「なら、いいんだけど。てか、大体まだ空を飛ぶ感覚自体があやふやなんだよ」

「まあ、りろ『一夏さん、その』……っ!」

「よろしければまた放課後に指導してあげますわ。そのときは“ふたりきり”で――」

（一夏さんねえ…どうして、そこまで睨みつけてくる？）

セシリアがヒロの会話をインターセプトしながら、敵意の籠った視線を向けてくる。一夏に気付かれないようにもしている辺り、さすがは代表候補生だ。

「泉谷、織斑、オルコット、急降下と完全停止をやって見せろ」
「了解です。では一夏さん。お先に」

（はつきりした。俺は嫌われたようだな……まあ、仕方ないかも…）

「うまいなあ〜（もんだなあ）」

先にセシリアがクリアしたのを確認すると、2人はほぼ同時に始めた。

（やっぱり、白式は速い）

ヒロの3倍…というわけではなく、こっちが遅いのもあるが、一夏がどんどん離れていく。小さく、小さくなっていく。
ちいさく…

ギョーンッ——ズドオオンッ！

小さくなった一夏は土に返った。

「一夏、俺、君の事は忘れないよ…」
合掌。

「勝手に殺すなー！」

一夏の“生”の叫びがアリーナに山彦となって反響する。

「黙れ、この馬鹿者が。誰が地上に激突しろと言った。グラウンドに穴を開けてどうする」

「すみません」

体勢を直す一夏は篠ノ之さんと何か話している。そこへセシリアが割り込んだ。一夏に向ける笑顔は楽しそうだが、

「お前が言つか。この猫かぶりめ」

「鬼の皮をかぶっているよりマシですわ」

降りてきたヒロにとんでもない会話が聞こえてきた。

篠ノ之さんとセシリア、本性を出し2人のぶつかり合う姿は、

「2人とも唯の“ぶりっ子”じゃないか…」

「何か言ったか（言いまして）？」

独り言のように呟いただけなのに、2人は反応してきた。2人には専用のハイパーセンサーがつのであるのか？

篠ノ之さんはどこからか出した木刀を、セシリアはスターライトmk?をこちらに向けてくる。

（アスラン、人の悪意が見えるよ…）

「おい、馬鹿者ども。端っこでやっている」

織斑先生の一言が2人を赤子の手をひねるように鎮める。

次は武装の展開の実践だ。セシリアはすぐ出すが、一夏は時間が

かかってしまった。そして、

「泉谷、ライフルはどうした？」

「この前の試合で“粉々”に破壊されました
パアアン！」

「ISは常に万全の状態にしておけ！」

「すみません」

（こ、これがブリュンヒルデの力なのか！？）

ヒロが今朝目を覚ましたことは知っているはずなのだが、遠慮の
無い攻撃がISのシールドを削る。

『あんたのせいだ！』

『……………』

この思いをぶつけたかったのでセシリアにプライベート・チャンネル個人間秘密通信を使う
が、案の定無視される。

続いて近接武器を呼び出す指示が出される。セシリアの欠点は改
善はそのままだ。

「泉谷、ナイフはどうした？……………いや、いい。さっきはすまなか
った」

さすがに思い出してくれたらしく、最後は平和にその日の授業は
終わった。

一夏が居残りでグラウンドを整備し直していたのは言っても無
い。

それから、ヒロは山田先生と保健室にいた。保健の先生はいないらしく、今は2人つきりだ。2人つきりなのだが、

「山田先生、もう大丈夫ですよー」

「ダメです。上着を脱いでください！」

山田先生は手のかかる子供のようにヒロを叱る。

「わ、分かりましたから！服を引つ張らないでください！」

山田先生は強引に服を脱がそう接近してきたので、その、とんでもないものが視界に入ってくる。だから、一刻も早く離れてくれ。

山田先生はやれやれといった具合の視線を向け、ヒロから離れるが。

「あのう、何で先生はこっちを見てるんですか？」

服を脱ごうとしたのだが、山田先生が『ジーツ』と視線を向けてくる。

「泉谷君を監視しているんです！」

教師として生徒を心配してくれるのは嬉しいけど、こんな状況ではやめてほしい。

（ん？…教師と生徒の…2人つきり？）

「先生、気持ちは嬉しいんですけど、その…教師と生徒が“保健室”で2人つきりというのは…」

保健室を強調したのはわざとだ。

「それがどう……………っ!？」

そして、山田先生は妄想の世界へと旅立った。

「先生、ごめんなさい。ほんとにもう大丈夫なんで…」

山田先生の純粋な心を利用してしまったことに罪悪感を感じながら、保健室を後にした。

あと、様々な知識を教えてくれた中学の友達に感謝した。

（中学の友達に感謝したのってここに来て初めてだよな？以前にもあったような…）

その保健室からは

『せ、生徒と2人つきりで……………し、しかも…ほ、ほほ、保健室でだなんて……………そんなこと…』

彼女が正気を取り戻したのはそれから1時間後だそうだ。

自室に戻ったヒロは部屋に置き忘れていた携帯を確認した。 30

分程前に一夏からメールが送られていた。

（何だろう？訓練のことか？）

メールを見ると、

『食堂に来てくれ！今すぐに！頼む！』

メールの内容にただならぬ雰囲気を感じたヒロは急いで食堂に向かった。

今日の昼に一夏から聞いた話だけど、ヒロが気を失っている間の訓練は大変だったらしい。頼りになると思っていた幼馴染は擬音でしか説明してくれないそうだ。意外なのはセシリアも訓練を手伝っているとの事だ。さっきのことも考えると、一夏には柔らかくなっただけど、ヒロには氷の壁が出来たようだ。

それでも箒とセシリアが言い争いをするので、四苦八苦しているらしい。

（一夏を巡る女の争いか…これがハーレムってやつなのか！？）

こんなときにも中学の友達の知識が役立つとは。

「えーと、あたしの部屋ってどこなのよ！」

IS学園学生寮をツインテールの小柄な少女が彷徨っていた。

「あの事務員め、部屋番号だけじゃ分からないっての。ちゃんと教えなさいよ、ちゃんと」

少女は不十分な対応しかしなかった学園側に憤怒していた。そんな彼女はメモを頼りに階段を上ってきた。

「あーもう！メンドくさいなー………きゃっ！」

『やっぱり空を飛ばうか』と考えていると、突然、視界に入ってきた対象を反射的に“よけた”。

（しまった!?!）

よけてはいけなかった。彼女の後ろは階段だ。

「あつ!?!」

イレギュラーは無理な姿勢でよけたのでバランスを崩して階段から転げ落ちそうになる。手が届く距離にいるが、助けるには“生身”では力不足だ。

瞬時の間にそう判断した彼女は赤い金属の腕を展開させ、対象を掴もうとした。が、

「え!?!……………ISなの……………?」

彼女の腕は空を切り、対象は白い鎧に包まれ空中に浮いていた。正真正銘のISだった。

「あ、ごめんなさい。怪我とか無いですか?」

転げ落ちそうになった対象は心配そうにこちらを覗きこんでくる。

驚いたのは色々あったが、ソイツはなんと“男”で、自分と同じ位、いやそれ以上の速さでISを展開させた。反射だけでISを展開させたようだが、ISの展開が防衛本能となっているのかもしれない。

男でISを使えるのは、1年前まで一緒にいた幼馴染だけだと思
っていたので、その事はさして驚くことではなく、興味はコイツが
纏っているISの方だ。

今まで見たことの無い形状で、何より、両肩に非固定浮遊部位が
無いせいか…

「随分小さいわね…」

無意識の内に呟いていた。ISの事を言っただつもりなのだが、相
手は別の意味で解釈してしまった。

「はあ！？初対面でいきなりそんなこと言うのか！？あんただって
ちっちゃいじゃないか！」

ISを解除し、地面に着地した相手は案の定“身長”が高校生の
平均にしては小さかった。

「あーあ、やだやだ、器の小さいやつって」

さっきの奴が何やら言っていたが、それを無視した少女は踵を返
して目的地を目指した。

（どうせなら、一夏に会いたかったな）

（口を開かなきゃ可愛いのに…）

リボンの色、部分展開したISの腕、背負っていた大きなバッグから、同じ1年の専用機持ちの転校生と思われる。何よりヒロの事を知らなかった事実がこんな時期の転入を確信させた。

「一夏！ いったいどう………うわぁ!？」

急いで駆けつけると、ぱん、ぱんぱーん。“クラッカー”がヒロを出迎える。

「ええと、これは何？」

「これは…いつちーのふつかつ記念のパティーなのだ。昨日の夜“復活の呪文”をとねえたかいがあつたよぉ」

(ドラ。エじゃあるまいし…)

クラスメイトの布仏さん、通称のほほんさんが今日もぶかぶかの袖を揺らしながら現れた。

「復活つてそんな大げさな…てか、“いつちー”って一夏じゃないの？」

「織斑君は“おりむー”なんだって」

のほほんさんの謎？発言に対して、隣にいたクラスメイトの谷本さんがフオローしてくれた。

最初にのほほんさんが教えてくれた通りヒロの復活記念らしいが、それはおまけで一夏が呼んだ本当の理由が分かった。一夏の周りには1組だけでなく、他のクラスの子も混じって一夏を囲んでいる。

その為、一夏は数で勝る相手に孤軍奮闘する勇者のようだ。一夏一人はキツイのだと察した。

が、近づこうと思ったヒロに、一夏の両隣にいる金色の弾丸と黒い刃が殺意が向けられたので、隣のテーブルに座った。

そして、食堂のとある一角に『織斑一夏クラス代表就任パーティー』と書かれた紙が掲げられその紙のすぐ下にヒロの復活記念とあまけで書かれている。

「てか、一夏がクラス代表になったんだ」

「わたくしが説明して差し上げますわ」

意気揚々と胸に手を当てながら立ち上がったのは、さつき泣く子も黙る視線をヒロに向けてきたセシリア・オルコットだ。

（あれ、何でこんな親切なんだ？みんないるからか？）

「それはわたくしが辞退したからですわ。まあ、勝負は一夏さんの負けでしたが、しかしそれは考えてみれば当然のこと。なにせ、わたくしが相手だったのですから。それでまあ、大人気なく振舞った事を反省しまして、一夏さんにクラス代表を譲ることにしましたの」

（初心者相手にあれだけ本気で相手しておいてそんな事言うのか…）

“終始”手を抜くのはマズイと思うけど、フラフラ飛ぶ相手にピットまでいきなり使ったらしい。結局、弱点を見破られて全滅したけど。

「分かりましたか？“一夏さんに負けた”泉谷ヒロさん」

（一夏には確かに負けたが、俺に負けたアンタはどうなるんだ？自分分は油断してましたってことで片付けるのか？……あと、その笑顔は逆に怖い……）

顔は笑っているが、目はちつとも笑っていない。その目に光は無かった。

（っ！？アスランと同じ目！？彼女は一体何者なんだ！？）

ヒロは周りのテンションの高さよりもその事実戸惑っていた。

（誰かこの状況を助けてくれ……）

助け舟をと思ってヒロに連絡した。

けど、食堂に来て俺がいるテーブルに近づいてきたのに突然、背筋をピンツとして、別のテーブルに行っちまうし、箒は何か不機嫌だ。ここ最近のセシリアの上機嫌さが逆に怪しい。

パシャッ

突然、視界が白い世界で埋め尽くされた。

「はいはい、新聞です。ああセシリアちゃんも一緒に写真いいかな？」

視界がはつきりとしたその先にはカメラを持った2年生がいた。

「え？2人で、ですか？」

「ちゅーもくの専用機持ちだからね！あ、握手とかしてるといいかもね」

新聞部の黛薰子さん（さつき名刺をもらった）はヒロをチラッと見てからこちらにカメラを向けた。何やら微笑んだように見えたことは気のせいかもしれない。

「あ、そうですか。あの、撮った写真は当然いただけますわよね？」

「そつりゃ、もちろん。あ、じゃあ、立って立って！じゃあ握手してもらえるかな？ああ、もうちょい笑顔で、寄って寄って！はい！緊張しないで！…それじゃあ、撮るよ！はい」

パシャッ

何故かツーショットにならなかった事は言うまでも無い。これが女子高のノリなのだろう。

みんながそれぞれ雑談に入ったところで、黛先輩のインタビューが始まった。

「ずばり！君の強さの理由は？」

「いや、急にそんなこと言われても…」

「ちゃんと答えてくれないと、適当に捏造しちゃうよ？」

この感じ、脅しているわけじゃないんだろうけど、ちゃんと答えないと根も葉もないことを書かれそうだ。

「俺は支えてくれた人を、今度は支えられるくらい強くなりたかっただけで…」

「うんうん、分かったわ……『つながる心が俺の力だ』って感じで使わせてもらっわ」

（つながる心が……俺の力……）

何だろうなこのしっくりとくる感覚は……

意外や意外、セシリアのインタビューはされないまま終わった。俺に惚れてるだの何だなのって聞こえたが、そういう捏造はよくないだろう。

パーティー終了後、学生寮の出入り口で薫子はとある人物と交渉を行った。

「黛先輩、これが例の“ブツ”です」

「よくやったわ、これでいい記事が作れそう」

「それでは、自分はこれで…」

「これからも期待しているからね」

薫子は協力員が去っていくのを見送った後、部室に戻った。その手にはある“ビデオ”が大事そうに抱えられていた。

「やつほー、薫子ちゃん」

明日の朝には新しい新聞を出すつもりなので、最後の追い込みのために部室に戻った薫子の前にこの学園の長が現れた。

「あ、たっちゃんじゃーん！どうしたのこんなところで？」

「今日はかな〜り、いい情報を持ってきてあげたよ」

楯無は薫子の耳元でヒソヒソと囁く。

「ゴニョゴニョ……………」

「うんうん」

それから5分後、

「それは面白いことになりそうだね。さっそく、作業に取り掛からなくちゃ」

「んふふっ」

「何でだろうな〜」

ヒロは久しぶりに日記をつけていた。日記にはISを使い始めて感じたこと、日頃のことなどを記している。

数日間気絶していたので、その分の空白がある。

（俺は何でセシリアに勝てたんだ？）

読み返していて気付いたことだ。模擬戦の準備を始めたのは入学の翌日からだ。“F91”が届いたのがその週の土曜日。たかが、2日で上手くなったりはしないので、入学直前の実力で勝ったこと

になる。

そんな自分じゃ代表候補生になんて勝てるわけが無い。

気になるのは、所々にある書き直した。少しなら気にもしないが、それが殆どなのだから気にもなる。あと、代表決定戦のビデオだ。

セシリアに対しての俺の動きのキレがいい。キレがいいというより、あらかじめ予想した上で動いている気がする。

仮定だけど、俺はセシリアのISの事がある程度知った上で行動していたのかもしれない。その経緯が記されていないから確証は出来ない。1人で出来たとは思えないので、誰か協力してくれた人がいる可能性が高い。

（アスランではないのは確かなんだけどな。もっとこう別の人としてばらく一緒にいた気がするんだけど…）

アスランなら出来そうだけど、それなら、書き換える必要が無い。何よりアスランに相談したら、余計な心配を掛けかかるかもしれない。あと彼には本当はもっと別なことをやる必要がある。

ビデオを山田先生から受け取り、寮に入ったとこまでは覚えている。そのあと階段から落ちて怪我をしたらしく、今日に至るわけだけど。階段から落ちるまでの経緯を覚えていない。

記憶の欠落は一時的なものかもしれないので、

（何かきっかけがあれば思い出すかもしれない。気長に待つしかないさそうだ…）

翌朝、一夏と篠ノ之さんと一緒に登校したヒロ。下駄箱で靴を変え、その先にある掲示板を囲む形でかなりの人数の集団がいた。

「どうしたんだろうな、ヒロは心当たりあるか？」

「いや、さっぱりだ…」

ヒロの声にその一団の視線が一瞬だけ集まる。その後道が開け、掲示板にある1つの新聞につながった。

「……っ！！？？」

新聞の内容に3人の目が点になる。

「ヒロ……」

「泉谷…きさま…」

「ちよつと待つて、これあきらか捏造入ってるでしょ！」

『IS学園新聞』

——本日のビッグニュース！IS学園に現れた2人の男の正体！それは白い“剣士”と白い“悪魔”だった！

つい先日行われた1・1組のクラス代表決定戦、それが上記の事実を決定付ける事となる。

それは代表決定戦の名を語る、イギリスの姫の命（貞操）を賭けた我らが“織斑一夏”の戦いであった。

「……何これ…？」「」

あきらかに違う中身に戸惑った3人は続きを読む。

最初に本性を現したのは白い悪魔こと泉谷ヒロだった。彼はイギリスの姫、セシリア・オルコットに己が欲の為に近づいた。従順な紳士を装って……

セシリア嬢が油断した隙を付いた泉谷はついに本性を現した。白い悪魔の鎧を身に纏い、怯える相手を脅しながら彼女をさらった。

『ハーハッハーハ！これでこの女は私の物となった。存分に堪能させてもらおう』

彼にそれまでの紳士の面影は微塵も残っていなかった。

その脇にはヒロがセシリアにヴェスバーを突きつけたシーンの写真が貼られている。背景が変更されているのは仕様だろう。

その暴挙に対し、真っ先に名乗り出たのは白い剣士の異名を持つ織斑一夏である。

『大丈夫か、セシリア！？……くっ！』

剣士が見たのは鞭を片手にセシリアを辱めようとする悪魔の姿だった。そのまま、2人のバトルが始まる。

悪魔の攻撃がボロボロに傷ついた剣士に向けられる。

『力の差を思い知るがいい！』

『そんな事で俺はあきらめない！守るものがあるから戦える……つながる心が俺の力だ！』

そんな時、彼に変化が起こる。白い光に包まれると新たな力（雪片式型）を手に入れた剣士の姿が現れた。

新たな力と共に剣士は悪魔を1撃で倒した。姫を助け出した剣士は仲間の元へ帰っていく。

剣士の傍らにいる姫の顔は夕日のように赤く染まっていた。

『今後の彼らの動向を我々新聞部は探っていきます』

最後の写真は一夏に斬られるヒロの姿だった。これも勿論、背景は合成である。

「だが、こんなこと書かれるほどとは」

「確かにやり過ぎだ。けど少しは事実が入ってるぞ」

「こんな、こんなこと……俺は認めない！」

1歩下がっていた一夏達に向けて叫んだヒロはその背後にキレイな金髪の美少女を発見した。

「……………っ!？」

「あ、オルコットさん!あなたからも何か一言……」

いつの間にか一夏達の後ろにはセシリアが立っていた。さっきの3人と同じ反応をした後、顔が俯いてしまった。

「……………す……わ」

「えっ!？」

「鬼畜ですわー!」

そう言ったセシリア・オルコットは一夏の白式並のトップスピードで走り去っていった。

「クソッ！」

（黨先輩はどうしてこんなことを！）

「ヒロ！？」

「スマン！ちょっと野暮用！……………ぐは！？」

集団を抜け、加速しようとしたヒロは突然視界を塞がれる。

「ちゃんと前を見る馬鹿者が！……………うん？おい、泉谷」

織斑先生がヒロにアイアンクローをかましている。

「はいっ！何でしょうか？織斑先生！」

（これ以上俺をここに止めないでくれ）

解放されたヒロはなんとも無い様子で何故かやったことの無い敬礼をしていた。

「異常性癖は感心しないぞ。そういう事はあまり第三者に語るべきじゃない」

「すみません」

笑みを含んでいるが、それがこの記事を信じての苦笑いなのか、状況を楽しんでいるのか今のヒロでは分からなかった。

後ろで同行していた山田先生が口を金魚みたいにパクパクしていたのはあえて語らない。

残り１５分で先輩を探すのは不可能なのであきらめることにした。

連絡手段が無いのは失敗だ。

「さ、さすがにこれだけやれば大抵の女生徒はヒロ君に近づかなくなるでしょ……」

（遠めで見ただけで心臓が大変なことになっている……私ったらどうしちゃったのよ）

赤くする顔とは対照的な明るい色の髪を持つ女生徒は、ヒロが肩を落としながら教室へ向かうのを見守っていた。

それはまだ序章でしかないことを知るのは誰もいない。

人の業と新たな嵐（後書き）

某ゲーム内の時系列的には一夏の中の人が先に言ったので、こっちが本家だと思っています。

新聞の中身はちよつとマズツタかな…

会長の事は忘れてしまいました。お互いザマアって感じですよ。
その内思い出す？ かもしれません

中華娘との出会い

今朝の新聞騒動から教室に着いた一夏は目の前の友人を励ましていた。

「人の噂も75日っていうから大丈夫だつて！」

「そう言ってくれると助かる……」

そんなこんなで教室にやってきたヒロは何だかやつれていた。

ヒロが全力で俺と篤を説得する様は初めてだ。あまりの真剣さに若干引いてしまったのは黙っておこう。

お互い捏造の対象（ヒロはひどい意味で……）になったので、気持ちは何となくは分かった。

それと真後ろから黒いオーラを感じるのは気のせいかな？

「ねえ、転校生の噂聞いた？」

ヒロが机に突っ伏してから、クラスメイトに話しかけられた。

「転校生？1年のこの時期に？」

（何か事情でも無ければ、こんな時期に転校生だなんて……）
「なんでも中国の代表候補生なんだって」

この教室に着くまでは正しく地獄絵図だった。ある生徒は明らかにヒ口を避け、またある生徒はヒ口を見ただけで気絶する始末。

（ISの操縦者保護機能でも持ち合わせているのか！？）

一夏達には悪いと思いつつも、まずはこの2人を説得しなければいけなかった。何とか上手くいったが、もしも……いや、考えるのはよそう。成功したのだから……

（犯人を見つけたら、あんな事をした理由を聞き出してやる！どんな手を使ってでも……）

ヒロは一夏に迷惑を掛けなかったために机に突っ伏して寝たフリをしながら、今後のことを考えていた。まず黛先輩から、あの記事を書いた理由を聞き出さないといけない。

（何かクラスがざわついてきたな……もうそろそろ授業か……）

「織斑先生と呼べ。さっさと戻れ。邪魔だ」

顔を上げると、教室の入り口で織斑先生が昨日会った女の子に注意をしていた。特徴的な髪型と容姿なのですぐ昨日の子だと分かった。あれだけインパクトが強ければ忘れたくても忘れられない。

「す、すみません……あつ……」

さすがに、気の強い彼女でも織斑先生には敵わないようだ。一瞬彼女と目があつた。

「また、後で来るからね！逃げないでよ、一夏！フンッ！」

すぐに一夏に向けて叫んだ後、踵を返して自分の教室へ帰った。

（一夏の知り合いか…？）

「…一夏、今のは誰だ？えらく親しそうだったな？」

「い、一夏さん！？あの子とはどういう関係で——」

「一夏、あの専用機持ちの子と知り合いなの？」

「ん？どうしてヒロは鈴が専用機持ちだって知ってるんだ？さつきまで寝てたよな？」

「ああ、昨日アイツが……」

バシン！バシン！バシン！バシンッ！

「席に着け、馬鹿ども」

今日の出席簿アタックもキレイがいい。

「一夏、先行ってるよー」

「おまえのせいだ！」

「あなたのせいですわ！」

食堂に行くのにも一苦勞（箒とセシリアがいつも何やら言い争っている）なので、先にヒロに席をとってもらっているのだが、

（ヒロは俺を見捨てたのか…）

こうも入れ違いに行くのを見ると、タイミングを計っているのか疑いたくなる。

そもそもセシリアと箒が授業中に集中していないから、わがクラスの先生方からアメ（山田先生）とムチ（ちふ…いや、織斑先生）の注意を受けることになったんだ。

けど、それで何故俺が八つ当たりされなければならない……

（一夏は大変だな）

あの2人だけでなく、また新しい女の子の知り合いがいたとは。SHRの後に名前とか簡単な事を聞いたが、ヒロが寝ている間に彼女が現れ、中国の代表候補生だと名乗っていたとのことだ。

その先は長くなるらしいので、飯の時に話してくれることになった。

この時期の転入だと、入試の数日後に入学を決めたんだろう。一夏のニュースを見て自分からの判断か、国からの指示の2択だけど、

前者の可能性が高い気がする。

食堂に着いたヒロはカレーライスときつねうどんの大盛を頼んだ。カレーうどんにしようというわけじゃない。

（今日も旨そうだ……ヨダレが……おっと）

一夏達と同じペースで食べていたら遅刻しかねないので、ヒロは先にうどんから食べる。

そんな時、ラーメンをトレイに乗せた人影が近づいてきた。

「ちょっとアンタ！」

今朝と相変わらずの高压的な態度（一夏曰く変わっていないらしい）で話しかけてきたのは、中国代表候補生の凰鈴音さんだ。

「何か用？」

「確か…一夏と同じクラスだったわよね。一夏はどこよ！」

（昨日の借りを返してやる！）

「さあ、今頃クラスの“女の子”と一緒にじゃない？」

事実なので、ちゃんと教えることにした。ちゃんとね……

「アタシの忠告を無視するなんて、いい度胸してるじゃない！」

何やらブツブツ言いながら、立ち尽くしている彼女に“大切”なことを言った。

「麺、延びるよ」

「わ、分かってるわよ……食べればいいんでしょ！食べれば」

（フフ……もつと時間をかければ面白かったか…）

食べ始めたかと思いきや、向かいに座った彼女は目を点にしていた。

「それにしてもアンタ、随分食べるのね……」

「アンタじゃない、泉谷、泉谷ヒロだ」

「まあ、いいわ。そんなに食べると“横”に大きくなるわよ」

量に関する事はよくみんなに言われる。ヒロの体格にしては量が多い。それも仕方ない、“旨い”のだから。それに何より……

「成長期だからな、“縦”に伸びるはずだ！“可能性”を諦めるわけにいくか」

目の前の“小さい”少女のを睨みながら反撃した。

「……………っ！」

どうやら狙いは成功したようで、黙ってラーメンを食べ始めた。体格にコンプレックスを感じているのは丸分かりだった。彼女とは共感出来るかもしれない。

「ああ、もう！待ってるなんて、あたしらしくないわ！」

食事を終えた元気ツ娘は瞬く間に食堂を出て行った。普通（避けたり、気絶しないだけ）に接してくるのを見ると、今朝の出来事は知らないようだ。

一夏がその娘と以下数名と戻ってきたのは来たのはそれから10分後だった。

その際に彼女がまたラーメンを頼んでいたのは突っ込んではいけない。さすがにラーメン2杯目じゃね？とか言ってみる、夜空のお星様だって夢じゃない。

さすがに一夏と鳳さんが話を始めると、聞き耳をたてる形で回りは静かになった。

2人の関係は一夏曰く“ただの幼馴染”だそうだが、その片割れは全く納得していない。篠ノ之さんとはすれ違いだったらしい。

（この学園で会える事自体が凄いんだから、お互いもっと驚いてもいい気が……）

代表候補生としてのプライドは高いらしく、自分の強さに自身があるようだ。まあ、大方事実だろう。でも、

（アスランは全然違ったなあ）

国家代表クラス（何でそう思ったんだっけ？）の实力があるのに、そういった話題を振ると、すぐに別の話題をされる。彼にとっては自慢でも何でもないようだ。出来ない側からしたら、かなり気がかりだ。

凰さんはそのプライド故か、訓練のことを言い出した。篠ノ之さんやセシリア同様、一夏を独占したがつてる感じた。黙ったまま終わらないのが我らが“1組”の2名だ。

同じクラスというアドバンテージをを武器に立ち回り、結局、クラス対抗戦の特訓が優先と言うことでケリが着いた。

（一夏って罪作りだな）

あと、家族の話題の時、一瞬表情に変化があった気がしたのは勘違いかもしれない。

「やっぱり、反動がきついな……しばらく、“オート”でやったほうがいいか？」

放課後の第3アリーナで射撃訓練をしていたヒロは久しぶりに握るライフルの感触に戸惑っていた。ちなみに今撃っているのは五五口径アサルトライフル《ヴェント》だ。

（対“一夏”には必要になるので、実弾での訓練もしておかないと……）

勿論、これは学校側の物。一夏と戦うときに借りとけば良かったとか思ったのはここだけの話である。ヴェスバーで最後は締める、相変わらずの威力だ。

撃ち方は全部アスランに教わった。ライフルはともかく、ヴェスバーの撃ち方も分かりやすかった。同系統の武装を使ったことのある口振りだったのを今でも覚えている。

破壊された装備は明日届くので、それまで我慢しようと思ったのだが……

「上手いもんだなあ〜全てど真ん中だ……」

「止まっているぐらいには当たるさ。こんなレベルじゃ実戦で大して役に立たない」

“止まっている的”になら、数を積みばどうにかなる。それもI Sの能力のおかげだ。そろそろ射撃訓練の内容は変えてもいいかもしれない。

「それでも凄いつて！」

（この前の試合で殆ど避けやがった奴に言われても……）

そう“暇” そうな一夏が目の前にいる。

「なあ、ヒロ。一緒にやらないか？」

『はあああっ！』

『甘いすわ！』

「ああ……分かった」

一瞬戸惑ったが、周りの状況を見たら断れなかった。一夏を巡った女のバトルが勃発中で、肝心の一夏の訓練の相手がいなくなってしまった。当初はプライベート・チャンネルでたま〜に何か言おうと思っていたが、この状況である。

一夏とヒロの訓練に気付いた2人にヒロがボコボコにされたのは言うまでもない。

訓練後のピットにツインテール娘が現れたので、修羅場な感じがしたヒロはそそくさと抜け出した。

「すいませ〜ん。このメモの食材下さい」

そんなヒロは今、学生が使用可能なキッチンだ。

さすがIS学園と言つべきだろう。要求した食材はすぐ手に入つた。下準備をして、ヒロは自室に戻る。

その途中で一夏の部屋から最低3種の大声が聞こえた。理由は何となく想像できた。いわゆる“修場”つてやつだろう。

『なら、普通もう1人の男と同室でしょ！もう1人の！』

『それもそうだな。どうして今まで気付かなかったんだ…よし、今す……』

ザシュッ！

ドアに竹刀が突き刺さる……

『これは“私”と一夏の問題だ！関係の無い泉谷とこの女を巻き込む必要など無い！大体、私がいいと言っているの……』

（今日も一夏は大変そうだ）

トレーニングウェアに着替えなおしたヒロは再び自室から飛び出した。

そんなヒロの目に廊下を曲がろうとするツインテール娘が見えた。おそらく鳳さんと思われるが。

（あれ？泣いてた？）

離れていてはつきりと見えなかったが、薄っすら涙のようなものが見えた。

それから、何事も無くその日は終わった。

何か起こったのはその翌日、一夏の初戦の相手が鳳鈴音となった事くらいだ。

最後に鳳さんが一夏の部屋から出て行った日を境に2人の仲は悪くなっていた。それに伴い、ヒロへの態度も一気に酷くなった。例の話をちゃんと聞いたと思われる。

そんなこんなで、もうすぐクラス代表決定戦が始まる数日前、ヒロは一夏の訓練場所である第3アリーナに向かっていた。

「やばいな、遅れた……」

理由は、とうとう黨先輩を問い詰めることが出来たのだ。捕まえた。捕まえたのだが……

『いや、いいスクープだったよ。新聞部としては今までに無い評価が得られたわ……』

などなど、言いたいことだけ言われて

『じゃーね。これからも頑張つてねえ』

放心状態になっているヒロは薫子に逃げられてしまった。

(もう、どうでもいいや……)

一夏の言ったとおり、時間が解決するのを待つ事にした。

『……さい……ひ……にゅ……うー!』

ドガァンッ!

「な、何!？」

一夏他2名がいると思われるピットから何かの叫び声の後、轟音が響く。

そこから出てきたのは鳳さんだった。ヒロは話しかけようにも落ち込んでいる様で言葉が出てこない。

ヒロの存在に気付いた彼女が顔を上げる。薄っすらと涙を浮かべていた顔が一瞬見えたが、突然……

「泉谷！アタシと勝負しなさい！」

「は……い……？」

若干キレ気味の怒声が耳に響いた。

鳳鈴音は第3アリーナから第4アリーナへ移ったロッカールームにいた。

一夏同様IS使える男、泉谷ヒロ。会った当初は似たような悩みを持ったような奴かと思っていたが、かなり裏切られた。クラスメイトからの話：それだけで信じるほどではないが、ビデオで見た代表決定戦からかなり厄介な奴だと分かった。

何よりあのISだ。まさかビーム兵器搭載とは驚きである。アイツの戦い方から察するに、まだまだ隠された能力があるかもしれない。

それを探りたいのも理由の1つだ。

（別に一夏に貧乳って言われたからとか、一夏と一緒にいた2人のスタイルが凄かったからとか、目の前にタイミングよくむかつくやつがいたからとかそんなその場の勢いで決めたわけじゃないんだから……）

「よく逃げずに来たわね！」

アリーナにはすでにヒロが中央で待機していた。

「逃げたりしたら後がメンドーになりそうだからな」

ISに相手のデータが送られてくる。

（……F…91……）

（一夏達はあの子に何言っただよ……）

ヒロはアリーナで待っている間ずっと考えていた。会ったときには泣いていたから……

「よく逃げずに来たわね！」

元気そうで何よりである。

「逃げたりしたら後がメンドーになりそうだから」

ISに相手のデータが送られてくる。

（中国の“^{シエンロン}甲龍”……中国って事は“衝撃砲”……）

名前に關しては気にしない…困った。これは唯ではすまない。

こちらが相手の事を考えている間、凰さんは俯き、武器を力一杯握り締めていた。

「アンタは……」

「……ん？」

「アンタは“IS”でアタシをバカにするのね！」

ヤケになりながら、凰さんは、右手に武器を展開して突っ込んできた。

（あー、まあ何となく分かってきた……これからは“フォーミュラナインティワン”と呼ぶか……）

一夏達とのいざこざ、それにこのISに対する反応、彼女の“禁句”が分かった気がする。

頭上から繰り出された斬撃をヒ口はギリギリでかわす。それは地面に大穴を開けた。

（パワータイプか、あれ受けたら洒落にならないよ……）

リーチも速さもそれほどではないが、力がヤバイ。鳳さんは左手にも武器を展開して、2本の青竜刀で襲い掛かってきた。

2本の刀を巧みに操り、襲い掛かる斬撃をヒ口はかわしていく。

（どうせ、この距離で撃ったって当たらないし、やっぱり零距离が
らしか……）

量産機相手ならともかく、代表候補生の専用機持ち相手では厳しい。相手が接近戦をしてくれるだけまだありがたいが、チャンスなんてあっても1度くらいだろう。

「やるじゃん！」

鳳さんは柄と柄を合わせて双竜刀にする。それをバトンのように扱い、回転しながら攻撃してくる。回転しながらも正確に攻撃してくる。かなりの技術が必要なはず、代表候補生は伊達ではないようだ。

一夏や篠ノ之さんみたいにある程度の型が分かっているれば、接近も容易かもしれないが、こっちは全く分からない。

回転切り、突進からの突き、なぎ払い等様々な攻撃がさつきよりも高い威力でヒ口を襲う。

（回避が精一杯か……）

試合開始5分後

「アンタやる気あんの!？」

凰さんの攻撃を全てギリギリで何とかかわしていた。それもあるが、ヒロはライフル、ヴェスバーの構えはおろか、ロックオンすらしていない。

「そっちだって本気じゃないだろ! 攻撃が当たってもいなくせに!」

一夏に情報が洩れるからかもしれないが、凰さんは衝撃砲を使っていない。どの程度の完成度かは知りたい。

「アンタなんてこの双天牙月だけで十分よ!」

これで衝撃砲まで入ったら冗談じゃない。代表候補生なら射撃も出来るだろう。

(ただ、後ろから羽交い絞めにして零距离からメガマシンキャノン
を撃とうとか懷に飛び込んでライフルとヴェスバーを押し付けよう
とかそのチャンスを窺っていただけだよ。衝撃砲を使わないなら…
…)

けど……

「叩き潰すための憂さ晴らしなら、相手はやめる!」

地面に降りながらヒロは凰さんに叫ぶ。

「アンタに……アンタなんか私の何が分かるっていうのよ!」

更に強い声でヒロに向けて叫び返す。その声は若干震えていた。

（予想が絞れてきた……あと、あんな状態の攻撃を受けたらヤバイからこれ以上は続けたくない……）

「アンタがどう思っているかは分からないが、自分が思っている事も相手からは羨ましい事かもしれない」

「な、何言ってるのよ!？」

「まあ、聞け」

そう言いながら地面に降りたヒロは続けて話す。

「だからな、それを自分らしさとして磨いて相手に認めてもらえばいい。一夏なら、その人の全てを見てくれるはずだ」

ヒロは真っ直ぐ凰さんを見ながら言った。

「い、一夏は関係ないでしょ!で、何が言いたいわけよ?」

凰さんはそっぽを向きながらもこちらに目を向けてくる。

「つまり“貧乳”でも問題ない!」

（中学の友達よ……ありがとう。君の知識が役に立ったよ）

「ありが……っ!」

笑顔になりつつあった彼女は顔を俯け、拳を震わせている。

『時すでに遅し』いい言葉である。
「はっ！しま……ぎゃああああ！」

ドガアアン！バギツ！ドガツ！

見えない拳に殴られたのを合図に拳の雨が襲ってきた。

（何事も……程々がちょうどいい……あれ、前にもこんな事あったけ？）

（私への反応が少なかったのって……もしかして、ヒロ君は……）
ピットのリアルモニターの前には扇子を片手に2人のやり取りを見ている女の子がいた。

クラス対抗戦と……

（どうなるかなあ）

クラス対抗戦当日、ヒロはピットのモニターからアリーナ中央の2人を見ていた。

一夏達と凰さんの間にあった事を一夏から聞いた。どうやら一夏が昔交わした大切な約束を忘れたらしく、その後のクラス代表決定戦の結果で決着をつけるらしい。

凰さんのISの事（ほんの少ししか分からないが）を教えようと思ったが、ここは公平に戦ったほうがいいと思ったので止めておいた。

ちなみに……

「い、泉谷君、その顔の傷はどうしたんですか？」

「大丈夫です……」

山田先生が心配そうに聞いてきたのはヒロの顔には所々に傷があったからだ。凰さんになりの時間殴られたのを覚えている。ISを解除すれば殴らないと思ったが、さすがに向うも解除して……殴ってきた。それはもう痛かった。

（殴り合いもゴメンだけど、口は災いの元ってことだな……）

『それでは、試合を開始してください』

ガギンッ！

試合開始と同時に2人の刃がぶつかり合う。

何度か剣を交えただけで一夏は相手のパワーと技術に気付き、距離をとろうとした。

『——甘いつ！』

その時、甲龍の肩アーマーが口を開き、そこが光った瞬間に、一夏は吹き飛ばされた。

「なんだ、今の攻撃は！？」

「衝撃砲ですね。空間自体に圧力をかけて砲弾の打ち出す武器です」

心配そうな篠ノ之さんに山田先生が解説してくれた。

「わたくしのブルーティアーズと同じ第3世代兵器ですわね」

（この前の最後の1発はあれか…砲身も砲弾も目に見えないからいきなり撃たれたら厄介だ）

「しかもあの衝撃砲は砲身の射角がほぼ制限なしに撃てる様です」（完成度高くないか？ISならともかく、あれを生身で喰らっていたらと思うとゾッとする……）

（何とかしないと……）

あの衝撃砲はかなり厄介だ。砲身も砲弾も見えない上に真上真下はもちろん真後ろにまで撃ってくる。射角は無制限のようだ。鈴の高い能力でかなりの強敵だ。

ハイパーセンサーのおかげで、“撃たれた後”なら避けれる。こ
っちには2つの切り札があるけど、このままでは……

『なあヒロの攻撃は何でいいタイミングで当たったんだ？』

代表決定戦での事を訓練の時、ヒロに聞いていた。

『単に、相手が油断してただけだよ』

『それだけであんな上手くいくか？』

セシリアが本気で戦っていなかったのは分かった。俺の時は全くの別人だったから。

『相手がこっちの事を“知らなかった”それが1番大きいかな』

奇襲は『バリアー無効化攻撃』と『イグニッション・ブースト瞬時加速』この2つの切り札が機能して上手くいく。片方じゃ失敗だ。2つともシールドエネルギーの消費が多いから、奇襲は何度も出来ないだろう。

鈴は『バリアー無効化攻撃』は知っていたけど、『瞬時加速』は最近覚えた事だ。これを生かせなければ負ける。

鈴の“視界”から外れ、捉えられる前に一気に近づく、これしかない。ハイパーセンサーがあるとはいえ、狙撃する時は目を使えない。基本的に射角は無制限だけど、鈴は俺を正面で捉える様にしていたからだ。

それ以外なら、若干だが精度がおちる。ヒロがヴェスバーだけで戦ってた時みたいな感じ。

「鈴」

「なによ？」

「本気で行くからな」

「なによ……そんな事、当たり前じゃない……。とにかく格の違いつてのを見せてあげるわ！」

（一夏は仕掛けるつもりか？）

一夏の切り札は『バリアー無効化攻撃』と『瞬時加速』。2つだけだが、かなり強力である。

特に前者はISにおいてトップクラスの破壊力を持っている。後者は使い方次第で様々なことが出来る。それは織斑先生が教えたい。

ちなみに俺は出来ない。近接戦闘の本格的な訓練の時に教えて貰

う事になっている。近接戦闘は体で覚えた方が効果的らしいので生身でも行つらしい……

（生身だなんて、地獄しか見えてこないよ……って今はそれどころじゃない）

ヒロは首を振ってモニターに目を向けた。

『うおおおっ！』

気付いた時には一夏が凰さんに向けて突撃していった。上手いきそうだ。

ズドオオオンッ！

一夏の斬撃は届くことなく、巨大な光が一夏の行く手を阻んだ。その着弾地点から煙が上がる

（あれはビーム兵器……でもF91と違うし、威力も高そうだ……）

試合は中止、アリーナは混乱と恐怖が支配した。

そこから現れたのは全身装甲フル・スキンのISだった。ISの性能を考えればそんな事をする必要はない。顔でも見られたくないのかもしれない。
い。

（一体誰がどんな目的でこんな事を？）

一夏達は先生達のISが来るまで足止めを志願した。織斑先生も

いつもの口調で認めた。意外と何とも思っていないのかと思ったが、コーヒーに“塩”を入れていた。

ボケか単なる間違いに山田先生はすぐにツツコミをいれる。一夏の事を言われて凶星なのか、織斑先生は悪魔のオーラを纏いながら、山田先生に“塩”入りコーヒーを飲ませた。

（これは相当危険だ……）

その後、セシリアがISの使用許可を希望したが、アツサリ却下。

「遮断シールドが、レベル4に設定……」

「しかも扉が全てロックされて……あのISの仕業？」

「そのようだ。これでは避難する事も救援に向かうことも出来ない」

（まだ手はある……）

ヒロは“対抗戦”の戦闘時間から“一夏”のエネルギーを推定して、みながモニターを見ている間にピットを抜け出した。

ある日の放課後、一夏に教室で今日の作戦の相談をされた時の事だ。

『エネルギー性質の物なら無効化・消滅が可能？』

『ああ、けど、シールドエネルギーを使うし、威力が異常に高いから使い所を考えないといけない』

俺はある1つの事を思いついた。

『アリーナのバリア破れるんじゃない？……なら、ピットから入る必要ないな！』

ちなみにヴェスバーが壁に当たってしまった時は傷1つ無かった。

『それはマズ……』

『何をくだらない事を考えているか、馬鹿者どもが！』

パアン！パアン！どこからか現れた織斑先生に出席簿で殴られた。

『すいません。失言でした……』

『千冬姉、俺は言っただけ……』

パアン！相変わらずのキレ具合だ。

『そんな事を考えている暇があったら訓練しろ。このままでは鳳に負けるぞ』

織斑先生は注意をした後、すぐ教室を出て行った。

『でも、すごいよな“零落^{れいらく}白夜”って』

あのISの行動パターンなどからあれば“無人機”なのではないか？そう仮定した、俺は鈴にある作戦を提案した。

『零落白夜』白式の単一仕様能力。ワンオフ・アビリティ訓練や学内対戦で使うには強力すぎるが、相手が無人機なら攻撃できる。

「零落白夜だかなんだか知らないけど、その攻撃自体当たらないじゃない」

「次は当てる」

作戦が決まり、今まさに仕掛けようとした時、

「一夏あつ！…男なら…男なら、そのくらいの敵に勝てなくてなんとする！」

カタパルトデッキに現れた筈の声アリーナ全体に響く。しかし、敵は筈にビーム砲の銃口を向けた。

「マズイ！筈、逃げろ！」

（今やるしかない！）

「まだかな」

「こんな時に何をしていますの？」

ピットを抜け出したヒロは遅れて出てきたセシリアに捕まった。

「あ、あった。行くぞ、一夏を助ける」

「わ、分かっていますわ」

目的の場所、一夏が“切り裂いた遮断シールド”からヒロとセシリアはISを展開して突入した。

「「一夏っ！」」

篠ノ之さんと凰さん2名の必死な声がヒロ達を出迎える。そこには右手を失いつつも、地面にたたきつけた一夏に銃口を向ける侵入者の姿があった。

『……狙いは？』

「「完璧だ（ですわ）！」」

相手はシールドエネルギー切れなので、ヒロは両手で構えたビームライフルで、セシリアは4機のビットで狙撃した。5本のビームも何本かはかわされたが、残りは相手を動きを止めるのには十分だった。

「ヒロ、セシリア、決めろ！」

セシリアはスターライトmk？、ヒロは再度ビームライフルで留めを狙う。

「「了解d……っ！？」」

止めを狙うセシリアに緑色の閃光が迫る。

（なんだ？…さっきのとも、F91とも違うビーム…）

それをギリギリで防いだヒロは先ほどの侵入者が空けた穴にまた
“別の正体不明機”を発見した。

——ステージ上空に熱源。所属不明のISと断定

ISのハイパーセンサーからの警告が無ければ、防げなかった。

そこには半人半虫のような外観、6本の脚を持った全身装甲のISが浮かんでいた。

——敵IS射撃体勢に移行

下半身の6脚から6本のビームがヒロに向かってくる。

「くっ！」

ビームシールドで何とか防ぎきるが、その衝撃でアリーナの地面に叩きつけられた。2機目の敵はこちらがどう出るか傍観していた。

その姿勢に代表候補生2名は警戒する。背中を見せれば、攻撃されかねない空気を発していたからだ。

「ヒロ！大丈夫か！？」

近くにいた一夏が倒れたヒロに向かってくるが、

「一夏！逃げろ」

背後には先ほど動きを止めたISが一夏に銃口を向け、残されていた左手の銃にエネルギーが集約していく。最大出力形態で構える。バースト・モード

「友達を置いていけるか！」

向き直った一夏はエネルギーが心許無い筈だが剣を向ける、下がる気がまるで無い様だ。鳳さん達は動けなさそうだから、俺が対処しないと……かわしたら遮断シールドが無いアリーナにどれ程の被害があるか計り知れない。

「一夏！飛べええ！」

ヒロは一夏にメガマシンキャノンを発射し、強制的に飛ばせた。

そのまま、一夏に銃口を向けようとしていた、敵に直撃し、こっちに銃口を向けてくれた。ヒロはヴェスバー2門を“最大威力”で構える。

（あれには誰が乗っているのだろう……）

無人機の可能性は高いのだが、切り落とされた腕は義手とかそんな感じかもしれない。でも、やっぱり顔まで装甲で覆われていて分からない。

『F91は全身装甲でもいいんじゃない？』

首から上しか露出していないので、いつそ全身装甲でもいいんじゃないかとアスランに聞いた時があった。

まだ、頭部は完成していないと聞かされてたけど、頭部の事は今のままということになったらしい。あっても無くてもいい気がしなくも無い。けど、ずっと気になっていた。

『今のままでいい。ISを操作しているのは同じ“人”だからな』

と微笑みながら言われた。その時は何が言いたいのか全く分からなかったけど、今なら判る気がする。ISを動かしているのは同じ人なのだから、どんな人がどういった思いを持ってISを使っているのか知りたい。

一瞬撃つのをためらってしまったが、あれを“止める”手段に賭けた。止めを刺すであろう、一夏がどうするかは分からないが。

「今度は外さない！」

3本のビームがアリーナに飛び交った。ピンクのビームに“1本のヴェスバー”がぶつかり、大きな爆発を起こす。残りもう1本は残っていた左腕を吹き飛ばした。

「うおおおお！」

上空から一夏が渾身の一撃を決め、機能を停止させた。

「一夏の容態は!？」

一夏は最後の一撃を決めた後、突然倒れてしまった。

「全身に軽い打撲があるくらいだ。衝撃砲の最大出力を絶対防御無しで受けたからな」

保健室から出てきて電話を終えた織斑先生にヒロは詰め寄った。

「ふう……良かったです」

「泉谷、貴様には色々聞きたいことがある」

「織斑先生、俺も聞きたいことがあります」

それは今回の襲撃事件についてだ。最初に来たISもその後にくいたISもかなり高性能なビーム兵器を使用していたから、何か心当たりがあるかという事だった。

「すみません。俺の所属する企業では見た事の無いビームの色だったので、心当たりはありません」

「そうか。それで貴様の用は何だ？」

「えっと、その…あのISの操縦者は？無事なんですか？」

「あんな事があったのによくそんな事が聞けるな」

「すみません……」

織斑先生は呆れながらも答えてくれた。

「安心しろ。あれは“無人機”だ」

その先は聞けなかった。残り1機は“見なかったな”と口止めされてしまった。あんな鬼みtainな人に言われたら、うなずかざるを得ないよ……。

でも残りの1機、見間違えるはずが無い。

（アレは……アレは“アスラン”の世界の機体だ……）

“あの夏”に体験した事の1つにあれを見た。そしてあれは“無人機”だ。全身装甲で見えなかったが、人が使っているのは間違いない。ヒロへの攻撃意外は何もせず、無人機の最後まで見てから、教師部隊が到着する前にいなくなった。

無人機の関係者が回収に来たのか、単に一夏やヒロを見るために来たタイミングが良かったただけなのか、色々考えられたがどれも推測の域を出ないから止めた。

数日後

「何だろっこの既視感は……」

「ヒロ、俺もだ……」

寮から学校に来たいつもの面子は掲示板に集^{たか}っている集団に目を向けた。

案の定、ヒロと一夏に気付いた集団は道を開く。そこには…

『策士、策に溺れる！』

前回のよう^ににヒロは悪役として、鈴音が被害者として書かれ、主役は勿論一夏だ。何故か先日、彼女に『貧乳』と言ってしまった時の事を編集してある。

（今回渡したビデオは俺が入っているシーンを全部カットしたんだが…）

記事の中では助けに来た一夏が凰さんを抱っこしているシーンが採用されている。いわゆる“お姫様抱っこ”というやつか。

使える要素なんて無いと思っていたのは甘かった。一応、ヒロの所属団体へ参考資料として渡す予定のデータを編集して渡したのだが…まあ、あの事件のせいで記事が書けなくなったからといって、この話題を出すとは……俺の評価が下がるだけじゃないか？あと誰が見ていたのだろう…1つ疑問が生まれた。

それも束の間。

「なになに、何なの？……ふんふん、なるん……っ！？」

来てほしくない人が現れてしまった。今日もツインテールが似合

っている。

「……………」

（うん。もう、いいや……これもきつといい思い出になるだろう）

廊下の壁に大きな人の形をした穴が出来た。それ以降、ヒロを見て避ける人、顔を見ただけで気絶してしまう人が更に増えた。

前回の一件と同様に、ヒロの惨状を見る1人の女生徒がいた。

（私らしくない、私らしくない……………でも、遠くから顔を見ただけであの日の事を思い出しちゃうよ）

聞いた話だとヒロ君はあの日の事、それ以前の一部の記憶（私ごと、更識楯無に関する）が無いらしい。

（ヒロ君の記憶が戻ったら、どうなるのかしら？わたし……………）

彼の記憶が戻る前には、今の状態を何とかしなければ、と意気込む『生徒会長』の更識楯無だった。

『報告は以上かね？』

「はい」

とあるモニターに猫を膝の上に乗せた男が映っていた。

『これから、諸君らには期待している』

「はっ！」

モニターの映像は消えた。

「どうだったかね？例の“無人機”は？」

ここはある地下の研究室。そこには2人の男がいた。話しかけられた1人は若い男のようだ。

「大した事はありませんね。あんなヒヨっ子にやられるようでは」

「それでも、コアの回収すらしなかった君の考えを聞きたいのだが？」

「あれはどこの国家が作ったものではないでしょう。IS学園にそんな事できるどころなんてありません」

「ほう。亡国企業ということかね？」

残り1人は外見からは分からないが、若い男よりは年上のようにで彼の話に耳を傾ける。

「あそこでも、無人機を作るのは無理でしょう」

若い男は『あそこはISの数が少ない』、『無人機にするより、あの“組織の人”が扱ったほうが明らかに強い』と付け足す。

「と言うと…?」

「“篠ノ之束”ですよ。彼女にとっては親しい者があそこにはいますからね。あの“タイミング（一夏の試合）”ですから可能性はあります」

「亡国企業も博士も“織斑一夏”にはご執心だからな」

「両者がIS学園にアプローチをかけるのは明白でしょう」

若い男の考えに気付いた男は…

「…………ふははは！全く君と言う男は！だが、ゲーム程簡単ではないんじゃないか？」

「あくまで可能性ですよ。僕らも準備をしておきますか」
2人の会話はひっそりと、虚空に消えた。

クラス対抗戦と……（後書き）

最近ジ・エッジ版とボンボン版買った！
感動の一言だった！

敵（説明の通りの機体）は若干武装を改造

5月18日（前書き）

今回は短めです

関羽（笑

5月18日

「ここまでの威力とは」

オーブに一時的に戻ったアスランは2種類のビデオを見ていた。

1つは代表決定戦、もう1つは“ゴーレム”との戦闘のものである。

“白式”に関しては良く知っていたが、“F91”の『ヴェスパー』には驚かされた。

“あんな状態”でもゴーレムのビームと渡り合えるとは思えなかった。データ上では可能であつたらしいが…

やはり“F91”のポテンシャルはかなり高い。

IS学園に入学前、いや、整備に手を貸すことに決めた時からF91にはリミッターをかけた。

ビームの出力に関してはあれが限度（それでも強すぎる…）だろう。防御もビームシールドがあるくらい（インフィニット・ジャステイス程ではないが、十分すぎる…）。

何より特筆すべきなのは機動力だろう。操縦者の実力に応じて負担のかからない様に制限がかけられている事だろう。

その上からでも更にリミッターをかけた。最大でも第3世代相応

の機動力になる。

今は打鉄くらいの機動力だ。

もし、全てのリミッターを解除したら、データ上ではインフィニット・ジャスティスが攻撃力、防御力で勝っているが、機動力はF91が上になる。

F91の本当の能力に関しては俺とウモン主任、マリア社長の3人しか知らない。何せ、既存のISのスペックを遥かに凌駕しているのだから

それにあの能力…

現在は使えない様に設定してある。

入学前のあの模擬戦、

（知られなくなかった…あんな自分を…）

俺は完全に油断していた…：ハイパーセンサーにあれ程の影響を与えとは…

背後を取られた危機的状況か、油断していた自分への怒りからか定かではないが俺の中で何かが弾けてしまった。

落ち着いた時には、ヒロのライフルを切り落としていた。

メサイア戦後、モルゲンレーテでエリカ・シモンズ主任からこの能力に関すると思われる論文を見させてもらった。

名を“SEED”(Superior Evolutionary Element Destined-factor) 〃「優れた種への進化の要素であることを運命付けられた因子」

“戦闘時”においてはシンやキラと渡り合う為には貴重な能力だ。

だが…だが、戦闘時にしか役に立たないこんな能力のどこが優れた種への進化なのだろうか？

それこそ、ナチュラルとコーディネイターよりも酷い事になる可能性があるかもしれない。

今思えば、ISの防御力なら何の問題も無かった。

話が逸れてしまった。

もし……………

もし、あの状況を突破出来なかったら？と今回の一件の疑問を束博士に聞くと、

『ちーちゃんが生身に刀1本で解決しちゃうよ!』

たしかに暮桜は刀1本だったから刀の扱いには長けているだろうが、生身で何とかできるほどの人物なのか、織斑千冬は？

一体どの時代の武将だよ…

まあ、それよりもゴーレムの後に現れた“ゲルズゲー”が気になる。

陽電子リフレクターを使うシーンは見られなかったが、おそらく搭載されているだろう。

あの事件にまぎれて偵察にでも来たのだろうか、目的は定かではないがIS学園に何かしらの目的があったと見て間違えない。

とうとう、世界が、様々な思惑が動き出そうとしている。

“ISを使える男『織斑一夏』”の出現に伴って…

彼が関わっているのならば、当然現れるだろう

「亡国機業…」

（皆どうしてるだろう…）

元の世界でも5月18日なのだろうか。

「キラ、カガリ…おめでとっ」

自室の窓から月を見上げるアスランは空に向けて呟いていた。

5月18日（後書き）

比較の目安はGジエネです

あくまで、“機体の性能”はです

転校生来日！1（前書き）

やっと2巻の話が出来る

2巻の話はかなり長くなる…

転校生来日！1

6月のある土曜日

（いやゝそれにしても…進歩したもんだ、うん）

ヒロは一日の日課を終え、自室に向けて歩いていった。

最初の頃なんて、校庭1周するのに……それは思い出さない
でおこう。

今では30分で走りきれるようになった、とんでもない進歩である。次は10kmを走りきる事からだな。

「やっと部屋に着いた…早くシャワーを……あゝあ、一体いつになったら、大浴場に…」

事情も、何もかも分かっているが、日本人故なのか浴槽に浸か
りたい。それは一夏も同じらしい。

ガチャッ

扉を開けたその先には……

「えっ!？」

そんな次の日曜日。

「なあ一夏、今日こそあの記録を超えようぜ！」

俺は中学の友人である五反田弾と一緒にいた。実家が食堂を営んでいるので、そこで昼を済ませた俺と弾は駅と一体化しているシヨッピングモール『レゾナンス』のゲーセンの前にやってきた。

目的は唯一つ！あるガンシューでハイスコアをとる事だ。

そのスコアはオンラインに対応している。

“ 去年の夏 ” 辺りにほぼパーフェクトのスコアをたたき出した2人組みがいたらしい。

それを知った俺と弾は受験勉強そっちのけでよく挑戦していた。千冬姉に何度も殴られたのはここだけの話である。

「よし、行くか」

2人がゲーセンに入ろうとした時、

「あれ、一夏？」

振り返ったその先には、見慣れた同級生と初めて見る落ち着いた物腰の男性がいた。

「よう、ヒロ！お前もゲーセンか？」

「いや、今日は……」

「なあ一夏、俺を置いてかないでくれよ」

話が進もうとしたところで、弾が割って入ってきた。

「わりいな、弾。ヒロ、コイツは……」

「五反田弾だ。一夏と鈴とは中学からのダチだ。よろしくな」

「泉谷ヒロだ。こちらこそよろしく」

「そっちは？」

会った時から気になっていた。何ていうか優しい時の千冬姉みたいな感じがする。

「ヒロと同じ企業で働いている、アスラン・ザラだ。よろしく頼む。それと、アスランでいい」

「「？」」

アスランと名乗った男性は俺たちの2つ上らしいが、俺と弾は大人びた雰囲気とは裏腹にフランクな態度に少し戸惑っていた。

ヒロは『やっぱり、驚くよね……』みたいな苦笑いを浮かべながら見ていた。

「ハ……イン……みたいには……」

何か言っていたが上手く聞き取れなかった。

最後に俺が自己紹介を終え、お互いに挨拶を済ませたところで弾が…

「ヒロ、アンタもあの楽園の住人なんだろう？」

「楽園ね……まあ“一夏”にとってはそうだろうな『そんなことねえーって』どの口が言うか」

「やめへふれ」

事実を言っただけなのにヒロが俺の頬を引っ張ってくる。

「ヒロ、アンタにとっては違うのか？」

手を離れたヒロは弾の質問に対してこれまでの経緯を話す。それにつれて、気が沈んでいくのは気のせいかな？

確かに、あの新聞による被害はかなりの物な感じがする。だからって、俺にとっては楽園ってのは違うぞ。

箒もせシリアも鈴もいつも怒ってるし、千冬姉にはよく殴られるし、寮生活では気まずい時もあるしでどこが楽園なのかはつきりと教えてもらいたい。

「アンタも大変なんだな…」

何故だろう？ヒロの苦勞を分かっているのは“弾”な気がする。

「アスランはどうなんだ？」

企業で働くとなると必然的に学園と似たような状況になるはずだ。同性から見ても、彼はモテそうだ。

一夏は穏やかにこの状況を見守っていた美形に質問をした。

「残念だが、今は研究で手一杯だ。一日一日を悔いの残らないように過ごす、それだけさ」

はつきりと答えた彼の言う事は分かる、俺もそう思っている。だが、何故かヒロと弾の2人は俺とアスランを哀れむ様な、呆れた様な複雑そうな視線を向けてくる。

「ところで、2人はどうしてここに？」

ヒロ達に妙な視線を向けられ、妙な空気が漂っていた場をアスランが変えてくれた。

「ああ、アレだよ」

俺と弾は息ピッタリでゲーセンの中のあるガン・シューティングのゲーム筐体《きょうたい》に親指を向けた。

アレが今回の、いや去年からの俺達がゲーセンに来た時の定番となっている戦場である。

『リロード、リロード、リロード』

今、その台の前には弾切れに気付かず引き金を引く顔に傷のある

1人の男が汗を出しながら戦っていた。

彼の周りには眼鏡のツインテールの女の子と腰まで届く長い髪の子が見守っている。

そして2人に来た理由を話すと…

「ハハハハ……」

「ま、まあ、頑張ってくれ…」

「おう！今日こそ俺と一夏で超えるぜ！」

「弾、やってやろうぜ！」

上から、ヒロ、アスラン、弾、俺の順だ。2人は関係の無い話をしている筈なのに何故か変な感じだ。

特に、最初の印象からは想像出来ないアスランの困惑した反応に驚いた。

まあともかく、ゲーセンに入ろうとした時…

パンッ！パンッ！パンッ！

普段より、リアルな銃の音がした。

（今時のモデルガンは凄いな）

カラン、カラン…

まるで、本物の銃を使用した様な感じだ。

「『ええええっ！？』」

アスラン以外の3人が驚きの声をあげる。目の前で本物の銃が発砲されても驚かないとはさすがISの企業で働いているだけの事はある。

が、声をだしていないだけで、表情は少し驚きを示していた。

さっきプレイしていた男の物と思われる声が聞こえた。

『つい本気を出してしまった』

『出すなあ！』

パアアアン！

千冬姉に負けず劣らずな素晴らしい“ハリセン”の音が響き渡った。

プレイしていた男が殴られたのだ。どこにハリセンを仕込んでいたのか聞いてみたいな。

今の世の中、街中で男が女に何かされるのは珍しい事ではないが、あれはあきらかに男の方が悪い。

「ああ、もう！あのゲーセン2度と行けないわよ」

4人が呆氣にとられること数分後、

さっきの3人が出てきた。プレイしていた男が2人の女の子に怒られていた。何か、怒っていると言うより、呆れていると言った方がいいかもしれない。

「何故だ？」

「ゲーム画面に向かって本物撃つバカがどこにいるってのよ!？」

「弾が切れたのだ」

「だから……………」

3人の雑談が聞こえてくる。やった本人には筐体を破壊してしまったという事実が無いのかもしれない……

「っ!!…ィズ…ー…k……………」

結局、不慮の事故で出来なくなってしまったが、色々面白かったな。あの騒動の時のアスランの顔は…まるで知っている人を見た感じだった。

翌日

（しかし、2人の教師の視線がきついな…）

入学が遅れた理由は轡木さんのおかげ（轡木さんと楯無の説得は疲れた。特に楯無が…）で聞かれなかった。が、時折、後ろをチラ見する山田先生は拳動不審な怪しい人にしか見えない。

（まあ、理由は俺だけじゃないだろうがな）

転入生として扱われることになったアスランは山田先生、織斑先生の2名の教員と“金髪の中性的な顔立ちの生徒”と共に1 - 1組へ向かっていた。

彼が噂の少年かもしれない。東博士やウモン主任からデータは見せてもらった。東博士はハッキング、主任は企業間のネットワークで情報を得たらしい。

「君がアスラン・ザラさん？」

「ああ、そうだ」

「はじめまして、シャルル・デュノアです。よろしく」

シャルルと名乗った少年は“上品”に自己紹介をしてきた。

（デュノア？……俺の事を知っていると言う事はデュノア社の関係者の可能性が高いな）

一夏のように大々的に発表はしていないが、企業、組織間ではヒロも俺も“ISを使える男”として知られている。

デュノア社は経営不振で大変な筈だ。それでもIS学園に送ってきたのは何らかの理由の為だろう。それも想像がつかないわけじゃないが……

ちなみに、アスランが所属する“オーブ”は経営などには無頓着である。“利益”の為に兵器開発をやっていたら、彼は所属していないだろう。

主な収入源はISには関係のあまり無い別の物である。

「アスラン・ザラだ。こちらこそよろしく頼む」

「では2人は私が呼ぶまで待っていてください」

2人が自己紹介を終えたところで、目的地に着いた。

（一夏はかなり驚くだろうな……でも…）

土日はヒロと整備やら買い物やらで忙しかったので、今朝しか学校の話は聞けなかった。

登校前の別れ際にヒロに言われた事が気になってならない。

『覚悟しておいた方がいいよ』

あまりに真剣に言われたので目の前の薄いドアの向うにどんな世界が待っているというのだろうか？

「ええとですね、今日はなんと転校生を紹介します！しかも2名です！」

教室に入ってきた山田先生から爆弾が投下される。

「「えええええっ！？」「」」

今回は鈴の時と違って情報が無かったせいかわらさず中に衝撃が走った。

「2人？」

さすがのヒロも驚いているらしい。

（ていうか、何でうちのクラス……？普通分散させるもんじゃないのか？）

そして、

「失礼します」「」

2つの女の子にしては低い声が教室内に響く。

その声の主を見た皆は啞然としていた。

2人とも“男”だったのだから。

そして何より驚いたのは、2人の内の1人は昨日会った“アスラ
ン・ザラ”だった。

「ヒロ! どうし……っ! ?」

後ろを振り向いたその先には俺の顔を見て笑いをこらえる少年の
顔があった。

転校生来日！1（後書き）

アレは2人がどんなゲームをプレイしに来たか、という為のものです

彼は半端なく遅いですね。彼が一般レベルに達するのはいつになる
ことやら…

転校生来日！2（前書き）

かなり長くなってしまった…

転校生来日！2

「アスラン・ザラだ。民間企業でISの開発を行っています。中にはご存知の方もいると思いますが、男ですがISを使えます。皆より2つ上だが、よろしく頼む」

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました」

「お、男…？」

「はい。こちらに僕と同じ境遇の方々がいると聞いて本国より転入を――」

「きゃ…」

「はい？」

「きゃあああ――っ！」

「男子！2人の男子！」

「美形！守ってあげたくなる系の！」

「知的でクールでイケメン！」

「朴念仁の織斑君！」

（何だそれ！？）

「鬼畜系の泉谷君！」

（この扱いはいつまで続くのかな）

「「地球に生まれて良かった」」

「「IS学園にいて良かった」」

（この展開を覚悟しておけ、という事だったんだな。ヒロ…）

「あー、騒ぐな。静かにしろ」

（全くこいつらは、予想していいとはいえ、いつもいつも……）

「「「……」」」

「今日は2組と合同でIS実習を行う。各人はすぐに着替えて第二グラウンドに集合。解散！」

そんな感じのショートホームルームSHRだった。

俺こと織斑一夏はさっそく、後ろの席で悶絶しているクラスメイトに詰め寄った。

「何で昨日言ってくれなかったんだ!？」

「その方が面白いと思ったんだ」

「そんな事……」

「まあ、昨日は色々あったからな。改めてよろしくな、一夏」

「アスラン……こっちこそよろしく」

「ちょっといいかな?女の子達の視線がちょっと気になるんだけど……」

もう1人の転校生の確か……シャルル・デュノアだ!彼が周りを見ながら、こっちに来了。

「ああそつだな、女子が着替え始める前に男子は空いているアリーナ更衣室で着替えだ」

「実習の時はいつもこんな感じだから」

さっそく4人でアリーナに向けて出発した。

1階に下りてきたヒロは皆にある事を提案した。

「ここからは別ルートで行こう。一夏はアスランと、俺はデュノアと行くから」

「ああ、分かった」

ヒロの意図に気付いた2人はすぐに走り出していった。

（アスランに色々話しておいて良かった。“相手の戦力”は分散させた方がよさそうだからな）

「えっ！？でも……」

「すぐに分かるから。行くよ、早く！」

ヒロはデュノアの手を引いて走り出した。

「う、うん……」

（何だろう？）

こんな風に動揺されると、若干戸惑ってしまう。何か顔が赤くなっている気がするから……

「どうしたの、デュノア？」

「いや、何でもないんだけど……その、シャルルって呼んでくれな
いかな？」

（デュノアっていう姓に何か抵抗でもあるのだろうか？）

「……ああ、分かったよ、シャルル。俺はヒロ、泉谷ヒロだ」
「よろしく、ヒロ！」

「ああっ転校生発見！」

それも束の間、眼前には情報を先取りすべく現れたの大勢の刺客がいる。

（この組み合わせにしたのがここで役に立つ！）

「でも、泉谷君と一緒に……」

「今は2人つきり…悪魔の毒牙にかかって禁断の道に……」

「金髪の子が総受けっていうのも……そそるわ」

「そ、それだけは阻止したいけど……」

「触^{さわ}られたら妊娠しちゃう……」

こういう時だけは自分の扱われ方に感謝しないと……何かしらのメリットが無いとねやっぱり…所々妙な発言があったのはスルー（心の中では突っ込んだ）して突撃した。

ヒロとは対照的にシャルルは…

「禁断の道！？」

（行きません、行くなら君1人、または一夏と行って）

「総受け！？」

（そっち系の趣味はお持ちではありません）

「妊娠!？」

(あなたのこれまでの人生が気になります……)

「結婚!？ Shotgun Wedding!？」

(横暴だ……てか、誰も言ってねえし!あと、君はフランス人だろ!)

親切にも普及率の高い英語で言ってくれたのは彼なりの配慮かもしれない。フランス語で言われたら……って違~~~~う!

金髪の転校生のシャルル・デュノアは想像力(悪く言えば妄想癖)豊かな少年だと言うことが分かった。

最後のは余計である。

そんな感じで心に傷を負うもこの人数程度なら突破は容易でした。

ロッカールームにすぐたどり着いた2人は互いに背を向けて着替え始めた。

あれだけの惨状を見たのだ、シャルルが気まずくなってしまうのは仕方ない。最初に誤解を解いておかないと。

「シャルル!」

俺は着替え終わると、シャルルを呼んだ。結構着替える速さには自身があっただ、彼はすでに着替えが終わっていた。

（やっぱり、代表候補生だけあって違うな）

転校生は細いのになにか鍛えられてる感じがした。汗1つ掻いていないシャルルと違って、ヒロが声に出して反応していたら、ここに着くのにもう5分は掛かり、汗ダラダラになっていただろう。

「な、何かな……？」

（これはマズイ…非常にマズイ。誤解されているかもしれない…）

「ぼ、ぼぼ、僕は気にしないよ。人の趣味嗜好は人それぞれだもんね。日本では一人一色って言うんでしょ？」

「落ち着いて、それを言うなら十人十色だよ」

「うう、ごめん……もう大丈夫だよ…」

小さくなったシャルルの表情を見ると、何かこうムラムラ？悶々とk…

「俺のバカーーーー」

ドガッ！

（い、痛くない…痛くないさ…）

シャルルが更に困惑した表情で迫ってくる。また俺を惑わすつもりか！？何て卑劣な！

ここで何かをされたら俺の中の何かが目覚めかねない。それを阻止するためにはこっちのペースに持ち込まないと！

（そうだ！この手があった！一夏とアスランは分かってくれなかったが、弾は分かってくれた。シャルルは上品だからそういった面に免疫は無いかもしれないが、男なら…これは世界共通のことだと俺は信じてる！）

「だい？…『シャルル・デュノア！』…な、何？」

「俺の話を聞いてくれ！君も“男”ならこの気持ちが分かってくれるはずだ！」

「っ！？…ば、僕も“男”だからね。話を聞くよ！」

意外と話が分かってくれる奴だと認識を改めないといけない。

（このままのペースでいけば……）

「なあ、君も――」

ボンッ

シャルルの頭から湯気が沸く。

「あ、でもシャルルなら、自分でk……………」

言っつて気付いた事がある。本心がバレそうになった。

「美形の転校生、キターーー！」

「しかも織斑君と一緒に！」

「者ども出会え出会えい！」

「止まるな！走れ！」

「はあ、はあ……ああ……」

俺とアスランはヒロ達と別れてから迫り来る暴徒と化した生徒を避けながらアリーナに向かっていった。アリーナへの道が塞がれるたびに遠回りをしなきゃいけなくなった。

『男（2人とも美形）の転校生が現れた』そのお陰でいつにも増して殺気立った女子の行動力はヤバイ。

彼に聞きたい事があつたが、それすら聞けない程のスピードだった。

「はあ、はあ、はあ……」

俺は目的地に着く頃には息が乱れ、汗だくになっていたが、アスランは汗1つ無く、呼吸すら乱れていなかった。研究者だからそうでもないと思っていたが、かなり鍛えているのが分かった。

更衣室に着くとそこには…

顔から湯気が出ているシャルルがいた。

「Maitout de bain scolarre……Cuttes boufantes……」

何やら妙な言語を発していた。フランス語かもしれないが、よく分からないので事情を知っていると思われるヒロの存在を探すと…

「失敗した失敗した失敗した失敗した失敗した失敗した」

もつと酷い事になっていた。

「おい、大丈夫か？」

「……………」

更衣室の片隅でなにやら念じているヒロに一夏は話しかけた。が、返事は無い。

「ヒロ？」

今度はアスランも話しかけてみると…

「さ……n……o……も」

「「??？」」

「3人とも、BL好きの変態だーーーー」

「「はあ??？」」

心外な事を叫びながらアリーナにヒロは向かった。

（（この数分の間にヒロに何があっただんだ？））

そんな事もあったけど、俺とアスランも着替えた。やっぱりアスランは筋肉がありつつも引き締まった肉体の持ち主だ。

何とかシャルル・デュノアは正気に戻っていたので3人とも名前前で呼び合う仲になった。

「よろしく、アスラン、一夏」

「「ああ」」

だが着替えを覗こうとするシャルルの視線はくすぐったかった。

「行こうか」

「おう」

「う、うん」

「シャルルのスーツ、何か着やすそうだな。どこのやつ？」

「あ、うん。デュノア社製のオリジナルだよ」

「デュノア？お前の苗字もデュノアだよな？」

「父が社長をしてるんだ。一応フランスで一番大きいES関係の企業だと思う」

（デュノア社の社長ご子息か、納得がいくな。あの上品な雰囲気も頷ける。カガリにも見習ってほ……ん？）

何故、カガリに見習ってほしいと思ったのだろうか？確かに国家元首としての實禄は持っているが、“上品さ”は言ってはいけなかもしれないがあまり無い。

彼女らしい強気な振る舞いもいいのだが、彼女に気品ある態度も時と場合によつては必要になる。が、シャルルは“男”だ。カガリが女性のエスコートの仕方を学んでもらっても仕方ないはずなのに。

それはさておき、シャルルはデュノア社の社長が肉親という事が、この前の主任の疑問を深めてしまった。

『アイツに息子がいたなんて初耳じゃ。まあ、あそこは色々妙な話を聞く企業だからあまり驚かんが……』

写真を見たが、父親似か、母親似かさっぱりじゃ。ホントにアイツの息子なのかすら……』

俺が写真を見ても本当に血縁関係があるのか分からない。だが、それ以外の可能性もいくつか考えられる。

何より、一夏が父親の話題が出た時、シャルルの表情が曇ったのがどうも引つかかる。

「ヒロのは全体的に緑っぱかったけど、アスランのもオリジナルの奴か？」

「ああ、そうだ」
(パイロットスーツがISスーツになったとは言えないからな)

この世界に来た時に何故かマゼンダのパイロットスーツがISスーツに変化した。

ちなみにヒロのはZAFTの一般兵が使う緑色のパイロットスー

ッをモデルにした。

「本日から実習を開始する」

「……はいっ！」「……」

「まずは戦闘を実演してもらおう！^{ファン}鳳、オルコット」

「ハイツ」

「専用機持ちならすぐに始められるだろう…前に出る」

渋々前に出る2人に織斑先生が何か声をかけると一気にやる気を出した。

「やはりここはイギリス代表候補生、わたくしセシリア・オルコットの出番ですわね！」

「実力の違いを見せるいい機会よね！専用機持ちの！

織斑先生が彼女達に言う事、あそこまでのやる気の出し様、何となく予想できる。食べ物やそういったご褒美の“物”の類では無いだろう。

「今、先生何て言ったの？」

「俺が知るかよ」

「一体何をしたんだ？」

シャル、一夏、アスランは分からない感じだ。転校生の2人はともかく、一夏が分からないとは…まあ、分かってたら分かってたらで憎らしいが…

「それでお相手は？鈴さんとの勝負でも構いませんが」

「ふふ〜ん。こっちの台詞。返り討ちよ」
「慌てるなバカども。対戦相手は——」

ヒュウウー——

何だろうな、この何かが落ちてくる音は？

「ふああーっ！ど、どいて下さ〜いっ！」

山田先生はなぜあんな高い所から落ちてくるのだろうか？てか、
空で待機する必要はなかったのでは？

ラファール・リヴァイブ

ISを装備してる訳だし、避けて何の問題も無いな。みんなIS
の安全性を熟知しているので、着弾点から離れていく。

もしかしたら、ああいった場面を華麗に対処するという先生達の
実力を魅せる演出かもしれん……現実はそのはいかなかった。

ドカーン！

周りを見ても、山田先生が発生させた砂煙を見ていた。だが、

（あれ…一夏は？）

一夏に向かつて一直線だったので、さすがに避けていると思った
が姿が見えない。

砂煙が消えてきたその巨大なクレーターの先には………

何かが弾けた。

むにゅ

「うっ？」

「あ、あのう、織斑君…困ります。ああ…でも、このまま行けば織斑先生が義理のお姉さんってことで、それはとても魅力的な…」

山田先生が妄想の世界に旅立ち、俺は目の前のプリンオッバイから離れられずにいた。

（ここには瞬間接着剤でもあるのかもしれない……っ！？）

カッン……

「一夏が男好きの変態じゃない事を確認した。けど……」

（い、いつの間に…！？）

「その誤解は元々、間違いだし！こんなの“不可抗力”だろ！？」

ヒロは一瞬でこっちにきて俺を変態扱いする。

「なら、何故離さない？この変態ラッキー・スケベが！」

（くっ…）

「これを知った誰も（俺や弾、全国の男性）が望むだろう…」

（何を言っているかさっぱりだ。てか、俺の後頭部にライフルを押し付けるな！本気でヤバイって！あと…何だあの目は！？犯罪者の目じゃないか…）

ヒロは両腕を部分展開をしてライフルを押し付けてくる。ちらりと見たその先には、殺人者にしか見えない、光の失ったヒロの眼……

その更に後ろにはアスランが苦笑いしながら、シャルルは赤面しながらこっちを見ていた。

「“一夏”と代わりt……何しやがる！！」

俺とヒロに向けて青い閃光が飛んできた！俺はヒロの背後に隠れ、彼はそれをビームシールドで防ぐ。

「ホホホ…。残念です。防がれてしまいましたわ……」

「狙うなら一夏だけにしろよ」
「フンッ」

（2人とも…俺はどうなってもいいみたいな扱いをしないでくれ…俺が何をしたって言うんだ！）

山田先生が上になるかと思ったが、何故か山田先生を押し倒し、胸を鷲づかみした。

事故とはいえ、千冬姉をも越える巨乳を離せずにした。

アクション

（事故とはいえ、“巨乳”を触わってしまった。うん？“巨乳”？
…ヤバイ！！）

「いーちかー！」

ガシーン

「女の敵ー！」

鈴が双天牙月を連結させ……

（投げたりしん……投げちゃったよ）

「ゴメン、一夏。俺は死にたくない」

「おいっ！？」

部分展開とはいえ、生身の俺の腕力では敵わず、ヒロの目の前に
固定されてしまった。

「ヒロ、友人を差し出すのか！？」

俺の必死の叫びは……

「だって…IS展開しててもヤバイって…」

鈴の強すぎるパワーの前に俺の願いは無残にも砕かれてしまった。

「…」

世界がスローで見える。俺の死を告げる破壊の刃が刻々と迫ってくる。

（かわせない…オレは…何で白式を展開しなかったんだろう…）

ドンッドンッ！

ガキンッガキンッ！

鈴の刃を2つの弾丸が弾き飛ばしたのだ。

一夏シールドは全く役に立たないなあ（当然である）と諦めた時に2つの弾丸が助けてくれた。

その発砲音の先にはライフルを構えた山田先生の姿があった。

皆が普段とのギャップに驚くのを解っていたかのように織斑先生が解説してくれた。

山田先生は元代表候補生だった。が、今は、先ほどまでの雰囲気はまるで残っていない、いつものドジっ子眼鏡先生に戻っていた。

セシリア達の相手は山田先生らしい。

「安心しろ。今のお前たちならすぐ負ける」

織斑先生の口振りといい、さっきの狙撃といい、山田先生の實力

は相当の様だ。

「手加減はしませんわ!」

「さっきのは本気じゃなかったしね!」

「い、行きます!」

3人の戦いが始まると、織斑先生の指示でシャルルによる山田先生のIS、“デュノア社”製『ラファール・リヴァイブ』の解説が始まった。

さすがはシャルル。自分の父親が経営する企業のISの説明は上手だった。その説明の一区切りがついた所で、勝負のケリが着いた。

山田先生は何ていうか……巧かった。

そして、負けた2人は責任の擦り付け合い…実力は申し分ないが、こんな態度が2人の評価を下げた事に気付くのだろうか?

模擬戦の後、専用機持ちが中心となって実習が行われた。行われたのだが…

『織斑君、一緒にがんばろう!』

『デュノア君の操縦技術が見たいなあ』

「私を改造してください!」

「ザラさんの実力が知りたいです!」

「ああ…だが、それより今は実習が優先だ」

一夏、シャル、俺の所に女子が集まる。俺たちは困惑している。一部の返事は控えさせて貰った。ディオキアの基地のミリアのライブに集まったファンみたいな勢いだ。

（ヒロは…『俺、女子に怖がられているんだ』とか呑気に言っていたが、大丈夫なのか？）

この学園でそんな状況で生活していくのは厳しいと思う。肝心の弟分はというと…

『失敗したら、どうぞ叱って、罵って下さい！』

『その際はこれを…』

（俺には何も見えなかった…4、5人の女生徒が“ムチ”をヒロに渡そうとしていたなんて…）

お姫様抱っこや山田先生がどうか、他のグループ（ヒロ以外の男の）にも影響が出そうだったが、織斑先生がそれを沈めたりもしていた。

とまあ、皆に様々な刺激を与えつつも訓練は終わり、昼休みになった。

その後は楯無と今までの詳しい話を聞く為に理事長室に行った。襲撃させたゴーレムは機能中枢まで破壊、その後現れたゲルズゲーは何もかもが不明という事。結局、先日頂いたデータと比較しても何の進展は無かったようだ。

後、別れ際に楯無に言われた事が気になる。

『ちょっと、ヒロ君と喧嘩しちゃって……今はその…他人行儀みたいな感じなんだ…長引きそうだから、その…合わせてくれないかな』

まあ、2人の問題なので、余り口出ししないでおこう。楯無もあ
あ言っている事だし。

どうりで、ヒロが彼女に関する話を出さない訳だ。

最初は

『楯無に関する記憶が無い』

と思っていた。

「ええと、本当に僕が同席してよかったのかな？」

相変わらず遠慮深い態度のシャルルだ。昼に大勢の女の子から誘われていたのだが、それを俺や一夏には到底不可能な態度で相手を傷付ける事無く、その誘いを断っていた。『アスランなら出来るんじゃないか？』とか思った。実際にやって貰いたい。肝心の彼は用があるようで、別行動だ。

そんな感じで今は屋上でお昼を取っている。

「それは俺も何だが…」

「男同士仲良くしようぜ！……………」

一夏が『1人はキツイ』とひっそりと話してきた。それもその筈。今は“アスラン以外の専用機持ち（1、2組の）と篠ノ之さん”というメンバーだからだ。

珍しく皆、昼を作ってきたかららしい。そのせいか、いつにも増して殺気立っている。ちなみに俺もだ。今日は“作る”と決めていたおいたので、皆作ってきたのは何か驚いた。

そういう日は屋上で食べる事になっていたので、皆が屋上に来たのも驚いた。

それで場所を変えようとしたが一夏に止められた。かなり困る。

今いる女子とは何かとあった。セシリア達、専用機持ちとは例の新聞と模擬戦（初戦以外は負けてる）とか。篠ノ之さんとは模擬戦関連で色々キツイ。

それにシャルルとも更に気まずい事になってしまった。

（原因が解らん…）

それは午前の訓練が終わってからだった。

「い、いいからいいから！僕が平気じゃないから！」

とか色々言われ、俺たち3人は先に着替えて戻る事にした。

「ア、ヤバイ……忘れ物した……」

俺はその事を2人に告げ、更衣室に戻る事にした。

（アレが無いと……あまり物が見えないから、キツイ）

今、思い返してみれば、後で取りに行けばよかったと思う。

更衣室に戻ると、

「ヒ、ヒロ！？どうして？」

今日聞いたばかりの転校生の声が聞こえてくる。案の定、シャルルがまだいた様だ。

更衣室の奥に人影が見える。

「その“声”はシャルルか。すまないな、忘れ物しただけだから、すぐ済む」

「そ、そう……」

そういつて例のブツを手に入れ、すぐ更衣室を後にした。

（アレは何だったんだろうな？）

シャルと思われる人の“胸部”に何やら巻いてあった。

（やっぱり、何か見られたくない理由があったようだ…あとで謝らなきゃ…）

「ヒロ食べないのか？」

「いや、大丈夫だ…」

（はつきり言って、空気が…）

一夏以外からの視線がグサグサと刺さってくる。

「お、炒飯か！一口くれないか？」

フタを開けると、一夏が反応してきた。中華料理だからか鳳さん、何故か篠ノ之さんも微かに反応していた。

「別に構わないが…『うゝん』…ってもう食べてる」

「しっかり味がついてて旨いな」

「一夏、君の味覚はおいしいんじゃないか？」

パンもあるので、炒飯の塩分はかなり抑えた。醤油もちよつとしか使ってない…旨いと言われて嬉しいのだが、一夏の味覚は明らかにおかしい。

「いや、前にほうく……………モゴモゴ」

「わたしは弁当1つでは足りないからな、少し頂こう」

「わ、私も久し振りにお米が食べたいな…っと思ってたのよ！」

さつき反応した2人が見事な連携で一夏の口を塞ぎ、俺の弁当を奪った。

「い、意外とやるじゃないか…」

「たしかに味が薄いのに、なかなかやるわね。なかなか」

（ん？炒飯に何か因縁でもあるのか？）

「“有り合わせ”で“適当”に作ったのに、そんなに褒めてもらえるとありがたいよ」

積年の恨みと皮肉を込めて2人に言い放った。

悔しそうな表情の2人だったが、“何か1つ”でも勝てる事があるのはいいな。

炒飯が無くなったので、惣菜パンの袋に手をかけると……

「な、何？」

セシリアが惣菜パンに目を奪われていた。

「な、何でもありませんわ！」

そして、袋を開けると、またセシリアがこっちを見ていた。

「あげるよ……」

「ま、まあ、くれるというのなら貰って差し上げますわ……それでは何ですか？」

「ピザパンだ…名前の通りのパンだよ」

「そ、そうですか……では、泉谷さんもお1つどうぞ……ほんのお礼ですから」

ヒロはサンドイッチを、セシリアはピザパンを黙々と食べていた。

（俺でも作り始めた時はここまでは…さすがに…）
「なかなか面白い“BLTサンド”だ」

（ヒロ！大丈夫か！？）
（アンタも味覚がおかしいんじゃないの！？）

一夏と凰さんが俺の心配をしてきた。
それもその筈だ。見た目が良かったが…味がその、凄い。どうや
ったらサンドイッチでこの味をだせるのか聞いてみたいくらい…謎
だった。

とんでなく“甘い”のでだ。

（2人とも……食べ物大切にしない奴は豆腐の角に頭をぶつけ
ればいいよ）

“食べる”という行動は人が生きていく為には必要な事なんだ。
それをマズイからという理由で無碍にする訳にもいかない。

“生物兵器”と化してないだけでもよしとしないと。

将来的にセシリアの手料理を食べるのは一夏だろうから余り関係
ないし、俺の意見なんて聞き入れないだろうから何も言わなかった。

何よりも、女子の手料理だぞ！妙な事を言うわけにはいかない。

「こっちのパンもなかなかおいしいですわ…」

惣菜パンの味に納得が言っているのは表情を見れば納得だ。お嬢様といえど満足できる一品のようだ。その証拠に…

（おい、一夏…セシリアの頬を見る）

（頬って？…ああ、分かった。でも何で言わないんだ？）

（一夏が言った方がいい）

（ん？…まあ分かった）

一夏にひっそりと話す。

「セシリア…ちょっといいか」

「い、一夏さん！？何を？」

「ピザのソースがついてる」

一夏はセシリアの頬についていたソースを指で拭い……舐めた

「これも旨いな！」

「…ただの惣菜パンだ」

（さすが一夏だ。セシリアがどうなっているかも知らずに…）

俺の目の前には一部が金色のリンゴ飴がある。

そしてセシリアはパクパクと金魚の様になって動かなくなり、パンを落と…さなかった。

「ふうーセーフだな…で、どうする？このパン」

（うーん…よし！）

「一夏が食べてもいいよ」

「おお、サンキュー。まだ足んかったんだ」
そういつて一夏はパンを『セシリアの食べかけ』を食べた。

（まさか、何の躊躇もなく食べるとは…）

ちぎりながら食べているので、少しは気遣っているのかもしれないが、シャルルも驚いている。あの2人は…炒飯と戦っている。

「これも旨いな！」

「い、いい、一夏さん!？」

金髪のお嬢様の蒸し焼きが出来た。

（一体なんで？）

「ええつと、きよ、今日も嬉しいお知らせがありますまた1人クラスにお友達が増えました。ドイツから来た転校生のラウラ・ボーデヴィッツヒさんです」

今度は明らかに軍人みたい（出会った当初のアスラン）な雰囲気
の転校生が現れた。

「…」

「…挨拶をしろ、ラウラ」

「はい、教官」

無言だった彼女が織斑先生の一言で語りだす。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

女子にしては凰さんくらいの背だが、長く綺麗な銀髪に左目に黒い眼帯があつて、それが軍人らしさを際立たせる。

似たような雰囲気を持つアスランを見ると、何やら思いつめた表情で考え事をしている。教室に来た時からあんな調子だ。朝、職員室に用があるとの事で、下駄箱で別れた。それから何かあったのかもしれない。

「……」

「あ、あの、以上……ですか？」
「以上だ」

転校生は一夏を見ると、

「！貴様が——」

パシンッ！

一夏の頬をはたいた。

「私は認めない。貴様があの人の弟であるなど、認めるものか」

（はあゝ何で私だけ2組なのよ…）

一夏とはお互いクラス代表という立場なので、クラスが違っても
第とセシリアとはその分、互角だと思いたい。

大体何で、1組は専用機持ちが5人もいるのか分らない。男2
人にイギリスの代表候補生。昨日また2人の専用機持ちが、しかも
それが男だなんて…

（かつたるいなあゝ……っ！？）

今日もいつも通りの朝のSHR……ではなかった。

「「えっ！？」」

「みなさん、注目してください」

動揺がクラスメイトに見られたので、すかさず、担任が注意する。

それも領ける…何せ転校生は“男”だった。

「ドイツから来た、カガリ・ユラ・アスハだ。よろしく頼む」

「やつ…」

「ん？」

カガリと名乗った転校生は教室の妙な空気に戸惑っていた。

「「「やったー！」」」

「私たちの世にも春が来た！」
クラス

「はあゝ！？」

転校生来日！2（後書き）

ピザパンじゃなくて、ピザにしたかった…

雨降って地固まる？（前書き）

やっと次が出来た…ちょっと、イヤ、かなり強引だった…
今回を書いてて改めて思った。文才が欲しいって…

とうとうEXVSにX1フルクロスがきた！

このまま、知名度が上がっていけばクロボンのアニメ化が期待できる！

てか、なんでラファエルなんだ…リボーンズガンダムを出してk…

フォビ見たいな感じでスターゲイザーを…

アシストに宮野を使えば、一瞬だが、宮野だらけの戦闘をつくら

…

雨降って地固まる？

（明らかにおかしい…）

シャルルが来てから2日目、ドイツからの転校生、ラウラ・ボー・デヴィツヒが来てからだ。

ルームメイトでISとかでの師匠でもあるアスラン・ザラの様子がおかしい。

その日は気にも留めなかったが、その次の日に理由が発覚した。

『アスランがよく2組に出入りしている』たしかに休み時間の時は見なかった。昨日は余り気にもならなかった。

『2組にも“男”の転校生が来た』

その人もドイツ出身らしい。ボー・デヴィツヒさんが来た日は一夏が殴られた事が気になっていて、一日中集中出来なかったので、他のクラスの事は分からなかった。

そして、何より

『2人は知り合い』

という3つの事が分かった。

（思い立ったが吉日、その転校生を見てみよう）

休み時間は色々あるので、昼休みに行動する…そう思ったのは俺だけじゃなかった。先に動いたのは、相変わらず思いつめた表情の

アスランだった。

『k…g…リ…aなしがある』

『ああ、わかった』

アスランは2組からある人物を呼び出し、屋上に向かった。

（あの人って、まさか！？…あれ？でも、女性だった筈だけ…）

アスランと一緒に歩くのは左目に眼帯をつけている金髪の転校生だ。聞いた話が本当なら、あの方は“男”。けど、夏の“あの出来事”で見た時は“女”だった。

「カガリ、どうしてだ、どうして君が…」

「アスラン、昨日も言った筈だ。私にはやる事がある」

強く真っ直ぐな瞳でアスランに語りかけてくる。

（俺の知っているカガリがここにいる。それは嬉しい事のはずなのに…）

「それが…それが軍に所属して、兵器を扱う事なのか？」

「ああ…私は今、ドイツの代表候補生で……………」

これも昨日と同じだ…言っている事は事実だろうが、明らかに何かを隠してる。

昨日、職員室で彼女を見た時、自分の目を疑った。織斑先生から『2組にカガリが編入した』という事を聞きだした俺は休み時間の度に話をした。

はぐらかされてばかりだったが、放課後にも会いに行つた時にカガリがラウラ・ボーデヴィツヒと一緒にいる時に衝撃の真実を聞かされた。

『貴様、アスラン・ザラと言つたな。私の部下に何の様だ?』

織斑教諭がドイツ軍にいた時の知り合いという事は、彼女は軍の関係者という事になる。

『部下…だと?…カガリ、どういう事だ?』

『アスラン…それは…』

カガリがバツの悪そうな態度をとっていると、

『アスハは我、ドイツ軍IS配備特殊部隊“シュヴァルツェ・ハーゼ”の隊員だ』

ボーデヴィツヒがこちらにさつきを向けながら言い放つ。その後に『私はその隊長だ』と付け加えたが、そんな事はどうでもいい。

“カガリが軍に所属している”その事実が俺を困惑させる原因となっている。指揮官ならまだよかった。専用機持ちらしいので、その可能性はありえない。

「アスランに会えた事は本当に嬉しい。だが、今は“元の世界”に戻るよりもやるべき事がある」

（俺も同じだ…だが、カガリが銃を取る事を選んだなんて…）

結局今日もカガリがやろうとしている事とその理由を聞き出せなかった。

「——ン」

今後の為にも何としても聞き出さないといけない。

「アス……ン」

だから、今はそれ以外の事に構っていられない……

「アスランってば」

「ヒロか…どうした？」

「いや、そのF91の整備を手伝ってもらおうと思って……」（こんな時に…！）

「いい眺めだ」

ヒロは第2アリーナの中央で大の字になって夜空を見ていた。

『それ位1人で出来るだろう！』

アスランに怒鳴られたので1人で部屋を後にしたヒロは、今までの模擬戦等のデータが入ってるノートPCを持って今ここにいます。

整備の手伝いなんて嘘だ。アスランに言われるまでも無く1人でやれる。ISの操縦よりも整備の方が物覚えが良かったのは自分でも驚きだ。元々、整備や開発が目的でオーブ付属の学校を受けたし、機械をいじるのも意外と楽しかった。

それに何より、“F91”は自分の“相方”だから。

よほどの事が無ければ他人にいじられたくない。覚えるまでは他の人にも手伝ってもらったりもしたが、もし何かあったとしても八口に手伝ってもらえば何とかなる。

とにかく、整備は1人で出来る。アスランを誘ったのは気分転換にでもなればいいと思ったからだ。

転校生のカガリ・ユラ・アスハさんとのやり取りを見て思った事は『アスランに対してでも譲れない事』があるって感じた。

アスランがずっと考えているのは分かっていたが、相手が話す気は無い感じだから進展は厳しい。

それなら何か気の利いた事を言えれば良かったが、何も思い付かなかった。結局、去年の夏と同じようにしてみたが、今回は訳が違った。探していた本人がいるのだから…

こんな時に、困っている恩人の手助けが出来ないのが悔しい。

まあ、とりあえず部屋に戻っても気まずくなるだけなので、どこかでデータの分析をする必要がある。

とりあえずアリーナを出て……

「こんな時間に何しているんですか？」

ジャージ姿の山田先生がいた。真剣な眼差しでこっちを見てくる。
「せ、先生……あの…その、ちょっと寝れなくて…」

「だからと言つて…『あ、先生！』…な、何ですか？」

「じ、人生相談！」

「人生相談ですか……」

（アスランがカガリさんとの事を聞くつもりだけど、どう聞くべきか…？）

「ど、どんな相談でしょうか…？」

「先生は異性と喧嘩してしまった時はどうしますか？」
(ちよつと違うけど、大体は合っている筈…)

「そ、それは…こ、ここ、恋人…ですか？」

「まあ、そんな感じです…」

(これも合っている筈…)

「だ、ダメですよ。泉谷君！相手は大切にしないと！」

「…え……………って、オ、オレじゃないですよ！」

「そうですね！泉谷君に恋人が出来るわけ無いですよね！」

(断言しなくても。オレだってその気になれば…やっぱりムリだ…)
こんな世界情勢じゃなければ、と思うけど…

(オレは中身が酷いからな～)

そうなったのも女性有利の政策なんて作って女尊男卑にするから悪い。街中では男がパシラされるのなんて珍しくないから。責任転嫁したくもなる。でも、ISが原因でもあるんだと思うと何とも言えない。

人生の先輩は……

『ふう、良かったですよ』

とか言いながら地面に座り込んでしまった。

(相談相手を間違えた……かな？)

それは最初だけでした。場所を変え、話をちゃんと（必要最低限）すると、年長者らしい返答が聞けた。

先生はそういう体験は無いと言っていたのは余り気にしない事にした。

結局、当人達の問題なのだから、しばらくは様子見という事になった。考えてみれば急ぎすぎだった。

「それじゃ先生、ありがとうございました」

「泉谷君、今から部屋に戻るんですか？」

「それ以外何するんです？」

「えーとですね…泉谷君がこんな時間に一人で寮をうろつくと、他の生徒に危険が…」

「そんなことは…『ダメです！』…なら、どうすれば…」

（どうしてこんな事に……）

今オレは“教員用”の部屋のベッドで寝ている訳だけど、隣には…

（でか、先生が自室まで同行してくればよかったのに…）

「——もう、いろいろふれすよ」

とか訳の分からない寝言を発している山田先生がいる。あの後、ベッドが1つ余っていたのでそこで寝かせてもらう事にしたのだ。

（強制的に…）

だが、何故か寝られない。もう横になってから3時間以上はたった。

（5時近くだろうか…てか、5時過ぎてるよ…）

鳥の鳴き声も聞こえ、カーテンも少し明るくなっている。

隣に優しそうな笑みを浮かべながら夢の中にいる山田先生がいるからだ。思春期真っ盛りの男子がいるのにこの無防備さはどうかと思う。

（先生と生徒だからか…）

……

……

……

（部屋に戻ろう）

山田先生が寝ているなら何の問題も無い筈。何故すぐ気がつかなかったのだろうか…はあ。

先生にお礼の手紙を書いてその部屋を後にした。

「k…gar…カg…i」

自室に戻ると、アスランがベッドで寝ていた。何やらうつなされている感じがした。

結局見守っているしか出来ないのは悔しかった。

ちょっと一仕事して、横になって寝た。

（昨日もダメだったな…カガリのやろうとしている事に俺では力になれないのか？）

カガリから話を聞かない事には何も進みそうに無さそうだ。

（ヒロにもキツイ言い方をしてしまった…）

彼はいつの間にか帰ってきて寝ている。夢中になるといつまでもやってそうで不安だった。が、ちゃんと戻ってきたようだ。

久々に会った時には整備も一人で出来る様になったのには驚いた。授業中もかなりの頻度で整備マニュアルを読んでいたかららしい。本人は『織斑先生にバレそうになった時もあった』とか笑いながら言っていた。

『機械をいじるのも意外と楽しい』と言っていたから、ISの整備も似た様な感じなのだろう。

訓練の時から思っていたがヒロがここまで“IS”に関して真剣（整備だけじゃなくて、操縦も）な理由を俺は知らない。

何かしら秘密があるのはお互い様なので“まだ”聞く気はない。

IS学園への入学も強引だったとはいえ、断ろうと思えば、断れた。

（その時は…まあ、考えるのさえ恐ろしいが…）

だがヒロは入学を選び、ISを本格的に取り組んでいる。彼なりの目的があるのだろう。

（ん？…もく…て…き？）

カガリもここにいるのだから“IS関係”の目的である可能性が高いのではないか？

それなら幸いにも『特記事項第21』による、強引な国家・組織・団体などによる外的介入は許可されない。なら学園に在学の間、つまり3年の間に聞き出せばいい。

（早いに越した事はないが、カガリの行動を見て。それからだ）

解決したわけじゃないが、今までよりは幾分か視界が広がった気がする。

カガリの事になると『周りが見えなく』なったり、『180°。雰囲気が変わる』とかこっちの世界にくる数週間前にもラミアス艦長やメイリンにも心配された。あとメイリンは『カガリさんが羨ましい…』って言うっていた気がする。彼女はたまに予想もつかない事（グフで逃走した時とか）をするから、その発言も今の俺では理解できそうに無い。

ロアノークいやフラガー佐にはからかわれたりもした。今回のヒロミたくキツイ言い方をしてしまったのを今でも覚えている。それもあの人のやり方だったのだろう。

（ま、まあ、ともかく…俺も自分のISの整備をしないと）

時計の短針は6時過ぎをまわっていた。

気持ちよさそうに寝ているヒロを起こさない様に準備をして部屋をで……る前に机の上に1枚の書置きを発見した。

「ヒロか…」

『アスランへ

相談したい事があります。

ある友人が対人関係で悩みを抱えているようですが、俺では力になれそうにありません。

時間が解決するのを待つ事にした方がいいでしょうか？』

（さすがにバレてたよな…その上での昨日話しかけてきたのか）

アスランは文面を読むにつれ、頬がゆるんでいった。

「……よし、これでいいな。行くか」

「しまったあああー！」

携帯の時計は∞？と0？とZ？が映し出されていた。それは8時20分になった瞬間だった。

（20じゃなくて02がよかった…この違いはでかい）

いつも規則正しい生活をしているルームメイトは…ベッドがもぬけの殻だ。

（嬉しいような悲しいような…）

アスランも知っているとはいえ、寝起きの顔を見られるのはイヤだけど、1人で先に行ってしまうとは。

ともかく、急いで着替えると鞆を片手に部屋を飛びださせなかつた。数時間前に書いた書置きに変化があつた。早速それを手にとつた。

『その友人ならきつと大丈夫だ』

アスランの字でその一言が書かれていた。

「良かった…」

たった1晩であんな状態からどんな変化があつたのか気になるところだが、“今”はそれどころではない。

全力で寮を、校舎を駆け抜け、教室を目指す。まるで…

「俺は風になつて…」

が、目的地にたどり着いた先に待っていたのは

パアアーン！

「なるな！馬鹿者が！」

（なれなかつた…）

厳しい現実だけだった。

一夏は笑い、他の女子は沈黙、中には笑いを堪えている者もいた。アスランも笑っていた。彼ならそんな姿も絵になる。

それから何事も無い授業が続いて、放課後になった。

「ヒロは今日どうする？」

「スマン、一夏。今日は遠慮しておく」

一夏達との訓練は実のある内容になるのだが、今は昨日できなかった事をやる方がいい。

何より、後ろにいる方々（剣士とスナイパー、廊下からはドラゴン）の視線が怖い。唯一の良心であるシャルルも何故か、気まずそうにこっちを見てくる。

そういう事なので、俺は戦闘データの整理と今後の大会、『学年別個人トーナメント』の対策も兼ねて第2整備室に向かった。

「ヒサシブリ、ヒサシブリ！」

「シィ……ハ口、静かに」

“まだ”誰もいない整備室にハ口の機械的な鳴き声が響く。

アスランに一応許可は貰ったが、“絶対に八口を見られない”という条件で借りてきた。

八口の力を借りる為とはいえ…

（これはやっぱり、厳しいかもしれない…）

が、そんな事を言っていられない。今の企業『オーブ』で今までの『負け試合の傾向にあわせ』、『俺が使えるような』武器のデータをノートPCにピックアップする。

試合のデータは休み時間中に終わらせた。一応毎日やっていたので、負けた試合を纏めるのは意外と早く終わった。

結局、『ビームサーベル』は扱いが止められているので、それ以外の近接で効果が高そうな武器を今度使ってみることにした。

中距離以遠の射撃武器は一通り揃っているし、負けパターンの大半が近接戦闘だったからだ。

- ・スレイヤーウィップ
- ・スクリューウェップ
- ・ガンランチャー

『散弾ではなあ！』

どこから何かが聞こえてくる。

（ハ口？いや、さすがに…とにかく、ひるませたり出来ればいい）

改めて、3種類の武器からどうするか考える。

（ムチにするか、弾幕をはるか…てか、選択肢少ないな）

アンカー系もあつたけど、難しかったのでやめた。

（ムチには苦い思いが…俺がムチを使つてたら、皆に何か言われそうだから…）

単純な話…『やられる前にやる』って感じで、『近づかれる前にやる』。

「うーん、どーしよ、どーする、どーすんの俺？」

余り悩んでもいられないので、ハ口を介してシミュレートしてみる。

ムチ系から、唯のムチでやってみる。

5分後

スカッ！

ドガッ！（巨大な緑色のハ口にタツクルされる）

『ミッション、終了』

「ハズレ、ハズレ！ヘタツピ！」

（リーチが掴みづらい。いきなりは難しいか…）

20分後

スカッ！

ガンッ！（巨大なハ口な緑色のボディにムチを装備していた自機の右腕が当たる）

ギューーン！（ハ口がどこからか出したドリルで攻撃してくる）

『ミッション 終了』

「ヘタッピ！ヘタッピ！」

（難しい…遠いと当たらないし、近すぎたら意味ない…てか、何故ハ口が相手？）

2時間後

ザシュッ！

ムチによるなぎ払いがハ口の一部を捉えた。

「カスッタ！カスッタ！」

「やったあ！疲れた」

PCとハ口にかじりついていたので、一気に疲れが出た。いきなり接近戦メインなんていつもより疲れる。

（一夏もアスランも良くこんな状況で戦えるよな）

後者はどの距離でも戦えてる気がするが…

「残りはまた後。5分休憩」……すうーすうー」

「命中率…イチパーセント、1パーセント、1%」

ハ口の結果報告は暗がりの整備室に空しく響き渡った。

（姉さんに少しでも…）

髪はセミロングで癖毛、眼鏡を付け、右手中指はクリスタルの指輪をつけた少女が第2整備室と書かれたドアの前に到着した。

世界に驚愕を与えたIS初の男の操縦者『織斑一夏』と彼の専用機開発に人員を割いたお陰で、彼女の専用機の開発が滞ってしまった。

それを彼女自ら組み上げる事にした。姉がそうしているように…その姉は『夏休み中には完成しそう』という事を、風の噂で耳にした。実戦経験も自分で作った専用機で積める。

（難しい事なのは分かっている。いつ完成出来るかも分からない。けど、やり遂げなきゃ…）

つい先日届いたその作業をすぐに始めようとしたが、書類やら何やらで結局今日になってしまった。時間は19時前だったけど、少しでもやっていく事にした。

パシユツと自動ドアが開く。これから困難な道の第1歩を踏み出す彼女に最初に訪れたのは…

『生きる！！』

整備室内から響く叫び声だった。

「…えっ!？」

一瞬たじろいだ彼女だったが、すぐに周りを見回す。

「誰もいない…」

それが余計に状況を悪化させる。

「……あっ」

肩を小さくしながらも入る彼女は先程の原因を発見する。

「床で寝てる男の子がいる」

気持ちよさそうに寝ている男子生徒がいる。彼の腕には白い腕輪があり、その傍らには赤紫のボールが転がっている。

後者はどこかで見たことある形の何かだったが余り気にならなかった。前者がある人物を連想させる。

「泉谷……ヒロ」

彼の事は学内の新聞やクラスメイトの会話から少し知っている。悪魔だとか何とか、要するに『危険人物』らしい。

「すうゝすうゝ…ムニヤムニヤ…」

「……………かわいい」

意外と可愛らしい寝顔の彼を見ると、心が和む気がした。

起こさないように部屋のドアに向かう。そして…

『うるさい！知ったことかそんなもの！俺は生きなきゃいけないんだ！』

振り向いた先にはさっきの寝ている人が目を覚ましそうなくらいだ。なのにまたも叫び声が聞こえた。

（もしかして…）

彼女は今までの状況を整理する…

「ねえ、ちょっと…」

「n…え…t…o…」

「うゝん」

「……起きて…」

「ハアツ!？」

突然の来訪者に意識が覚醒していく。さっきまでどっかの島にいた気がする。けど、今は見覚えのある場所。

(夢か…)

「ねえ、ちょっと聞きたい事があるんだけど…」

目の前には見たことある様な無い様な水色の髪に眼鏡をかけた女の子がいる。

「な、何…かな？」

(ハロがない…マズイぞ。アレには色々なデータとかあるんだよな…中身を弄られる訳には…)

背中からいやな汗が出るのを感じる。

詰め寄ってきた女生徒はポケットから携帯を取り出し、ある画面を見せてきた。

「君はこのアニメ好きなの？」

「…はっ？どうしてそんな事を？」

そこには数年前に放送されていた某アニメに関する画像が表示されていた。

「さっき寝言で叫んでた」

「…なっ！？」

（そ、それはかなり痛々しいって…）

「私にあんまり好きじゃない」

（おいこら！振ってきたのアンタだろ…）

いきなり『好きじゃない』発言をした彼女は…

- ・主人公がアンチヒーローだとか
- ・テロリストが活躍だとか
- ・戦い方が卑怯だとか

おまけに途中で見るのをやめたとか言ってきた。

「最後まで見てからそういう事は言ってくれ！」

意外にもそれから2時間ほど、『討論』いや、自分の好きなアニメに関する話で盛り上がったしまった。

彼女は勧善懲悪なヒーロー物が特に好きらしい。

「じゃね〜」

「じゃ、…じゃあ…ね」

寮で別れて自分の部屋に戻った。

「あれ、アスランがいない…」

もう21時になろうというのにルームメイトの姿が見えない。

携帯には『第1整備室で自身のISの整備をするから遅くなる』
という内容のメールが届いていた。1時間ほど前に。

（放課後になってすぐいなくなってたから気になってたけど、隣で
やってたんだ…）

放課後は一夏達とも訓練をしようと思っていたけど、色々あった
お陰でもうしばらく後になりそうだ。

シャワーを浴び、ベッドにダイブすると、今日の事を振り返る。

「疲れたあ〜…」

アスランや山田先生との事、それにさっきの子といい…

「…あつ、さっきの子の名前、知らないままだ…」

確か、リボンが『青』だったので1年生だった筈。

「同じ学年ならそのうち会つだらう………」

疑念

「こう、ずばーっとやってから、がきんっ！どかんっ！という感じだ」

「何となく分かるでしょ？感覚よ感覚。…はあ？なんでわかんないのよ、バカ！」

「防御の時は右半身を斜め上前方5度、回避の時は後方へ20度ですわ」

3人とも試行錯誤の末、分かった事を言っている。

「率直に言わせて貰う…全然分かん！」

（今日もI S学園は平和だ）

今日はシャルルがきて最初の土曜日。第3アリーナはいつも通り。

『ヒロも何かアドバイスしてくれよ…本当に分からないんだ…』

一夏からプライベートチャンネルで通信が入る。

ヒロは今まで通り、第3アリーナで射撃訓練をしながら一夏達をみている。実際は別の目的があつてここにいる。

『3人とも言っている事は正しいと思うよ。経験して分かった自分のやり方を言っているだけだ。一夏も“自分”でやってたくさん失敗するべきだよ。失敗は成功の何とかって言うからね』

周りに優秀な（はず？）人達に頼りすぎてゐる気がする。最初はセシリアみたいに理論的に始めた頃が懐かしい。そこから経験した事を元に今は半分くらいは感覚でやっている。実際アスランとまともにやった事なんて少なかったりする。銃火器の扱いと模擬戦（アレは一方的な……）くらい。

『はあ…手厳しいな…てか、アスランは今日もいないのか？』

『ああ、そうらしいな』

『アスランとも戦ってみたいんだよな』

アスランは今日もISの整備している。何でも、ここに戻ってくるまでずっと自身のISを整備していなかったらしい。

「一夏、ちょっと相手してくれる？白式と戦ってみたいんだ」

目の前の3人が怒っているのを無視している一夏と通信していると傍観していたシャルルが一夏に話しかけてきた。

「シャルル、分かった。そういうわけだから」

3人から逃げるように笑顔でシャルルの誘いを一夏は承諾した。

そんな感じで始まった2人の模擬戦は…

『こんのおおおお——なにっ!?!』

ってな感じで一夏は成す術無く倒れた。

シャルルはカスタムしたオレンジ色のラファール・リヴァイブを使っていた。

射撃も多分（言うてはいけませんが、相手が一夏では……）上手い。一夏の斬撃（これもだが、一夏は直線的……）も余裕をもってかわしていた。

ISの制御も上手かったので、使っているのが第2世代とはいえ、代表候補生の名は伊達ではないようだ。

（中国とイギリスみたいに実験機じゃなくて、どうしてシャルルは第2世代のリヴァイブなんだ？）

IS学園は新しい技術の実験場みたいな場所だと思うが、純粹にシャルルの実力を向上させる為なのかもしれない。

シャルルの実力を見るのが本当の目的だったわけだけど、余り分からなかったのは少し残念だった。

（もうちょっとしたら、場所変えるかな……）

「つまりね、一夏が勝てないのは、単純に射撃武装の特性を把握していないからだよ」

そんな感じで始まったシャルル先生との反省会はとても分かりやすかった。

（射撃武装の特性の勉強と予想されない軌道で相手に接近しないと）

「一夏の『白式』って後付武装イコライザがないんだよね？」

「単一仕様能力に容量を使っているから、拡張領域バススロットが空いてないんだ」

千冬姉のISと同じ能力だったからか、ヒロに借りたノートにこれも事細かく書かれていた。

「じゃ、ちょっと練習をしてみよう」

話が落ち着いてきたので射撃訓練を試みることになった。

（『白式』って射撃武装がないぞ…）

提案したシャルルはそれを察してくれたのか、さっきまでシャルルが使っていたアサルトライフル《ヴェント》を渡してきた。

「他の奴の装備って使えないんじゃないのか？」

「普通はね。でも所有者が使用承諾^{アンロック}すれば、登録してある人全員が使えるんだよ」

「へえ」

（『白式』は雪片しか使えないから他の武器の事とかあまり考えてなかったな。まだまだヒロのノートに頼る事は多そうだ）

シャルルからライフルを受け取り構えてみる。

（たしか、ヒロはこんな感じで脇をしめて…）

目の端で射撃訓練をしているヒロもハイパーセンサーならはつきりと見える。なのでそれと同じ構え方をする。

「か、構えはこうでいいのか？」

「えっと…うん大体合ってる。撃ってみて」

バンッ！

バンッ！

バンッ！

バンッ！

バンッ！

なかなか真ん中には当たらなかった。

（あと何ていうか…）

「どう？」

「なんか、アレだな。とりあえず『速い』っていう感想だ」

さっきまで練習していたヒロを見ると、全ても真ん中だ。相変わらず上手いと思う。本人は『これじゃ役に立たない』っていうが、でもすごいと思う。

その視線に気付いたのかヒロが訓練を終え、こっちに飛んできて一言…

「俺の構え真似ただけじゃ当たらないぞ」

唐突に言われた。

（てか、ずっと射撃してたのに、気付いてたのかよ…）

「あ、でも剣みたいに練習を積みれば当たるようになるさ」

「いや、射撃武装の練習をしたってなあ…」

「たしかに…スマン」

妙な空気が流れる。

「そういえばシャルルのISってちょっと違うけどラファール・リヴァイブだよな？」

『話題を変える』我ながらいい仕事をした気がする。

「た、確かにどのくらい改造してあるんだ？原型とかなり違う気がするぞ」

ヒロも気にしていたのか話題を加速させる。

名前を『ラファール・リヴァイブ・カスタム？』。

本来のリヴァイブはネイビーカラーに4機の多方向推進翼が特徴的なんだけど、シャルルのはオレンジで背中に対の多方向推進翼が、中央から二つに分かれるようになっていて、全体もシェイプアップされている。

そして4枚付いているはずの物理シールドは全て取り外され左腕に一枚の実体の盾が取り付けられている。逆に右腕はスキンアーマーのみだ

（何より驚いたのが…）

「基本装備をいくつか外して、その上で拡張領域バースロットを倍にしてある」

「倍に！？…ちょっと分けて欲しいくらいだ」

「あはは。あげられたらいいんだけどね。今量子変換インストールしてあるだけでも20くらいかな」

「まるで火薬庫だな。ヒロもそれくらいあるって言ってたよな？」

「“拡張領域”ならそれくらいだよ。今の俺じゃそんなにあっても使いきれない」

ヒロの言う通り、シャルル程の装備を積む意味は余り無いと思う。その上でのこの装備なのだろうから、シャルルの技能が気になる。

「えーと、ヒロのISって…」

「ん？…ああ、F91だよ」

「そ、そう…なん、だ」

シャルルが何やら俯いてしまった。その状態で数分後、シャルルがリンゴ飴みたいに紅くなってしまった。

ヒロがプライベートチャンネルで何か言ったようだ。

（どんなやり取りがあればシャルルがこんな風になるんだ？）

（どうして、どうしてなんだ？）

シャルルと仲良くなる為に何かきっかけが必要だと思って、“男”なら盛り上がりそうな話題を振ってみた。何故か、その手の話題はシャルルにはいつも逆効果だ。

どんな話題なら“男”同士の友情を育めるのか想像できない。現にシャルルは真っ赤になって俯いている。“男”同士の友情は早すぎたのだろう、これからは“IS”の話題から始めるのが懸命かもしれない。

（今更かもしれないけど、まだ間に合うって信じたい。今日はダメ

っぽい。なら明日、明後日とまだ学生生活は長いのだから…いつかきつと…）」

またも妙な空気が流れてしまった。一夏は何故？と言う顔のままだ。

「ねえ、ちょっとアレ…」

「ウソっ、ドイツの第3世代じゃない？」

「まだ本国でのトライアル段階だって聞いていたけど…」

突然の来訪者にアリーナにいた生徒がざわめき出し、妙な空気を発していた俺らもそれに注目する。

「ラウラ・ボーデヴィッヒ…」

「なに、アイツなの？一夏を引っぱたいたドイツの代表候補生って！？」

「織斑一夏…」

ISの開放回線オープンチャンネルで声が聞こえる。

「何だよ？」

「貴様も専用機持ちだそうだな。ならば話が早い。私と戦え」

「イヤだ。理由がねえよ」

「貴様には無くても私にはある」

ドイツ出身で織斑先生の知り合いだけでは一夏に突っかかる理由

が分からない。

が、一夏は思い当たる節があるようだ。

「今でなくてもいいだろ？もうすぐクラスリーグマッチなんだから、その時で…」

「ならば…」

一夏の態度に業を煮やした彼女はISの左肩に装備された大型のレールカノンをこっちに構えてきた。

「えっ!？」

そのまま、そこから弾丸が発射された。

「ちっ!」

「くっ!」

俺がビームシールドで、シャルルが左手の実体の盾を展開して一夏の前に出る。

それで防ごうとしたが、ラウラから放たれた弾丸は別の方向から飛来した何かによって俺たちの目の前で撃ち落とされた。

「……っ!？」「……」

おそらくアリーナにいた全員がその事実には驚き、「弾丸を撃ち落した」者の方向を見る。

鎧武者のような黒い鎧に右肩にはレールガン、左手には6門のガトリング砲がくっ付いている盾…頭部には4本の角のようなアンテナが付いている。

（まじかよ…）

ISを纏ったカガリさんが右肩のレールガンでラウラの放った銃弾を撃ち落したのだ。

「隊長…」

「アスハか…じゃm…」『その生徒！何をやっている！』…ちっ、今日のところは引いてやる」

突然アリーナにスピーカーで教師からの忠告がきたのでラウラはISを解除してアリーナを後にした。

「代表、1組の方々…隊長がご迷惑を掛けてしまつてすまない。それと……」

「な、何かな…？」

カガリさんがシャルルの下に接近して、耳元でなにやら呟く。

「……………っ！？どうしてそれを！？」

「事情は知らないけど、気をつけなよ」

困惑したシャルルの肩にポンツと手を置いて、ラウラを追いかけteいった。

「2人とも大丈夫？」

ヒロは2人の顔を覗きこむ

「あ、ああ、何とも無い」

「…ぼくも」

「それより…なあ鈴。今の金髪の人は？」

大丈夫そうな一夏が凰さんに問いかける。

「ああ、一夏達は初めてか。さっきのはカガリ・ユラ・アスハ。ラ
ウラ・ボーデヴィツヒと同じドイツの代表候補生よ。ちなみにアイ
ツモオ・ト・コ」

「……男!?」……

一夏、箒、シャルル、セシリアが口をそろえて驚愕の表情を浮か
べる。

「そうよ。男で2つ年上、そっちのクラスのアスラン・ザラだった
っけ?ソイツとも知り合いみたいよ」

「……へえ」……

またも4人が驚いていた。

「それよりもう時間よ。今日はもう終わりにしない?」

ちょうどいい時間だったので鈴の一言で今日はお開きとなった。

「さっきは助かったよ。サンキューな2人とも」

「どういたしましてだ」

一夏と更衣室に戻った先でさっきの話をしていた。そんな中、1
人会話に混ざらないで出て行こうとする人影がいた。

「じゃあ、僕は先に部屋に戻ってるね」

さっきまでと何かが違うシャルル・デュノアである。

「えっ？ここでシャワー浴びてかないのか？お前いつもそうだな
？」

「ええっ？」

シャルルがごまかすようにして答える。

「何で俺と着替えるの嫌がるんだよ？」

「あ、べ、別にそんな事無いと思うけど……」

シャルルは気まずそうに一夏に接する。

「そんなことあるだろ。たまには一緒に着替えようぜ！」

「い、いや……」

シャルルは更衣室を出ようとする。

「シャルル、そんな事言うなって」

サイドステップでシャルルの前に飛び出した俺は両手をワキワキ
と動かしながら、シャルルの進行方向を塞ぐ。

「ニシシシー……観念し……」

「うわああああー！」

ガンッ！

シャルルの鋭い蹴りが………ピー（言葉に出来ない場所に炸裂した。）

「ぐへっ！？」

「俺まで痛い……」

シャルルは自ら作り出した一瞬の間にわずかな隙間を縫う様にして外に出て行ってしまった。

「何だつてんだ？」

2人でパシュッと閉まるドアを見ていた。それは2人にシャルルとの間に壁が出来ているかのようにだった。

「正直な話、壁を感じるんだが……シャルルは部屋じゃどうなんだ？（あんな態度だと、部屋ではもっと酷い事になってそうだ………ヒリヒリする）」

「それが………って感じなんだ」

着替えとか何ていうか、シャルルはたまによそよそしくなったりする。

「そうかそうか。ズボンだけでもダメなんだな……うん、分かったぞ」

「分かったって何をだ？」

「シャルルは……」

「シャルルは？……（ゴクリッ）」

生睡を飲む音すら聞こえそうなほど今の更衣室は静まり返っていた。

「シャルルはきつと鍛えられた男の体が実は好きなんだ！もしみたら欲情しちゃうから見ないようにしてるんだ！さっきも一夏見て顔赤くしてたし！」

ヒロが何故か妙に熱く語りだす。

「……はっ？……って冗談だよな！？」

（シャルルにかぎってそんな危ない趣味があるわけ…）

『まさか』と思った俺は、刹那の内にヒロに接近していた。

「当たり前だろ…そんな真に受けないで。男のそんなドアップの顔は見たくない」

ヒロが少し呆れてる。おかげで一瞬焦ってしまった。

「そうだよな」

「そうだよ」

この時は予想もしていなかった。あんな事が起こるなんて…

「なあヒロ、大丈夫…なのか？」

「だ、大丈夫……ぶ……」

パタンっ

必死に耐えていたようだが、倒れてしまった。

（ヒロは凄い…あんなとこ蹴られたのにあそこまで耐えられるなんて）

「考え事か？」

着替えが終わって寮への道に向かっていた。ラウラに出会った日の事を思い出していた。一緒に帰っていたヒロがこっちを見てきた顔はこっちを心配してくれているのが分かるのだが、ヒロの方が心配だ。

彼の名誉の為に歩き方が不自然だなんて言ったりする訳にはいかない。

「ああ、ラウラの事だな」

（俺は顔に出るタイプなのか？いつも考えてる事がばれる気がするんだが…）

「そうk………あっ」

「どうした？………おっ」

噂をすれば何とやらとはこの事を言うのだろう。俺たちの視線の先、寮と学校をつなぐ道のと真ん中にはラウラと…

「千冬姉……『2人ともちよっといいか？』…えっ!？」

「いつの間に……」

後ろには2組に転入したカガリさんがいた。かなり素っ頓狂な声が出てしまった。ヒロも驚いている。金髪に眼帯とはなかなか組み合わせだ。

「場所を変えよう」

元いた場所から少し離れた場所でさっきの2人を見ることにした。

（どうしてこんな場所まで……？）

「これじゃ、何も聞こえない気が……」

ヒロに向かって『大丈夫だ』といいながら取り出したのは盗聴器とその受信機だった。

（さすが軍人とも言っべきか。でも……）

「話は後だ」

俺の質問を分かっていたかのようにカガリさんが制し、3人は耳を澄ませる。

2人の会話が聞こえてくる。

『お願いです、教官。我がドイツで再びご指導を。ここではあなたの能力は半分も生かされません』

ラウラが普段聞いたことの無いような大声で千冬姉に訴えかけている。

どうやらISS学園ではなく、ドイツ軍で指導した方が千冬姉の為になると言いたいらしい。

『——そこまでしておけよ、小娘』
『っ……！』

千冬姉が普段見せないような覇気を込めた言葉をラウラに言い放つ。直接聞いたわけでもないのに俺もヒロも身をすくめてしまった。

『少し見ない間に偉くなったな。15歳でもう選ばれた人間気取りとは恐れ入る』

『わ、私は……』
『寮に戻れ。私は忙しい』
『っ……！』

ラウラが走り去ってしまった。

俺は無意識の内に飛び出し、千冬姉の背中を追いかけた。

「千冬姉え！」
「学校では織斑先生と呼べ」
「え……は、はい……」

一夏は出鼻をくじかれ、さっきまでの勢いは失われてしまった。

（反応早すぎるぞ……）
「下らん事をしてる暇があったら練習しろ。このままじゃ月末のトナメントで初戦敗退だぞ」
「わかってるって……」
「そうか。ならいい」

そう言った千冬姉は踵を返して校舎に戻ろうとする。

「なあまってくれ！さっきのラウラって奴が言ってた事だけど…それってやっぱり千冬姉が2度目…」

『モンドグロッソの優勝』と続けようとしたところで…

「終わった事だ。お前が気に病む必要は無い」

遮られてしまった。

「では…それと、どうやって今のを聞いていたかは知らないが、盗み聞きとは感心出来んぞ」

「……………はい？」

「行っちゃったよ…………」

ヒロはラウラが去り、一夏が飛び出した先を見ていた。

「私は隊長の方に行く。それじゃ」

「あ、あの！どうして盗聴器なんて…」

機器を片付け、立ち去ろうとしていたカガリさんにさっきまで疑問に思っていた事を聞いた。

「すまないな。本当に必要ないと思っていたんだが、色々あつて隊長は世間知らずなんだ。何をするか分からない…アリーナの事もこれのおかげで知ったんだ」

「そうでしたか…止めてしまつてすみません」

「いや、いいんだ。それじゃ」

カガリさんがラウラを追いかけていった。

「ラウラ・ボーデヴィツヒって一体何者？」

「ラウラ・ボーデヴィツヒ…か」

アスランはISの整備を終え、自室のPCを起動し彼女に対する調査を始めた。俗に言う、『ハッキング』だ

「ドイツの代表候補生。ドイツ軍のIS配備特殊部隊「シュヴァルツェ・ハーゼ」隊長。階級は少佐。

専用機はドイツ第3世代機のシュバルツェア・レーゲン。第3世代兵器のAIC通称、慣性停止能力か。
アクティブ・イナーシャル・キャンセラー

接近戦主体の一夏が“1人”では勝つのは厳しいだろうな」

アスランは更に調査を続けていく。

「……………んっ？これは!？」

そんな彼は衝撃の事実を発見した。

『アドヴァンスド
遺伝子強化試験体として生み出された試験管ベビー』

「人の命を一体何だと…」

クローンとして欲望の為に作られた上司と部下、人工子宮から生み出された親友。アスランは元いた世界の事を思い出していた。

『ISの登場により、その適合性向上のために行われたヴォーダン・オージエの移植』

「強くなる為なら何をして…道具として生み出された者ならいいとでもいいのか…」

ロドニアのラボで知った、GAT-X 370レイダーのパイロットやシンが必死で助けようとしていた『ステラ』という少女とその仲間達、地球軍の生体CPU達に対する扱いと何ら変わらない。

『が、不適合により左目が金色に変色し、能力を制御しきれず以降の訓練では全て基準以下の成績となってしまう。この事から軍で出来損ない扱いされる。ISの教官として赴任した千冬の特訓により、部隊最強の座に再度上り詰める』

当時、戦いしか知らず、絶望の淵にいた彼女にとっては『比類なき強さ』を持った織斑教諭が絶対的な存在だったんだろう。

「なるほどな…」

ラウラの調査によって、一夏への憎悪、カガリのやろうつとしている事これまでの疑問が解決されそうだ。

「次はカガリか……」

ドイツ軍のIS配備特殊部隊「シュヴァルツェ・ハーゼ」の隊員。階級は中尉。

「……何っ!？」

更に経歴、適正等を調査しようとする彼の目に『ERROR』の5文字が映し出される。

「専用機は……やはりストライクか……」

第3世代の技術は使われていなく、アサルト・シユラウドの装備にIWSPの盾の情報が映し出される。

PS装甲とビーム兵器のデータは無かった。極秘なのか、カガリが公表していないのかそれは本人に聞いてみないといけない。

「最後はシャルルだな……」

だが結局、シャルルに関しては以前と変わらない結果だった。フランスに関して探りを入れても『フランスの代表候補生が男』、『デュノア社の社長ご子息』くらいだ。

「どういうことだ……」

アスランは天井を見上げながら呟く。やはりデュノア社の社長ご子息の存在自体が怪しい。

「ただいまー」

突然ルームメイトが戻ってきた。すぐさまアスランはパソコンの電源をおとす。

「お、アスランいたんだ。整備はもう終わったの？」

「ああ……」

「どうしたの？」

ヒロが荷物を片付け、こっちを見てくる。

「君は…シャルルの事どう思う？」

（さすがに唐突すぎたか……？）

「ん？…ああ、その事何だけど…気になる事があるんだ」

彼とは転校初日にシャルルとデュノア社に関して少し話をした。
『タイミングが怪しい』と…

『同じ男のIS操縦者だけど、シャルルだけ妙な話があるんだ』と言いながら、携帯を開いて見せてくる。俺やヒロのようなちょっと特殊なテスト操縦者と違って代表候補生は有名人らしい。

そこは数年前から流行りだしたらしい某つぶやきサイトだ。ちなみにヒロはこういった所から情報を入手しているらしい。余り過信は出来ないが。

「このあたり、読んでみて」

アスランは手渡された携帯のフランス語で一杯の画面をスクロールしていく。

ヒロ曰く、『最近シャルルに関する話が多い』でその内容も気になるものばかりだそうだ。

『デュノア社の社長に男の子の子供なんていたっけ？』や『親と全然似てね〜』など書かれていたが、1つ気になる投稿を見つけた。

『昔突然いなくなった女友達にそっくりなんだけど…』

いくつかあった予想の1つが可能性をおびてきた。

「こ、これは……」

「いや〜面白いよな……シャルルが“女”なのかもしれないなんて……ねえ？…アレ？アスラン？」

（また、真面目に考えすぎているアスランに『清涼剤を』と、思っただけなのに逆効果なんだが…）

珍しくネットの情報を真に受けているアスランをずっとみていた。

それは5分だろうか、10分ほど経った頃に変化が起こった。

トンットンッ

アスランは携帯の画面に釘付けなので…

「はいっ！」

ガチャッ

「一夏…どしたの？」

そこには焦点がまるで合っていない一夏がいた。

「いち……か？」

「…ル…に…ngあつた…」

「はいい？」

「シャル…n…ねが…あつた」

一夏がさつきから瞬きすらしないで何やら呟いている。その姿は
さながら、ただの機械のようだ。

「いちかつてば！」

「一夏に何かあつたのか？」

「ああ、何かおかしくなった…」

正気に戻ったアスランが見かねてこっちに来た。

「シャルルに胸があつた」

「は……い？」

「……何だと？」

真実（前書き）

長かった…

AGE見た！敵の方がカッコイイ…

AGEのスパローとタイタスがシュピーゲルとボルトガンダムにしか見えないオレって…

ストーリーは最後まで見ないと分からないけど、絵に関しては慣れるまで時間がかかりそう。（ハンターハンターの声、特にゴンとキラア、ヒソカ辺り…）

真実

ポカツ

「「っ!？」」

「何しやがる！」

「気にするな。何故か叩かないといけない気がした」

ヒロが一夏を突然叩いたのにはアスランと金髪の“女の子”は驚いた。アスランと共に驚いたのは何を隠そう、つい先日転校してきたシャルル・デュノアなのだ。

（このラッキースケベ！礼儀知らずめが！親しき仲にも礼儀有りという言葉を知らないのか！）

一夏から『シャルルが金髪の女の子』だったということの経緯を聞いたヒロは無意識の内に一夏を叩いていた。

2人が聞いた事は一夏が部屋に戻った時にボディーソープが無い事に気付いて、シャワーを浴びているシャルルに渡そうとした時に色々と分かったらしい。

どこかの人が言っていた、『ノックは 人類最大の発明』みたいな事を。

（脱衣所に入る前にノックをするべきだよ！シャルルが肌を誰かに

見られたくないのは一夏だって分かっていた筈なのに…)

などと憤慨していると、

「おちつけ、ヒロ。シャルル、そろそろ、本題に入りたいんだが、大丈夫か？」

アスランがシャルルに“性別”を偽ってまで入学してきた理由を聞き出そうとしている。

「あ、うん。そう…だね」

『話したい事がある』と言われて一夏の部屋に来たわけだけど、シャルルはやっぱ気が進まないようだ。

「どうして君は男のフリをしていたんだ？」

「それは、その……実家の、つまりデュノア社からそうしろって言われてね。その社長…実は僕の父なんだ。その人からの命令でね」

「親が？……どうしてそんな命令を？」

一夏は問い、アスランはいつも通り構え……俺はどうしてそんな事をさせたのか考えていた。

「僕はね…父の本妻の子じゃないんだよ」

「――」

予想外の返答に一夏は絶句し、アスランは静かに構えたままだ。

（それってどんな……）

まるで暗くて冷たい世界に迷い込んだみたいだ。ヒロは話を聞くだけでも何とかこらえた。

「お母さんが亡くなった2年前にね、父の部下がやってきて引き取られたんだ。その後、IS適正が高い事が分かって、非公式だったけれどデュノア社のテストパイロットをやることになってね」

「父に会ったのは2回くらいで会話は数回くらいかな。本妻の人に初めて会った時は驚いたよ。『泥棒猫の娘が！』って殴られたよ。母さんもちよっとくらい教えてくれたら良かったのにね」

シャルルは無理して笑いながら話していた。でも、目が全く笑っていない。

『もう、どうなってもいい』みたいな……そう、数年前の自分を見ている気がしてならない。

それからデュノア社は経営危機に陥り、フランスが統合防衛計画『イグニッション・プラン』からの除名に伴う様々な話を聞いた。

「大体の話は分かったが、それがどうして男装に繋がるんだ？」

「簡単だよ。注目を浴びる為の宣伝。それから——同じ男子なら日本で登場した特異ケースと接触しやすい。可能であればその使用機体と本人のデータを取れるだろう……ってね」

「ということは、やはりデユノア社から……」

アスランが『やっぱり』みたいな感じで呟く。

「うん、君達の専用機、特に“アスラン”のデータを盗んでこいつ言われているんだよ。僕は、“あの人”にね」

「「「……」」」

「本当のこと聞いてくれてありがとう。それと、今まで嘘についてゴメン」

シャルルは本当に自分の事はどうでもいいみたいに話す。申し訳なさそうに頭を下げるシャルルに対してどう接すればいいか全く分からなかった。

「いいのか、それで」

突然立ち上がった一夏がシャルル両肩を掴む。

「それでいいのか、いいはずないだろ！親がいなけりゃ子供は生まれない。そりゃそうだろうよ。でも、だからって、何してもいいなんて、そんな馬鹿なことが…」

「落ち着けて…な？」

かなり力を入れて肩を掴んでいる一夏に落ち着くよう促す。一夏がここまで気持ちを露にするなんて驚いた。そう思ったのはこの部屋にいた皆だろう。

「いちか…」

「……俺も…俺と千冬姉は両親に捨てられた」

「「……………」」

「あ……………」

「俺の事はいい、今更会いたいとも思わない。でも、シャルルはこれからどうするんだ？」

（一夏は凄いな…それとクラス代表決定戦の時にシスコン？とか疑ってスマン）

話を聞いて分かった事がある、

『俺ではシャルルの支えにはなれない』と……

でも、だけど“１つ”だけ言わなきゃいけない事がある。

あまり良くない予想があたってしまった。

似たような境遇を持つ一夏はシャルルの話に憤慨し、それとは口は対照的に顔が真っ青になっていた。

（無理も無いか…）

“今”の家族間は良好だと言っていた。

「どうって…女だって事がばれたから…本国に呼び戻されるだろうね。後の事は分からない、よくて牢屋行きかな」

一夏の拳に力が入るのがはっきりと分かる。

自分の意思を示さず、このままシャルルをフランスに行かせるわけにはいかない。

そんな事をさせたら、己の出来る事をやろうと精一杯だった少女…“ミア・キャンベル”の様になりかねない。

「シャルルは…“フランス”から指示があつたら帰るの？」

最初に口を開いたのは意外にもヒロだった。

「生きる事…人生つてさ、“自分”の思いで前に進まなきゃいけない。それが出来ないって事は死んでいるのと変わらないと思う。でも、シャルルが“ちゃんと”考えての決断なら俺はそれを尊重する」

ヒロが何とか搾り出した言葉はアスランが言いたいことの1つだった。

（彼女の意思を尊重するか…）

そついい残したヒロは部屋を後にする。顔は終始真っ青のままだった。

「たしかに…ヒロの言うとおりだろうな。人生は自分の意思で歩むものだろう。俺たちは学生なんだ、自分の将来についてじっくり考えるのもいいだろう」

（シャルルもこんな生き方はいやな筈だ。“誰かの道具”として生きるなんて…）

アスランは一夏と視線を交わしてから、部屋を出ようとする。

「それと…君たちが親の事をそう思うのは仕方ないが、それでも彼らが君達の“親”という事は忘れるな」

部屋を出る前に振り返って、2人にもう1つの忠告をして今度はそ部屋を出た。

（シャルルの選ぶ道は困難になるだろう…でも、ゆっくりでいい、ゆっくりと歩き出して欲しい）

（2人は本当は何を言いたかったんだ？——考える）

一夏は2人が過ぎ去った後の扉を凝視する。ヒロもアスラン（ヒロが信頼できる相手なら俺も信じる）も何か考えての行動の筈だ。

「僕は一体どうすれば……？」

声の先にはつい数時間前まで頼りになるルームメイトの“少年”の姿がある。真実は儚くも脆い小な“少女”だった。

今にも砕け散りそうな彼女の為に何かしなければいけない、そう思うといつも以上に頭が回転している。

（自分、意思、学生、人生……そうか！）

「——特記事項第22、本学園における生徒はその在学中においてありとあらゆる国家・組織・団体に帰属しない。本人の同意が無い場合、それらの外的介入は原則として許可されないものとする」

「……一夏？」

「つまり——シャルルはここに、“IS学園”にいてもいいんだ。それなら3年間はどこも手出しは出来ないはずだ。それだけあれば、何かを見つけられる」

「……一よく覚えられたね。特記事項って55個もあるのに……」

「勤勉なんだよ、俺は」

こんな時くらい得意げに言ってもいいよな。

（ヒロに感謝しないと…）

「そうだね。ふふっ」

シャルルが心から笑ってくれた様に見えた。それだけ、それだけなのに…

「う……」

（何か、こう、ヤバイぞ…）

（どうして2人ともあんな風に実の両親の事を言えるんだ…そうしなければいけない理由があった筈なんだ…絶対に！）

織斑姉弟は両親に捨てられた。でも理由は分からなかった。それを一夏が語らない理由は知らないのか本当に語りたくないのかの2つだろう。前者な気がするのは親子関係が険悪だという事を認めたくないからだろう。

先に戻ったヒロはベッドに横になり天井を見ていた。

（俺には一夏とシャルルの気持ちは理解出来ない…）

ガチャッ

「アスラン…」

ドアの開く音が聞こえる。現れたのはいつもの落ち着いた表情のアスランだった。

「ヒロ、夕飯を食べに行くぞ」

「…へえ？ちよつと、ちよつと待つてよ！」

アスランはヒロの返事を待たずして部屋を出て行く。

（アスランが戻ってきたって事は解決したのか？——しばらくしたら分かることだからいいか…）

部屋を出ると一夏達の部屋に向かおうとしているセシリアに出くわす。

「あら、2人そろってどこに行きますの？——って、ちよつと何をしますの！？」

アスランと視線がぶつかり、今やるべき事は1つしかないと思つてそれを行動に移す。

「たまにはいいじゃないか？」

「腹減ったんだ」

「私は一夏さんを誘いにきただけで…今日のお2人はどこかおかしいですわ…！」

一夏の部屋に向かおうと抗うセシリアの左手をヒロが残りをアスランがHOLDし、食堂に連行する。

渋々ながらも夕食を共にしたセシリアとはIS関連の話で意外にも盛り上がった。

その後、一夏達に焼き魚定食とオムライスを持っていった。

一夏が受け取る際にシャルルにばれないように親指をビシツとしてきたので、あの話は上手くいったようだ。部屋に戻って落ち着いたところで、1つだけ気になっていたことを人生の先輩に聞いてみる事にした。

「ねえ、アスラン…シャルルの父親ってシャルルの事、嫌いなのかな？」

ヒロが唐突に真剣な眼差しで問いかけてくる。

「どうしてそう思うんだ？」

「あー、えーっと…“もしも”の話だから絶対に怒らないで欲しい！」

真剣な顔も一瞬で、それから『絶対に怒らないでくれ！』とか、『やっぱりいいかも…』などと話すのを躊躇う。

ようやく話す気になったのは5分後だった…

「あんな事をやらせるなら、その…人質とかそういうのを使えそうなの方がいいと思うんだ。IS学園の特記事項を使って批判的な

態度をとつても、脅迫とか出来るし………怒らないでつて！だから、もしもの話だつて！」

目の前の少年はかなり怯えている…余程の顔をしていたようだ

「すまない……」

「仮にもIS関連の企業の社長ならIS学園の事はよく知っているはずだろうし、こうなることは予想できたはずだと思うんだ」

「確かにそういう考え方もあるな。……これはあくまで俺の予想にすぎないが、女尊男卑の風潮、愛人を作っていた事実、それらの事から本妻の女性がシャルルへの扱いを咎める訳にもシャルルを可愛がる訳にもいかなかった。

現状の家族構成で暮らすのは困難と判断した父親は、シャルルをIS学園に送った。全寮制だから自立した生活も友人も作れる。ここならISという繋がりもある、社長としてパイロットたちおやをむすめ守っている、といったところか。表面的にだけでも」

自分で少し強引に聞いておいてなんだが、かなり綺麗な回答をいただけた。自分の求めていたような、大人のドロドロな面を見せないようにしたのはアスランの配慮だったのだろう。

（まあ、正直どうでもいいな…俺にとっては）

他人が介入できる事なんてあまりなさそうだし、やっぱり同じ境遇にない奴じゃ本当の意味で分かってやれそうにない。

（見守っている、いつも通りの態度で……）

意識を闇におと……せなかった。

（…どうしよう！？シャルルが“女”ってことは…やっぱりダメだいつも通りの態度はムリだ…）

余談だが眠れなかったヒロが食堂に夜食を作るついでに一夏達の皿を回収すると、“豪快”に食べられた痕跡が分かるオムライスの皿と“丁寧”に食べられた焼き魚定食の皿だった。

受け取る際に受け取った2人の顔が耳まで真っ赤だった事が関係していたのかもしれない。

（いつぞやの昼みために、一夏がオムライスでシャルルが定食で、実は2人で新婚さんがやるような事を…なわけ、なわけ無い…よな）

真実（後書き）

今期は楽しみな作品（特に日曜日）が多くて忙しくなりそうだ…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1957t/>

IS～戦いの果て～

2011年10月18日03時20分発行